

は或は中の誤ならずやと、第三に中心の語あるより見ても或は然らんと想像する。遐は「箋」に遠と訓す、是れ普通なり。朱子曰く、遐は何なり。「表記」瑕に作る。鄭氏注に曰く、瑕の言は胡なり。不謂矣、君子に遇うては謂はんと欲する所を謂はざらんや、而かも何事も謂はざるは、中心藏之、其の心中に藏すること何事かは分明ならず、必ずや相愛可憐のことならん。何日忘之、忘れざること、思ひ出さざるの意なり。顧氏曰く、詩意雋永、此の四句に至りて極まる、然れども愚説の如きは平直を以て看る、即ち愈よ佳なり、糾纏すれば反て味無きなり、注(朱)に言ふ我中心誠に君子を愛して而して既に之を見る則ち何ぞ遂に以て之に告げざる、此れ正に前二句を解して當に一畫して斷すべし、而して中心藏之將に何れの日にして之を忘れしめんや、此れ正に後二句を解して又一畫して斷す、本自から説くこと能はず、却て何ぞ説かずと云ふ、本自から忘るることを欲せず、却て何れの日か忘れんと云ふ、心頭口裏各の奈何ともすべからざる處あり、唐人慎惱讀曲力を極めて摹擬す、此の妙無きなり。

【評論】隰桑は四章四句を以て成る。「傳」は「傳」の詩に於る宗旨として曰く、此の詩は幽王を刺るなり、小人位に在り、君子野に在り、君子を見れば心を盡し以て之に事ふることを思ふ。婦が夫に事ふること、臣が君に事ふると本同一なり。何ぞ「傳」の如く解するを嫌うて、男女相思の詩とのみ言はん。

白華菅兮 白茅束兮 之子之遠 俾我獨兮
白華の菅兮、白茅をもて束兮、之子之遠し、我をして獨あらしむ、
【句釋】白華は草の名、野菅なり。水に漚さざるが白華にて、已に漚したるもの野菅なり。白茅束兮、茅はカヤなり、白茅を以て野菅を束ぬ。之子は幽王を指す。之遠、俾我獨兮、俾は使と同じ。「箋」曰く、菅は柔忍にして用の中る、而して夏に白茅を取て之を收束す、茅は白華に比すれば脆と爲す。王、申に取る、申后禮儀備る、妃后の事に任じて、而して夏に褒姒を納る、褒姒、孽と爲り、國將に滅びんとするに至る、而して王我を遠ざけんと欲し、我を耦せず、王の意我をして獨居たらしめんとするなり、老て子なきを獨と曰ふ。後褒姒申后及び申后の子宜臼を讒す、宜臼申に走る、此の詩申后の作なるや否やは明白ならず、然れども申后の言はんと欲する所、此の如きに過ぎざるなり。徐光啓曰く、此の詩の比體、它處と同じからず、篇中正比あり、反比あり、暗比あり、明比あり、它處の正比、暗比を盡すが若くならざるなり、首二章は反比にして之を明言す。顧氏曰く、反比は上の二句なり、明言は下の二句なり、下此れに倣へ。

英英白雲 露彼菅茅 天步艱難 之子不猶
英英たる白雲、彼の菅茅に露おく、天步艱難にして、之子猶からず、

【句釋】英英は「傳」に曰く、白雲の貌。朱子曰く、輕明の貌。何に依て白雲の貌と謂ひ、何に依て輕明の貌と謂ふやは共に不詳なり、案するに英は華なり又俊なり、乃ち白雲の見て以て華英なるを謂ふなり。露彼菅茅、「箋」曰く、白雲露を下し、彼の以て菅と爲るべき茅を養ふ、白華の菅と相亂易せしむ。猶ほ天、妖氣を下し、褒姒を生んで、申后を黜けしむるがごとし、別に解する者あり曰く、白雲の微かなるものも、猶ほ露となりて、能く草木を濡すを以て、我が身の獨り、王の惠を蒙むらざるに比す。後説「箋」に比すれば解し易し。天歩艱難、之子不猶、天歩は國歩と同じ、時運と云ふが如し、時運の嘉好ならざるを稱して、天歩艱難と曰ふ、之子は王を指す、不猶は「傳」曰く不圖なり、或は曰く猶ほ如なり。履軒先生曰く、不猶は不若是也、其德不猶と同じ、上文を承けて言ふ、之子雲の菅茅を露するに似ざるなり、傳（朱傳ナリ毛）後説、雲露の之に及ばざるを疑ふの意なり。是れ則ち未だ圓ならず、之を及ばずと言ふは則ち責辭、語切にして意短なり。之を似ずと言ふは則ち是れ怨辭、語婉にして意長なり。説詩者宜しく解頤の味を知るべし。平易に之を示さば、彼の菅茅は雲の爲めに露と云ふ惠を受く、而かも我は此の惠なければ、菅茅にも如かずとなり。履軒の破説は如かずと言ふは味なし、似ずと言はば味ありとなり、再四之を考ふるに風人の旨は怨詞にありて、責詞にあらず、是を以て余亦履軒の説を取るものなり、猶の字を圖と見ずして、不同 又は不若是と見るなり。幽王始め申后の子宜白を太子に立つ、

褒姒を愛するに及んで其の子伯服を立つ、而して申后及太子宜白を廢す、嫡庶顛倒して天下正に危ふし、是を以て天歩の艱難知るべきなり。

滌池北流 浸彼稻田 嘯歌傷懷 念彼碩人

滌たる池も北に流れ、彼の稻田を浸す、嘯歌し傷懷して、彼の碩人を念ふ。

【句釋】滌は水の流るる貌。陳臥子曰く、水の名ならん、案するに「水經注」に酈水西北に注ぎ滌池と合す、滌水又は滌河と曰はずして滌池と曰ふ、水の名とするも大なるものにはあらざるべし。「箋」曰く、豊鎬の間、水皆北流すと。「孔疏」曰く、池は下田水を蓄るの處、池水は當に停ほるべし、而して北流すと言ふは池上豊水を引き、灌ぎ訖りて豊に入て俱に北流するを以てなり、北流は是れ目睹る所、即ち咸陽縣の西北を流る。浸彼稻田、滌池の水は彼の稻田を浸して、以て生殖せしむるの力あり、以て王の恩澤を民に及ぼさざるを反比す。嘯歌傷懷、念彼碩人、「箋」曰く、嘯歌傷懷する者は申后なり、碩人は褒姒其人の言ふなり。申后黜ぞけらるるは褒姒が爲す所、故に憂傷して之を念ふ。朱子曰く、碩人は尊大の稱、亦幽王を言ふなり、言ふところは小水微流も尙能く浸灌す、王の尊大にして反て其の寵澤を通ずる能はず、所以に我をして嘯歌傷懷して之を念はしむるなり。「箋」と「集注」との説以上の如く反對す、申后が傷懷するは一一致するも、碩人を一は王と謂ひ、一は褒姒と謂ふ、今案するに婦人を指して碩人

と言ふの例あるとするも、多くの場合用ひざる所、朱子の説を以て勝れるものと謂ふ可し。或は意ふ碩人は所謂救ひの神を指すにあらざると、必ずしも王と見ざるなり。

樵彼桑薪 印烘于熤 維彼碩人 實勞我心

彼の桑薪を樵りて、印熤に烘れり、維彼の碩人、實に我が心を勞せしむ、

【句釋】樵彼桑薪、樵は采なり、薪の善なるもの桑なりと「箋」に説けり。今日桑は薪として善なるものあらざるも、此の時代は善なるものと爲ししなるべし。印は「爾雅注」に印は猶ほ映の如し、語の轉のみ、女人我を稱して映と曰ふ、其の語に由て轉ず、故に印と曰ふと「説文」に見ゆ。婦人の我に限りて通用せしものならんか。烘は音「コウ」訓「アブル」又「タク」燎焼なり。熤は音「シン」訓「カマド」竈なり、釜無きの竈なり、桑薪の用ふべき所は釜ある竈にて以て烹飪の用に供すべきなり。然るに釜無きの竈に於て火を燃す、徒らに烘るのみ、以て申後の貴きも賤用に供せるに至るを比す。維彼碩人、實勞我心、「疏義」曰く、當に貴を以て我を處すべきに、反つて賤を以て我を待す、怨むべく又思ふべきなり。徐光啓曰く、四章正比して暗に之を言ふ。履軒印字を説て曰く、印は仰の本字なり、薪を以て烘し夜を照す、當に高きに在るべし故に仰と曰ふ。此の履軒の説は「爾雅注疏」を見ざるの説、今全く用ひず、山上に在て之を烘するにあらず、何ぞ高と言はん、發明の説の如くにして反つて非なり。

鼓鐘于宮 聲聞于外 念子懍懍 視我邁邁

鐘を宮に鼓せば、聲外に聞ふ、子を念うて懍懍たり、我を視ること邁邁たり、

【句釋】鼓は鳴の意味。鐘于宮、聲聞于外、宮中に鐘を鳴せば、聲は必ず外に聞ゆ、是れ普通の事に屬す、然るに印は王を念ふも王は顧みずと反興するなり。念子は王を思念するなり。懍懍は「イカル」慍なり、又憂へて伸ざるなり、愁へて樂しまざるなり、王の爲めを念うて愁ふるなり、然るに王は我を視て邁邁たるなり、不顧を邁邁と曰ふ。「疏義」曰く、相通すべくして通せず、怨むべきものなり。徐光啓曰く、五章は反比して明らかに之を言ふ。

有鷺在梁 有鶴在林 維彼碩人 實勞我心

鷺あり梁に在り、鶴あり林に在り、維彼の碩人、實に我が心を勞せり、

【句釋】鷺は水鳥なり、一名を扶老と曰ふ。「本草」曰く、鷺は禿鷺なり鶴に似て大、頭の高さ六七尺、色青蒼にして、頂赤くして亦鶴の如し、頸禿て毛なし、嘴の色黄なり、俗呼んで大鳥と曰ふ。扶老の名は禿して扶老杖の如きより稱せりと言ふ、和名を俗本に「シギ」と稱するは未詳。「埤雅」に鷺性貪惡とあり。在梁、水に在らずして梁に在るは魚を食うて飽満したればなり、上の有字は鳥があるなり、下の在字は鳥が此の處に在るなり。有鶴在林、鶴は水鳥の部に入れども亦林に在るもの恠しむに足らずと雖

も、今鶴の林に在りと言ふは、養ふもの無くして其の饑乏を意味するなり、幽王褒姒を進めて、申后を黜ぞく、之を鶯を養うて鶴を棄つるに喩ふなり。歐陽永叔曰く、二物皆其の處る所にあらざるを言ふ。徐光啓曰く、六章正比して暗に之を言ふ。

鴛鴦在梁 戢其左翼 之子無良 二三其德

鴛鴦梁に在り、其の左翼を戢む、之子良きこと無し、其の徳を二三にす、

有扁斯石 履之卑兮 之子之遠 俾我底兮

扁たる斯石あり、之を履めば卑し、之子之遠き、我をして底ましむ、

【句釋】鴛鴦在梁、戢其左翼、此の解前に在り、今再説の要なし。之子無良、二三其徳、鴛鴦も猶ほ雌雄の倫を守りて、其の常を失せざるに王は此の常道を失せんとす。乃ち王の不良なる、其の徳を一にせず、或は二或は三にして我をして怨曠ならしむ、遂に鴛鴦にも及ばざるとなり、及ばずと解するは風人の旨に非ずとするも事實は其れ然るなり。有扁斯石、扁は「傳」に乗石の貌。王車に乗るに石を履むとあり。朱子曰く、扁は卑き貌。扁は門戸に署する文即ち「フダ」を稱するなり、一葦扁舟なぞと用ふる場合は一箇の舟なり。卑、孤、輕等の意味に通用するものなり、乃ち卑き石あるなり。履之卑兮、王は卑き石を踏む人にはあらず、然るに斯の卑き石を踏む王は即ち卑き人の部類へ入るとなり。「箋」曰く、王后出

入の禮、王と同じ、其の行て車に登り亦石を履む、申后始めの時亦然り、今や黜けられて卑賤なり。朱子曰く、妾の賤しきときは之を寵する者も亦賤しきが如し、褒姒は賤女なり、然るに其の賤女を納れて配偶とする王は其れ遂に賤しき者となる、朱子の説を以て可とす。「箋」説は不可なり、申后の卑きを言ふ語にあらざるなり。之子之遠、俾我底兮、前章と同じ、徐光啓曰く八章正比して暗に之を言ふ。【評論】白華は、八章四句を以て成る。「傳」曰く周人幽后を刺るなり、幽王申女を取て以て后と爲し、又褒姒を得て申后を黜ぞく、故に下國之に化し、妾を以て妻と爲し、孽を以て宗に代へ、而して王治むること能はず、周人之が爲め是の詩を作るなり。

縣蠻黃鳥 止于丘阿 道之云遠 我勞如何 飲之食之 教之誨之 命彼後車

謂之載之

縣蠻たる黃鳥、丘阿に止まる、道の云に遠き、我が勞如何、之に飲ましめ之に食はしめ、之に教へ之に誨へ、彼の後車に命じて、之に之を載せよと謂ふ、

【句釋】縣蠻は「傳」に小鳥の貌とあり。朱子曰く、縣蠻は鳥の聲。韓詩薛君章句に曰く、縣蠻は文の貌、文とは鳥の色を言ふ。以上の三説の中、鳥の聲と爲す説を最下となす。文の形容を以て最上と考ふ

るなり。黄鳥は日本のウグヒスにあらざることは前に辨せり。丘阿、箋曰く、止は飛行して止託す所を謂ふなり、興する者は小鳥すら丘の曲阿靜安の處に止りて託息するを知る。道之云遠、我勞如何、飲之食之、教之誨之、命彼後車、謂之載之、箋曰く、國に在ては卿大夫の仁者に依屬す、末介と爲り從うて道路の遠きに行くに至り、我罷勞すれば卿大夫の恩宜しく如何にすべきや。渴すれば之に飲を予へ、飢れば之に食を予へ、事未だ至らざる時は之に教へ、事に臨むときは之に誨へ、車敗れば則ち後車に命じて之を載す、後車は倅車(車副)なり。朱子曰く、此の章の意は、微賤のもの勞苦して託する所あらんことを思ふ者、鳥の言を爲して以て自から比するなり。『講意』曰く、阿は丘の曲中なり、衝要明顯にあらざるば、身を奮ふの路なきを見る、此の止字は止まる所を得るの止にあらず、乃ち飛ぶに倦んで已むを得ずして止まる也。『孔疏』曰く、遠道に從行する、初め即ち車無くんばあるべからず、故に車敗るるときは之を載よと言ふ、微賤倅車無きを以てなり。倅は「ソヘル」の義、副と同じ。顧氏曰く、『箋疏』の説の如くなれば後車の字方に故あり、命載の字方に情あり、然るに諸家從がはず。履軒先生曰く、後車は從車なり、從者乗る所、孟子に後車數十乘是れなり、副倅の車にあらず。『箋』の副車説は履軒の爲め破却せらる、「アトノ」車に載せよとなり。黄東發曰く、此れ役人黄鳥の止まる所を見て感嘆するなり。履軒曰く、役人道に勞苦して是の詩を作る、言ふところは縣蠻たる黄鳥則ち其の止まる所を得、

我は乃ち悠悠行に勞苦して止息するを得ず、誰人が能く我に飲食教誨し、又命じて之に載する者ぞや、求めて得べからざるのみ、是れ役を怨む者にあらず、救恤を望むなり、其の志亦哀しむべきかな、下章此れに倣へ。

縣蠻黄鳥 止于丘隅 豈敢憚行 畏不能趨 飲之食之 教之誨之 命彼後車

謂之載之

縣蠻たる黄鳥、丘隅に止まる、豈敢て行くことに憚らん、趨る能はざるを畏る、之に飲ましめ之に食しめ、之に教へ之に誨へ、彼の後車に命じて、之に之を載せよと謂ふ、

縣蠻黄鳥 止于丘側 豈敢憚行 畏不能極 飲之食之 教之誨之 命彼後車

謂之載之

縣蠻たる黄鳥、丘側に止まる、豈敢て行くことに憚らん、極ること能はざることを畏る、之に飲ましめ之に食しめ、之に教へ之に誨へ、彼の後車に命じて、之に之を載せよと謂ふ、

【句釋】隅は角なり。豈敢憚行、憚は「ハバム」難なり、「オンル」畏なり、我は豈行役を畏るものならんや。畏不能趨、我は罷勞し車も又敗る、時に及んで疾至ること能はざるを畏るなり。側は旁なり。極は達なり。第一章、阿と何と韻、二章、隅と趨と韻、三章、側と極と韻。

【評論】縣蠻は三章八句を以て成る。「傳」曰く微臣亂を刺るなり、大臣仁心を用ひず、微賤を遺忘し、之に飲食教載するを宥せず、故に是の詩を作る。「箋」曰く、微臣は士を謂ふ、古は卿大夫の出行、士末介たり、士の祿薄し、或は資財に困乏すれば、當に之を賙贍すべし、幽王の時、國亂れ禮廢し恩薄し、大は小を念はず、尊は賤を恤まず、故に其の亂に本づいて之を刺る。

幡幡瓠葉 采之亨之 君子有酒 酌言嘗之

幡幡たる瓠葉、之を采り之を亨る、君子酒あり、酌んで言に之を嘗む、

【句釋】幡幡は翻翻と同じ、瓠葉が風に翻る形容なり。采亨は字の如し。君子、「箋」曰く、君子は庶人の賢行ある者を謂ふ。陳臥子曰く、歌工より主人を指す故に君子と曰ふ、主人自から言ふにあらす。有酒、酌言嘗之、瓠葉と酒とを合して之を嘗むるを言ふ、此の詩は宴會の席にて歌ふなり、瓠葉を以て酒を飲むの肴に充つ、其の薄きや知る可し、然れども主人情厚きは以て相酬ゆるに足るなり。

有兔斯首 炮之燔之 君子有酒 酌言獻之

兔の斯の首あり、之を炮にし之を燔にす、君子酒あり、酌んで言に之を獻む、

【句釋】有兔斯首、「首アリ」と余は訓したるも、其の本旨は首が若しあらばなり、斷定の辭にあらすし

て實は假定の辭なり。炮と燔とは字義に拘泥する必要なし、我が邦語の料理と見れば可なり、炮は毛を取る爲め焼く、燔は正しく火にて焼くなり、兔の首が味美なるが爲めにあらす、寧ろ疎末なる料理なり、前章と同じく主人の情厚は此の中に在るなり。獻は獻酬なり。

有兔斯首 燔之炙之 君子有酒 酌言醉之

兔の斯の首あり、之を燔にし之を炙にす、君子酒あり、酌んで言に之に酔ゆ、

有兔斯首 燔之炮之 君子有酒 酌言醺之

兔の斯の首あり、之を燔にし之を炮にす、君子酒あり、酌んで言に之に醺ゆ、

【句釋】炙は火にて肉をアブルなり、酢は音「ソ」、又「ス」去聲に讀むときは酸なり、「サク」の入聲に讀むときは酬即ち「ムクユ」なり、今は「サク」の音なり。醺は音「シウ」酬と同義なり。

【評論】瓠葉は四章四句を以て成る。「傳」曰く瓠葉は大夫幽王を刺るなり、上禮を棄て行ふ能はず、牲牢饗餼ありと雖も、用ふるを宥せざるなり。故に古の人微薄を以て禮を廢せざるを思ふなり。「箋」曰く、牛羊豕を牲と爲し、繫養者を牢と曰ひ、熟を饗と曰ひ、腥を餼と曰ひ、生を牽と曰ふ、用を宥せずとは自養厚うして賓客に薄し。定宇の陳氏曰く、燕飲の禮、誠に在て物に在らず、此れ聊か一二を擧げ以て其の微薄を見ず、謙の詞のみ、燕飲の詩、盛んに其の豊を言ふものあり、魚麗是れなり、謙して其の

薄を言ふものあり、此の詩是れなり。

漸漸之石 維其高矣 山川悠遠 維其勞矣 武人東征 不遑朝矣

漸漸たるの石、維其れ高矣、山川悠遠にして、維其れ勞矣、武人東征して、朝に遑あらず、

【句釋】漸漸は高峻の貌。維其高矣、山石が漸漸と高峻なり。山川悠遠、悠なるが故に遠なり、遠なるが故に悠なり。維其勞矣、電車なく、汽車なく、山川悠遠にして、征人が勞苦したること彷彿として見るが如し。武人東征、不遑朝矣、武人は軍に従ふものを總じて言ふ、一朝と雖も安息したること無きなり。【箋】曰く、山石高峻、登りて上る可らず、戎狄衆彊にして禮義なく得て伐つ可らざるに喩ふるなり、山川は荆舒の國の處る所、其の道里長遠、邦域又勞勞として廣闊、卒く服すべからざるを言ふ、武人出征、險遠を経歴し、勞苦に勝へずして是の詩を作るなり。

漸漸之石 維其卒矣 山川悠遠 曷其沒矣 武人東征 不遑出矣

漸漸たるの石、維其れ卒矣、山川悠遠にして、曷か其れ沒矣、武人東征して、出づるに遑あらず、

【句釋】卒は卒の本字、山の危峻なるを言ふ。【傳】に卒は竟と、【箋】に卒は崔嵬なり、山巔の末を謂ふ。此の二説共に臆斷、其の誤知り易きなり。曷は【箋】曰く何時なり、何れの時にか道路没んとなり。不

遑出矣、武人が征伐に従事し、但深く入ることを知て、遂に出るを謀るに遑あらざるなり。出は出游にて、出游道遙以て旅愁を消するに遑あらざるなりとの説もあり、余は此の後説を取らず。

有豕白蹢 烝涉波矣 月離于畢 俾滂沱矣 武人東征 不遑他矣

豕あり白き蹢、烝波を渉る、月畢に離りて、滂沱たらしめん、武人東征して、他に遑あらず、

【句釋】有豕白蹢、【傳】曰く、豕は猪なり、蹢は蹄なり、豕は醜穢の處を好む、是を以て蹄常に黒し、然るに今其の白きは何ぞ。烝涉波矣、烝は衆なり衆は羣なり、羣豕が波即ち水を渉るに依て其の蹄白き也。嚴氏曰く、豕性塗を負ふ、常時白蹢の者と雖も亦汗る、今羣然として水を渉る、其の塗を濯うて白きを見る、是れ久雨にして停潦多きが故なり、停潦既に多きは、雨歇みて未だ久しからざる也、月、畢(二十八)に離り、又將に雨ふらんとす。徐光啓曰く、【洪範】に星に風を好むあり、星に雨を好むあり、月の星に従ふときは以て風ふき以て雨ふる。【埤雅】に馬は風を喜び、豕は雨を喜ぶ。月離于畢、俾滂沱矣、月が畢に離るときは雨方に滂沱たりとは宋以來學者の皆稱する所。履軒曰く、月畢に離り、以て雨の驗と爲すは、蓋し當時是の占あり、而して詩人之を稱するのみ、深く其の理を求むべからず、諸家皆洪範を援て星雨を好むと言ひて穿鑿して説を爲す、殊に知らず彼亦占候未數豈眞に此の理あらんや。遂に千古の妄を破し了る、詩人の言を以て直ちに理學者の如く爲すは、眞に一笑を發すべきのみ。不遑他

薄を言ふものあり、此の詩是れなり。

矣、東征して勞苦するは唯其の征伐の事のみ、他事を顧慮するの遑無きなり。
【評論】漸漸之石は三章六句を以て成る。『毛傳』は幽王を刺ると爲す説例の如し。『疏義』曰く、一章は兵を起し道に在り、休息の期なし。二章は則ち縣軍深入して險を出るの計なし。三章は則ち戈を持し戟を執るの勞を以て、體を沾し足を塗すの苦あり。是を以て智慮廢して憂患専らなり。

苕之華 芸其黃矣 心之憂矣 維其傷矣

苕の華、芸として其れ黃矣、心の憂ある、維其れ傷めり、

【句釋】苕は『傳』に陵苕なりとあり。『本草』曰く、即ち今の紫葳、蔓生にして喬木の上に附す、其華黃赤色、亦凌霄と曰ふ。顧氏曰く、凌霄黃赤色、近ごろ聞く粵西紫凌霄花ありと、豈又紫葳と云ふもの此を以てか、是の物紫葳と名くと雖も、而かも華紫ならず、始め是れ耳目の未だ廣からざるのみ、和名「ノウゼンカズラ」と知るべし。俗本の字書に「ハハキグサ」苕草、帚に作る可しとあり、何の據る所を知らず。芸其黃矣、正に是れ華の盛んに開く狀を言ふ。『傳』に將に落ちんとして則ち黃なりとは、芸の字活用せず、其の誤知り易し。心之憂矣、維其傷矣、何の故に憂傷すと言はば、苕は木に附して茂盛なり、若し夫れ附する所の木敗るときは、亦將に隨がつて敗れん。猶ほ我周室に附して居ること苕

の樹に附してある如し、是を以て周室衰替に逢へば我も亦衰替す、乃ち憂傷する所以なり。或は曰く、蔓草の茂るは附する所の樹堅固なり、我が附する所の周室は衰替す、我は蔓草の茂盛に若かずとなり。前説可にして後説不可なり。

苕之華 其葉青青 知我如此 不如無生

苕の華、其の葉青青たり、我此の如きを知らば、生るること無きに如かず、

群羊墳首 三星在罍 人可以食 鮮可以飽

群羊首を墳にす、三星罍に在り、人以て食ふ可し、以て飽く可きこと鮮し、

【句釋】青青は苕の葉盛んなるを言ふ。朱子曰く、盛んなるも亦何ぞ能く久しからんや。知我如此、我も苕葉の如く一時盛んなるも、其れ竟に衰ふるときあるを知らば。不如無生、生れたるに依て此の憂患あり、生れざるに於ては此の憂患なし、老子以前に此の語あり、老子も此等に取り處多し。群羊は牝羊なり。墳首は大首なり、牝羊は牡羊に比すれば身首共に小、然るに今其の大を索むるは是の道理なきなり、是の道理なきは周已に衰へて復興を求めて得可らざるに喩ふと『箋』に説けり。朱子曰く、羊瘠るときは首大なり、此の詩の言ふところは饑饉之餘、百物彫耗此の如し、苟且も食を得れば足る、豈其の餘を望まんや。二説共に通ず。三星は三點の星なり、三星なる名詞にあらず。罍は音「リウ」訓「ヤ

ナレ 梁なり、此の罾中魚無くして水静、是を以て三星が影を寫す。人可以食、鮮可以飽、人人衰世に逢うて僅かに食ふを得、以て飽まで食ふこと無し。顧氏曰く、牝羊の首本小にして今大、魚最も多くして今無し、彫敵の概なり、傷しいかな。箋曰く、人人治世に於て皆以て食ふ可し、時に饑饉軍糧も亦乏し、以て飽食する無きなり。

【評論】茗之華は三章四句を以て成る。「傳」曰く、大夫時を闕ふるなり。幽王の時、西戎東夷、交も中國を侵す、師旅竝起し、之に因るに饑饉を以てす、君子周室の將に亡びんとするを闕へ、己之に逢ふを傷む、故に是の詩を作る。

何草不黃 何日不行 何人不將 經營四方

何の草か黄ならざらん、何の日か行かざらん、何の人か將るれざらん、四方を經營す、

【句釋】何草不黃、百草千草黄色ならざるは無し。何日不行、昨日今日行役の已むとき無し、草は秋風に遇うて衰ふ、人は惡王の爲めに勞す。何人不將、「傳」曰く、萬民役に従はざること無きを言ふ、將は將率にて「ヒキキラルル」なり。經營四方、朱子派の人は「何人カ將テ四方ヲ經營セザル」と二句一讀法とす。履軒先生曰く、二句一意と作すべからず。「毛傳」の意も二句一讀法にあらず。

何草不玄 何人不矜 哀我征夫 獨爲匪民

何の草か玄からざらん、何の人か矜ならざらん、哀む我が征夫、獨民に匪すと爲す、

【句釋】何草不玄、玄は赤黒の色。「箋」曰く、始春の時、草の芽孽のもの將に生せんとする必ず玄、此時に于て兵猶ほ復行く。今日く、始春の時を言ふにはあらず、黄色が一層衰へたるを言ふなり、以て次句の意が出る。何人不矜、妻の無き者を矜と曰ふ、在るも妻は家にして夫は遠征す、是以て矜なる所以なり。哀我征夫、獨爲匪民、從軍者は皆征夫なり、古は征伐に就ても一年一度は歸休するを得しなり、然るに今は然らず、是を以て此の語を成す、民皆夫妻同居して以て相樂めり、哀哉征夫は然らず、天下平等に皆民なるに我は民にあらずと爲すか、憤慨しての言なること知る可し。

匪兕匪虎 率彼曠野 哀我征夫 朝夕不暇

兕にあらず虎にあらず、彼の曠野に率ふ、哀む我が征夫、朝夕暇あらず、

有芄者狐 率彼幽草 有棧之車 行彼周道

芄たるものあるは狐、彼の幽草に率ふ、棧たるの車あり、彼の周道を行く、

【句釋】匪兕匪虎、兕虎は野獸、其の説前に説けり。率は循なり。曠野は兕虎の往來する所、人間の往來住居する所にあらず、然るに我は兕にあらず虎にあらずして、彼の曠野に率ふは、乃ち我を以て兕虎

と同一視すればなり、朝夕不暇、朝夕暇の無きは征伐の爲め奔走するなり、憤慨の言前章と同じ。芄は狐尾の長大なる貌。朱公遷曰く、芄然の狐、草莽の中に在るは其の性宜しきなり。率彼幽草、幽草に率ふものは狐なり。狐は其の安處あるなり、我は安處無きなり。有棧之車、行彼周道、朱公遷曰く、棧車道に行きて息まず、豈其の性の欲する所ならんや、義已に反して相因り、語又順に相應ず。棧車は役車、昨日も今日も周道即ち大道を行きて安處する所なし、供役の事止むなきを憤慨しての言なり。

【評論】何草不黄は四章四句を以て成る。「傳」曰く、何草不黄は下國幽王を刺るなり、四夷交も侵し、中國背叛す、兵を用ひて息まず、民を視る禽獸の如し、君子之を憂へて是の詩を作る。徐光啓曰く、一章は人の力を盡くし、二章は人の情を盡くし、三章四章は承けて言ふこと此の如し、豈禽獸を以て其の民を待するにあらずや、菀柳より此に至る多く風體に似て、二雅の音響盡きぬ、然も猶之を雅に存す、夫子、周の舊を忘るるに忍びざるなり、故に東遷の後よりを斷じて、王國の風と爲す。平王をして能く舊都を光澤にし、祖業を弘宣せしめば、文武尙ほ還す可く、二雅尙復すべきのみ、委靡振はず、堙没を甘んず、良とに悼む可し。都人士の什十篇四十三章二百句。

大雅三

文王より卷阿に至る十八篇は、是れ文王武王成王周公の正大雅、盛隆の時に據て天命を推序し、上祖考の美を述ぶ、此れ國の大事、故に正大雅と爲す。文王より靈臺に至る八篇は、是れ文王の大雅、下武より文王有聲に至る、二篇は、是れ武王の大雅。

文王の什三の一

文王在上 於昭于天 周雖舊邦 其命維新 有周不顯 帝命不時 文王陟降 在帝左右

大雅 文王 王
文王上に在し、於天に昭かなり、周は舊邦なりと雖も、其の命は維新なり、有周顯かならざらんや、帝命時ならざらんや、文王陟り降りて、帝の左右に在せり、
【句釋】在上は「傳」に曰く、民の上に在る也。於は「傳」に歎辭とあり、朱子亦然り。陸徳明の「音義」に於は音烏と、顔師古も「匡謬正俗」に於即古烏字と、烏は後世の鳴なれば、「毛傳」之を嘆辭と曰ふ、用ひて以て可なり。昭于天、「箋」曰く、文王初め西伯爲り、民に功あり、其の徳、天に著見す、故に天

之に命じて以て王と爲す、天下に君たらしむるなり、崩じて諡して文と曰ふ。傳に昭は見なりと。乃ち照とは異なりて道德上に於て用ふる文字、日明はあり日昭はなし、月明もあり、月昭はなし、以て其の本義を知るべし。文王の神天に在して、昭昭たるものなり。周雖舊邦、其命維新、周は上古帝舜の臣たる稷の後裔なるを以て其の始封より此に至る千有餘年、舊邦ならずとせず、而かも今文王は昔し天に命を受け、天下に君臨して周邦を制立す、命の維新なる知るべし。有周の有は國名に冠する形容字にて何等の意義あらず、有商、有夏、有唐、有宋の如し。不顯は顯なり。不時は時なり、不は否定の義にあらずして否定の義なり、顯はれざらんや、時ならざらんや、即ち必ず顯、必ず時なり、時とは何ぞ成王が正しく位に即く其の時なり。帝命は上帝の命なり。文王陟降、陟は文王の神が天に陟るなり。降は文王の神が世に降るなり。猶ほ生前も死後もと言ふが如し。在帝左右、文王は常に上帝と離れず、人間に在せし時も、天上に還りし時も、共に上帝と相離れずとなり。故を以て其の命は維新にして、其の徳は顯然たり、子孫の幸福を受くるは、是れ文王の護る所あればなり。『疏義』曰く、文王の徳、宇宙に充塞し、古今に貫徹す、生死を以てして間あらず、故に其の神の彼に昭にして、即ち其の徳の此に顯はる、時は方に其の期に應ずるの謂、天運肇て啓き曆數方に來るなり。豐城の朱氏曰く、此の章の意、約して之を言へば四句已に足る、惟周公其の君に戒告するに言盡くること有りて意窮り無し。故に反覆して之

を申言す。徐光啓曰く、徳顯なるときは法を取ること甚だ近しと爲す、命時なるときは裕を垂ること窮まり無しと爲すなり。

不顯亦世 令聞不已 陳錫哉周 侯文王孫子 文王孫子 本支百世 凡周之士

臺臺たる文王、令聞已ます、周に陳き錫へり、侯文王の孫子、文王の孫子、本支百世なり、凡そ周の士、顯かならざらんや亦世にす、

【句釋】臺臺は勉強の貌。令聞は美譽を言ふ、文王が天下の爲め勉強して事に當られたるの美譽を人人之を稱嘆して已ざるなり。陳錫、陳は敷と同じ、錫は賜なり、哉は「傳」に載なりと注あるに依て、陳錫シテ周ニ哉ス」と訓したる本あり。朱子曰く、哉は語辭と。今朱子の説を取る。哉は乎と同義に用ふること古文に往往見ゆ。文王の事業道德が令聞せらるるは何であるかと言へば外にあらす、其れは周に陳錫哉と助語に用ひて嘆意を含む、多くは文の終に用ふるが此の句は周の上在り、是を以て之を疑ふもの生ずる所以。侯は維と同じ、射侯を以て根原とし公侯の侯は轉化後の義なり、射侯とすれば矢を受けざる可らず、乃ち「コレ」と訓して其の目當の者を出すなり、今目當の者は誰ぞ、曰く文王孫子はれなり、子孫と言はずして孫子と言ふは諧韻に依てのみ。本支、本は本宗乃ち其の血を受けて王位に登る

者、支は庶子、王位を繼ぐ資格無くして諸侯と爲る者。百世は「イツマデモ」なり、長久を言ふ、千世萬世も同じ。凡は「廣韻」に常なり皆なり一にあらざるなりと。又總計を謂ふ、又發語の辭。今は發語の義を取る。周之士、周の世に生活する人を言ふ、特に其の光明ある臣士を指す。不顯亦世、「傳」に世徳を顯さざらんや、祿を世するなり。「箋」曰く、周の臣、徳あるもの亦世世位に在るを謂ふ、其の功を重んずるなり。黃氏曰く、文王の徳澤其の臣士に及び、惟周召尙父泰顛散宜生の徒のみ周と無窮を相爲にあらずして、其餘の者亦皆世爵祿を守る、世忠誠を竭して以て周家の子孫を輔くるなり。

世之不顯 厥猶翼翼 思皇多士 生此王國 王國克生 維周之楨 濟濟多士

文王以寧

世之顯かならざらんや、厥猶翼翼たり、思皇多士、此の王國に生れたり、王國克く生んで、維周の楨なり、濟濟たる多士、文王以て寧し、

【句釋】世之不顯、文王の徳が本宗は勿論、支宗、臣士等の上に顯はれざるは無し。厥は其と同じ。猶は謀なり。翼翼は「傳」に恭敬とあり。朱子曰く、勉敬なり。勉めざる翼翼はあらず、敬せざる翼翼も亦あらず。思は語助。皇は「傳」に天とあり。朱子曰く、美なり。今朱子を取る、皇哉と熟語す、天哉にあらず。多士、賢士が多きなり、愚人多きときは醜哉と言はざる可らず。生此王國、人を以て主

とす。王國克生、國を以て主とす。維周之楨、楨は幹、賢士多くして王國の根幹と爲るなり。濟濟多士、士の多き貌を濟濟と言ふ。文王以寧、文王在天の靈が安寧と言ふ意にあらず、文王の開きし周が安寧なりと言ふなり。四句一截の法たること文旨彰彰たり。

穆穆文王 於緝熙敬止 假哉天命 有商孫子 商之孫子 其麗不億 上帝既

命 侯于周服

穆穆たる文王、於緝熙にして敬止、假なる哉天命、商の孫子を有せしむ、商の孫子、其の麗億のみならず、上帝既に命じて、侯周に服せり、

【句釋】穆穆は「傳」曰く美なり。朱子曰く、深遠の意なり。美なるが故に深遠なり、深遠なるが故に美なり、文王の盛徳の氣象を言ふ。緝熙、緝は續なり熙は明なり。敬は文王が自から謹敬なるなり。假は「傳」曰く固なり。朱子曰く大なり。今日く二説共に非なり、假は非眞を以て本義とす、今の句は其の本義を用ひずして假は嘉なりの假借法に依るなり、嘉哉と同じ。天命、上帝の命する所、今人天命の字を多く不幸に用ふ、善意味に用ふるが古義なり。有商孫子、「箋」に殷の子孫を臣有せしむとあるに依て今「商ノ孫子ヲ有セシム」と訓む、「有商ノ孫子」と訓ます説は今取らず、商即ち殷の孫子を周に有せしむるは天命が假なる所以。其麗、麗は數なり、麗の本義は旅行なり、鹿の性食を見て急なるときは

必ず旅行すと「説文」に記せり。數と解し、美麗と解するは後世の轉化と知る可し。不億は不少の意味に見よ、韻字にて億を用ふるのみ。萬も已に多きに過ぐ況や億をや、此等の事意を以て解すべきなり。商の孫子は兎に角多勢居ると言ふの意味、蓋し商の國民の數と見れば、其の萬たり億たる共に妨げざるなり。上帝既命、商の孫子を周が有するに至りしことは人爲にあらす、上帝の命する所なり。侯于周服、侯は維。朱公遷曰く、此の詩専ら成王を戒しむ、此の章亦四句一截の法、前章と同じ。

侯服于周 天命靡常 殷士膚敏 裸將于京 厥作裸將 常服黼辱 王之蓋臣

無念爾祖

侯周に服せり、天命常靡ければなり、殷の士膚く敏きも、京に裸將す、厥の裸將を作る、常に黼辱を服せり、王の蓋臣、爾の祖を念ふこと無からんや、

【句釋】侯服于周は前の侯于周服と意義全く同じ、文字使用法も知るべきなり。天命靡常、靡は被なり被字を後世諷て披と書す、旌旗の被靡するより來る、其の被靡して分散する狀微細なるを以て後世無と同義に用ひ來るなり、天命若し常あらば如何に惡王なりと雖も下は之を奉せざるべからず、常無きを以ての故に文王の如き明主が天命を承けて出世し來るなり。殷士は商士なり、殷の祖成湯は商に封せられ、而して商の十七主盤庚が殷に移りしより、後十一代紂王に至るまで殷と稱す、故に商と稱し、殷

と稱す共に妨げざるなり。膚は美なり。敏は疾なり、殷の臣の伶俐なる者。裸は灌と同じ。將は行なり、祭事に當り鬱鬱の酒を地に灌ぎ、以て神の靈の來り饗るを行ふ禮。于京、殷の士が周の臣と爲り、而かも周の京に於て此の禮を行ふなり、裸又は裸に作る同じ。厥作裸將、常服黼辱、黼は衣なり、辱は冠の名、殷の用ふる冠にて周製にあらず、黼は殷周別無く同一とす、新たに國を興すときは、舊國の臣にして來り降る者には、其の舊國の禮具を用ふるを許す、是を以て周に來る殷の臣之を行ふなり。王之蓋臣、王は成王、蓋臣は忠良の臣なり。朱子曰く、蓋は進なり、其の忠愛の篤、進進として已むと無きを言ふ。此の説頗る宜し。無念爾祖、祖は文王なり、殷の降人が此の如き狀を見れば、周の蓋臣たる者、其の祖の文王の徳を念はざるべけんや、念ふべき筈なりとの意、王を斥言せずして臣を言ふ、風人の微旨此に在り。劉向曰く、孔子詩を論じ、殷士膚敏、裸將于京に至り、喟然として歎じて曰く大なる哉天命、善、後嗣に傳へずんばあるべからずと、是れ富貴常無きを以て、益微子の周に事へしを傷み、殷の亡びしを痛むなり。

無念爾祖 聿修厥徳 永言配命 自求多福 殷之未喪師 克配上帝 宜鑒于

殷 駿命不易

爾の祖を念ふこと無からんや、聿に厥の徳を修めよ、永く言うて命に配し、自から多福を求めよ、殷の

未だ師を喪はざる、克く上帝に配せり、宜しく殷に鑒みるべし、駿命易からず、

【句釋】車は發語の辭。永言は二字にて「トコシヘニ」と訓むも、「永ク言ウテ」と訓むも其の人の自由なるべし、天命に配して行ふ。自求多福、自は自然の自にあらす各自の自なり、各自に多福を求めよ。殷之未喪師、殷の未だ國を亡なはざる時は即ち紂王以前の殷を言ふ。克配上帝、配は匹なり合なり嬾なり、甲の物と乙の物とチント合するが配なり、甲は大に乙は小なる如きは配にあらざるなり。天子の徳と上帝の徳と大小の相違あるは亦配にあらす、若し相違すれば國家を保んずる能はず、遂に亡滅に至るなり、殷の盛んなるときは、此の徳が上帝に配匹したるなり。宜鑒于殷、字の如く殷の盛衰の理由を鑒て其の覆轍を踏ざるべし。駿命不易、駿は大なり、天の大命は易からざるなり、要するに上帝の徳は民を護るに在り、是を以て天子世を治むるには民心を得るに在りとなり。朱公遷曰く、此の詩凡そ八たび命を言ふ、此の章命字獨天理を以て言ふ、餘は皆福祚を以て言ふ。

命之不易 無遏爾躬 宣昭義問 有虞殷自天 上天之載 無聲無臭 儀刑文

王 萬邦作孚

命の易からざる、爾の躬に遏つこと無かれ、義問を宣昭して、有虞の天に自ることを虞れ、上天の載は、聲も無く臭も無し、文王に儀刑せば、萬邦孚を作さん、

【句釋】命之不易、前章を承けて言ふ、不易を重ねて言ふ其の力を用ふる所以のもの知る可し。無遏爾躬、遏は音「アツ」、訓は微止なり、乃ち微しく止まるなり。「説文」に微は細密の意。郭璞曰く、逆を以て相止むるを遏と爲す。其の意は曰く、天命は易からざるなり、其の易からざるものが爾の躬に具る、然るに殷紂の如きは爾の躬に具はり居るも自から遏めて聊かも保たず、宜しく天子は紂の如くなるべからず。宣昭義問、宣は宣布、昭は昭明、義問は「箋」に曰く、禮義を以て老成人に問ふなり。朱子曰く、義問は善譽なり、其の善譽を天下に布明するなり。「箋」の意もあり、朱子の意もあり、此の四字は要するに禮義を問ふ上に於て始めて善譽を宣昭するを得るなり。有虞殷自天、惕齋は此の句を訓して「有殷を虞ること天に自がへ」と謂へり、今の讀法と異なるも意義は異ならざるなり。虞は度なり、殷の如何にして興り、如何に衰へしや、天命に自しや否やを度り見よとなり、自は由と字義同じ、由は從と同義なれば、惕齋の如く訓するも亦可とす。上天之載、載は事なり。無聲無臭、臭は香臭の總稱、犬獸を逐うて走り其の跡を知る、故に字犬に從ふ、上天の事は耳も無し、鼻も無し、從つて聲も臭も無き所以なり。儀刑は儀憲刑法なり、人の服從せざるべからざるの法則なり。文王に服從するは即ち上天に服從すると同一なり。萬邦作孚、孚は信なり、卵孚と熟語するが本義、鳥の卵を孚す、一も其の期を誤らず、是より轉じて信と曰ふなり、一人文王の如くなれば、萬邦均しく信じて之に順はんとなり。

【評論】文王は七章八句を以て成る。七章盡な文王の盛徳を稱揚するに在りて、一章も他に渉るにあらず、獨成王の爲めのみならず、天下萬世國に主たる者の戒と爲すに足る、此の詩の作者は周公ならんとの説あり、是れ或は然らんか。

明明在下 赫赫在上 天難忱斯 不易維王 天位殷適 使不挾四方

明明下に在れば、赫赫上に在り、天忱とし難し、易からざるは維王、天位殷に適くも、四方を挾ざらしむ、【句釋】明明在下は明明たる天子が天下を察るなり、即ち文王を指す。赫赫在上は赫赫たる上帝が天上を照すなり、天は天命。忱は音「シン」、訓誠なり信なり。斯は語助、天忱と爲し難きは、天命常無ければなり。不易維王、此の句に就て「箋」曰く、天の意信じ難し、改易すべからざる者は天子なり。朱子曰く、不易は難なり、天の忱とし難き所以にして君たることの易からざる所以なり。今改易の説を捨て容易の説を取る。天意が常ありて惡王なりと雖も改易すべからずとせば然らんも、章意は決して然らず、君たる者徳を失せざるに於ては天意に稱ふが故に王位を維持するを得、若し徳を失すれば忽ちに王位を失なふ、是を以て王位を守る易からざる所以なり、天子の無き時代は無きが故に改易すべからずと見るも通せざるにはあらず、然れども此の章は朱子の説を以て可とす。天位殷適、「傳」曰く適は正適なり。

朱子曰く、適は適嗣なり、殷の紂王は殷の天子としての適嗣なりと見るなり。今日く、然らず適は往なり、天子の位が殷の紂王に適きたるもと見るなり、適嗣の意にはあらず。紂王は折角殷の統を承けて王位に適きたるもと見るなり。適は嫡に通ずれども、自から別に字あり。使不挾四方、挾は有なり、四方は天下なり、天下を有たざらしむる所以は、天子徳を有たざればなり、殷を抑へて周を揚ぐるの意、彰彰たり。朱子曰く、此亦周公成王を戒しむる詩なり、將に文武命を受ることを陳んとす、故に先づ言ふ下に在るもの明明の徳あるときは、上に在るもの赫赫の命あり、上下に達して、去就常無し。朱公遷曰く、微子之命及び「左傳」皆謂ふ微子は帝乙の元子爲り、紂正適爲ることを得るは、鄭注書序に云ふ微子啓は紂同母の庶兄、紂の母本帝乙の妾、啓及び術を生む、後立て后と爲す、受を生む、然らば則ち后と爲り受を生むを以て正適と爲すなり、嫡と庶とは此の如し、然れども今の章に於ては取らず。

摯仲氏任 自彼殷商 來嫁于周 曰嬪于京 乃及王季 維徳之行 大任有身 生此文王

摯の仲氏は任、彼の殷商より、來りて周に嫁げり、曰に京に嬪たり、乃ち王季と、維徳之行ふ、大任身めるあり、此の文王を生めり、【句釋】摯は國名、國名記に蔡の平輿に摯亭あり、平輿の故城、今日河南省汝寧府の東に當る。仲は中

女、氏は仲の字に付して任に付するに非ず、任は其の姓なり。「説文」に天子生に因て姓を賜ふ、故に字生に從ふ、古は神母天に感じて子を生む、故に女に從ふ。今日く、婦人は姓を稱し、男子は氏を稱す、氏は貴賤を分つ所以、姓は昏姻を別つ所以、又姓氏合して稱する場合あり、後世大底合一して稱す、日本にて言へば源や平は氏にて、宿禰、忌寸は姓なり、乃ち姓任の摯國の女なり。自彼殷商、摯は殷商の畿内に屬す。來嫁于周、殷商に屬する摯と云ふ侯より來りて周に婚嫁するなり。曰嬪于京、嬪は婦なり、處女より婦人と爲るなり、周京に嬪と爲るなり。乃及王季、及の字は配の意味に見よ、任は王季の夫と爲りたるなり。維德之行、夫は夫の德を行ひ、婦は婦の德を行ふ。大任有身、大任は即ち仲任、大は敬稱語とす、身は懷孕なり、又重なり、身中復一身あり故に重と言ふ。生此文王、詩の言はんと欲する所、文王に在る、而して先づ文王の父母を言ふ、其の父母亦仁德を共行せし人なり。「列女傳」曰く、大任端一誠莊にして、維德之行ひ、其の文王を娠めるに至りて、目惡色を見ず、耳淫聲を聽かず、口敖言を出さず、文王を生んで明聖なり、大任之を教ふ、一を以て百を識る、卒に周の宗と爲る、君子大任を謂うて胎教を能くすと爲す、實に日本紀元前約四百年なり。

維此文王 小心翼翼 昭事上帝 聿懷多福 厥德不回 以受方國
維此の文王、小心翼翼たり、上帝に昭事し、聿多福を懷せり、厥德回まならず、以て方國を受けたり、

【句釋】前を承て維此文王を指示し來る。小心は放心の反對。翼翼は恭慎の貌。昭事上帝、聿懷多福、昭かに事ふるは至誠の心を以て事ふるなり、至誠の心を以て事ふ、多福を來すは固より其の所なり。厥德不回、以受方國、回は邪なり。德邪ならざるなり。四方の國は即ち天下なること知るべし、以て天下を受けたるなり。「講意」曰く、此の章文王の德を言ふ、首の二句截す、下天人を分つ、昭事と不回と皆敬の字より説き去る、上は是れ敬を以て天を得、下は是れ敬を以て人を得るなり、方國を受るは三分して二を有ち、以て殷に服事するに過ぎず。今日く西伯は自から天下を三分して二を有つと稱するも、民心は既に周の天下を認むるなり。

天監在下 有命既集 文王初載 天作之合 在洽之陽 在渭之涘 文王嘉止

大邦有子
天監下に在り、命あり既に集れり、文王の初載、天之が合を作せり、洽の陽に在り、渭の涘に在り、文王嘉止とき、大邦に子あり、
【句釋】天監在下、監は監視なり、上天の監視する所は何處にあると言はば下に在るなり。有命既集、集は集就なり、周は文王の祖先太王よりして以來仁德を施せり、天命の文王に集就して王と爲るは固より其の所なり。文王初載、文王の一生を三期に分てば其の初期の時なり、乃ち少より壯に至る間と見て

可なり。天作之合、合は即ち配合なり、婦を納れたるを言ふ、是れ天の命する所と言ふ。在洽之陽、洽は洽水、今日の陝西省西安府の郃陽夏陽二縣の間に在り。陽は北なり。在渭之涘、涘は涯なり、渭水も西安府を流るる川。文王嘉止、傳に嘉は美なりと、嘉は昏禮の事たるなり、文王が娶る時を言ふ。大邦は華國なり。有子、子は太姒なり。徐光啓曰く、天命必ず厥所あるなり、而して後集所あるなり、六百年の裔を以て將に其の命を革め之を新にせんとす、監視の久くして、眷顧の深きに非ずんば固より輕集せざるなり。古義曰く、范祖禹曰く、大姜は炎帝の後、大任は太昊の後、太姒は大禹の後。大姒十子を生む、武王周公は皆聖人なり、其餘は皆顯諸侯と爲て天下に徧し、大姒の徳なり。

大邦有子

倪天之妹

文定厥祥

親迎于渭

造舟爲梁

不顯其光

大邦に子あり、天の妹に倪ふ、文をもて厥祥を定め、親から渭に迎へたり、舟を造りて梁と爲し、其の光を顯かにせざらんや、

【句釋】倪は音「ケン」訓「タトヘ」譬なり、大姒を以て天の妹に譬ふとなり、周人が大姒を貴んで稱するなり。文定厥祥、大姒が文徳を有するを以て其の吉祥なるを定むるなり、文王が將に大姒を娶らんとして、納幣の禮を以て其の吉祥を卜定するなり。親迎于渭、文王が親から渭水の涘に出で以て大姒を迎ふるなり。造舟爲梁は舟を比べて以て橋梁と爲す、天子は造舟、諸侯は維舟、四船を連るが維舟なり。

大夫は方舟、二船を併すが方舟なり。士は特舟、特は獨なり單なり、唯一船のみ。不顯其光、聖人が賢女を迎ふる、宜しく大禮を具備して其の光を顯はさざるを得んや。朱子曰く、梁は橋なり、船を水に作りて之を比べて版を其の上に加へ以て通行するもの、今の浮橋なり。張子曰く、造舟爲梁は文王の制する所、周の世遂に以て天子の禮と爲す、殷の時未だ此の制あらざるなり。

有命自天

命此文王

于周于京

纘女維莘

長子維行

篤生武王

保右命爾

變伐大商

命あり天よりし、此の文王に命す、周に京に、女を纘けるは維莘、長子維行ぐ、篤うして武王を生む、保右して爾に命じ、大商を變伐せしむ、

【句釋】于周于京、文王が周京に君臨するは是れ天の命する所。纘女維莘、纘は繼なり、文王の母は大任なり、其の母の女事を繼がしむる者は大姒なり。莘國の長子即ち長女は大姒なり。維行、文王と相配して各の其の徳を維行なふなり、篤生武王、篤は厚篤なり、天氣を大姒に降し聖子武王を厚生すとなり。保右、保は保持、右は右助なり、天は既に文王を生み、又武王を生み、皆以て天が保んじ、助けしむ。命爾、武王に命するなり。變は變和、伐は征伐。大商は即ち殷の紂王を指す、仁を以て變し、勇を以て伐つなり。徐光啓曰く、章首の五句は即ち上文の意にして、重ねて之を衍ぶ、猶ほ古詩換章疊句の體の

如し。『古義』曰く、説文華字無し、當に辛に作るべし。唐世系表に曰ふ啓、支子を莘に封ず、辛聲相近し、遂に辛氏と爲す、其の地は即ち今の邵陽縣なり、春秋の時晉に屬す。『一統志』曰ふ、縣の東四十里に夏陽城あり、内に周文王の妃太姒の墓あり。

殷商之旅 其會如林 矢于牧野 維予侯興 上帝臨女 無貳爾心

殷商の旅、其の會へると林の如し、牧野に矢ね、維予侯興れり、上帝女に臨めり、爾の心を貳ふ無れ、
【句釋】殷商之旅、旅は師旅、武王紂を討つ時、殷の兵、主の爲め羣衆之を防ぐなり。其會如林、殷兵の多きを形容す、武王を拒ぐ爲め會するなり。矢于牧野、矢は陳なり。殷兵が牧野に陣を陳ぬるなり。牧野は殷の都即ち朝歌の南七十里なり。維予侯興、『箋』曰く、天乃ち諸侯有徳の者、當に起して天子と爲すべきに予ふ、天、紂を去つて周の師勝を言ふなり。『書經』武成篇に云ふ、甲子の味爽、受其の旅を率ゐること林の若く、牧野に會る。鬻子曰く、武王兵車を率ゐて以て紂を伐つ、紂虎旅百萬、商郊に陳す、黃鳥より起りて、赤斧に至る、三軍の士、色を失せざるもの莫し。『史記』云ふ、紂、兵七十萬人を發して武王を拒ぐ。

牧野洋洋 檀車煌煌 駟騶彭彭 維師尙父 時維鷹揚 涼彼武王 肆伐大商 會朝清明

牧野洋洋たり、檀車煌煌たり、駟騶彭彭たり、維師尙父、時維鷹揚のごとく揚りて、彼の武王を涼く、肆ままたに大商を伐つて、會朝清明なり、

【句釋】洋洋は廣大の形容。檀は和訓「マユミ」、堅木にて兵車に宜しきなり。煌煌は車の鮮明なる形容。駟は四なり。騶は駟馬なり。腹の白き馬なり。彭彭は強勢の貌。維師尙父、呂望を尙んで師父と爲すなり、呂望は太公望なり。時維鷹揚、鷹は鳥中の猛なるもの、今以て其の飛揚して他の禽鳥を撃んとするに喩ふ。涼は「傳」に佐とあり、元來涼は薄なりと訓するが本義なり。酒の薄きより來る。毛杜曰ふ、薄きときは寒を生ず、又引伸して寒を爲すと。北風其涼の如き是れなり。今多く二水の涼に書す俗字なり、或は曰く、涼は「サムシ」、涼は「ウスシ」なりと、此の説は非にして今取らず。然るに佐と訓するは『説文』に依て其の義を知るを得ず。『漢書』此の詩を引て亮彼武王に作る、亮の義は佐なり助なり、亮と涼と韻通するを以て訛傳し來りしやも知れざるなり。肆は縦なり。『傳』に疾なりとあり。義を以て之を解すれば此の二用あるべきなり。伐大商、呂望は八十の老軍師を以て武王を佐け、縦横無盡に大商の兵を征伐す。會朝は會戰の且なり。清明は毒暗の反對の文字、紂の暗毒を亡ぼして周の清明を見しなり。

【評論】大明は八章。四章は六句、四章は八句を以て成る。嚴華谷曰く、首章は泛く(パット)天人の理を

言ひ、殷亡の由を見して、文武を美る張本と爲し、次章は乃ち大任文王を生むことを述べ、其の後乃ち又文王武王を生むことを述べ、殷を伐つ事に及んで、以て首章の意を成す、其の言皆次序あるなり。慶源曰く、君明德あるときは天命あり、王季文王あるときは、大任大姒あり、王季大任あるときは、文王あり、文王大姒あるときは、武王あり、武王の君あるときは太公の臣あり、大明の詩を讀むときは、當に天人夫婦父子君臣の際、安危治亂廢興存亡の機、影響形聲の相似たる如くにして皆苟然にあらざることを知るべし、周公以て成王を戒しむ。前五章は周の三王積徳の盛、天命の積、亦一日に非ず、人力の興かることを得ざる所の者あり、後二章は武王天に順じ人に應じ以て紂を伐つて之に克つ、已むことを得るに非ざるあるを言ふ、成王之を聞いて、天命の苟も集まらず、祖宗の天下に於けるや苟くも得るにあらざることを思ふときは、兢兢業業として、以て之を保守し、自から已むことを得ざる者あらん。

縣縣瓜瓞 民之初生 自土沮漆 古公亶父 陶復陶穴 未有家室
縣縣たる瓜瓞あり、民の初て生るる、沮漆に土せしより、古公亶父、陶復陶穴にして、未だ家室あらず、
【句釋】縣縣は不絶の貌。瓜瓞、大なるもの瓜、小なるもの瓞なり。朱子曰く、瓜の本に近く初めて生ずる者常に小なり、其の蔓絶すして末に至りて後大なり。民之初生、民は天地開闢の世の民にあらず、

周民を言ふ。自土沮漆、沮水と漆水の間是れ周民の發生せし處、豳の地とす。古公は文王の祖、太王を言ふ。亶父は古公の字。陶は瓦器、竈なり。復は重壻、客が二箇あるなり。窰は窯と同じ、陶穴、洞穴を陶竈の如くに作る、所謂穴居なり。未有家室、瓦屋も木屋も未だ有らざるなり。「傳」曰く、古公豳に處る、狄人之を侵す、之に事ふるに皮幣を以てするも、免るるを得ず、之に事ふるに犬馬を以てするも、免るるを得ず、之に事ふるに珠玉を以てするも、免るるを得ず、乃ち其の耆老に屬して之に告て曰く、狄人の欲する所は吾が土地なり、吾之を聞く君子は其の人を養ふ所を以て人を害せずと、二三子何ぞ君無きを患んと、之を去て梁山を踰え、岐山の下に邑す。豳人曰く、仁人の君、失ふ可らざるなり、之に従ふと市に歸するが如し、其の土を陶にし之を復し、其の壤を陶にし之に穴す、室内を家と曰ふ、未だ寢廟あらず、亦未だ官て家室あらず。朱子曰く、此の詩周公成王を戒しめて、太王始め岐周に遷りて以て王業を開き、而して文王之に因て以て天命を受るるを追述するなり。瓜の先は小後は大を以て、周人の始め小、後は大に喩ふるなり。

古公亶父 來朝走馬 率西水滸 至于岐下 爰及姜女 聿來胥宇
古公亶父、來りて朝に馬を走らし、西水の滸に率ひ、岐の下に至り、爰に姜女と、聿來りて胥宇せり、
【句釋】來朝は豳より來りて朝に走馬するなり。率は順なり。西水滸、沮漆二水の水厓に沿うて活動し

たるものなり。至于岐下、岐山の下を言ふ、「禹貢」註に太王岐山の下に邑す、文王の時鳳岐山に鳴くと。一名を天柱山と曰ふ。陝西省鳳翔府岐山縣に屬す。文王が太公望を得し磻溪も、此の鳳翔府に在り。通解曰く邠は岐の西北二百五十餘里に在り、邠より南一百三十里に奉天縣あり、梁山あり、渭水は梁山下の南に在り、水に循て西上して以て岐に達すべし、太王岐に都す、今の鳳翔府西五十里、是を岐周と爲す、岐水の南、今周原あり、南五十里に又周城あり、此を周公の采邑と爲す。沮水漆水は共に渭に流入するなり。爰及姜女、姜女は齊國の女、太王の妃、後太姜と稱せらる。聿は音「イツ」、訓「ツヒニ」遂「ノブル」述「ヨリ」自「コトバ」辭「シタガフ」循「フデ」筆、吳の不律、秦の筆等の多義あり、今「ココニ」に訓んで助語とす。來胥宇、胥は相なり、宇は家なり、賢人と賢婦と相配し、其の内外宜しきを得、以て八百年の基礎を築けるなり。

周原膺膺 董茶如飴 爰始爰謀 爰契我龜 日止日時 築室于茲

周原膺膺たり、董茶飴の如し、爰に始めて爰に謀り、爰に我が龜を契けり、曰く止れ曰く時なり、室を茲に築く、

【句釋】周原は文王の都、鎬京(陝西)を言ふにあらず、太王の起りし鳳翔縣の周原なり、所謂沮水漆水の間に在り。膺膺は肥美の貌。土膏沃にして骨無き肥肉の如き也。董は我邦の植物にて「スミレ」と訓す、

此の董は「スミレ」にあらず、食菜の名なり、根は薺の如く、葉は細柳の如く、蒸て之を食へば甘し、人の作るものと野生との二種あるなり。茶は苦菜なり、茶にはあらず。如飴は董茶の味を美めて言ふ、何を必ずしも飴と同視せん、周原の地肥沃なるを以て此の美菜を生ずとなり。爰始爰謀、是に於て國を始め、是に於て幽人と謀る。爰契我龜、契は龜を焼く木なり、龜木を焼きて以て前途の如何を卜するなり、人事を先にし、卜筮を後にするなり。「古義」に卜法を説くこと至密なり、知らんと欲する者は往て看よ。日止日時、築室于茲、卜に因て顯はるる處正しく是に止る可く、正しく是の時なり、是に於てか室家を茲地に築きしなり。

迺慰迺止 迺左迺右 迺疆迺理 迺宣迺畝 自西徂東 周爰執事

迺ち慰んじ迺ち止まり、迺ち左し迺ち右す、迺ち疆し迺ち理め、迺ち宣き迺ち畝し、西より東に徂き、周く爰に事を執る、

【句釋】迺は音「ダイ」訓「スナハチ」なり。後世の文、乃字を以て迺に易ふ、和訓すれば「ソコデ」に當る、事を繼ぐの辭なり。慰は安、止は止居。左右は東西なり。疆は境界。理は整理。自西徂東、西水の滸より岐山の東に来るなり、畝は田疇を治むるなり。周は周遍。執事、政治は勿論、總て事を此に執るなり。

乃召司空 乃召司徒 俾立室家 其繩則直 縮版以載 作廟翼翼
乃司司空を召し、乃ち司徒を召し、室家を立てしむ、其の繩則ち直し、版を縮ねて以て載せ、廟を作る
こと翼翼たり、

【句釋】召は召命、上より下を致すの辭なり。司空は營國廣狹の度、廟社朝市の位を掌る官なり。司徒は衆庶を用ふるとき其の政教を掌る官なり、周以前より有る官なり。俾は使なり。立室家、朱子曰く、人君の國都は井田の様の如く、畫して九區と爲す、面は朝、背は市、左は祖、右は社、中間の一區は則ち君の宮室、宮室前の一區を外朝と爲す、凡そ朝會、藏庫の屬、皆在り、後の一區を市と爲す、市四にして門あり、左右各の三區、皆民の居る所にして外朝一區は左は則ち宗廟、右は則ち社稷、此れ國君都邑規模の大槩なり。其繩則直、繩直なるときは地平なりと。縮版作廟、繩の直を已に得ば、正しく築くべきを得、是に於て宗廟を作る、縮は縮束、索を以て版を束ね、以て上下相承るなり。翼翼は敬念を以て勉強する也、君子の宮を營む、宗廟を以て先とし、廡庫を後と爲す。「孔疏」曰く、后稷を帥に封じて上公と爲す、孟子、文王は百里を以て王たりと稱すれば、太王の時、殷の大國なるを以て、當に三卿を立つべし、其の一は蓋し司馬ならんか、時に召さざるは、司馬は營國の事に於ては掌る所無きが故なり。

揀之陔陔 度之薨薨 築之登登 削屨馮馮 百堵皆興 鼙鼓弗勝
之を揀ること陔陔たり、之を度ぐるこゝ薨薨たり、之を築くこと登登たり、削ること屨して馮馮たり、百堵皆興り、鼙鼓勝へず、

【句釋】揀は音「ク」、訓「ツチカゴ」藥、即ち物の名詞、「ツチモル」と訓して動詞に用ふる時は土を器に盛るなり。陔陔は「傳」に衆なりと。一説に牆を築く聲を言ふと。度は土を版に投げるなり。薨薨は衆聲を言ふ、百姓の勤勉を言ふ。登登は力を用ひて相應する聲。削は木を削るなり。屨は再三再四なり。馮馮は牆を堅うする聲。百堵、八尺を版と爲し、五版を堵と爲す、版の廣さ二尺、積高五版を一丈と爲す。其の説異同あり、今姑らく一説を存す。此の百堵皆時を同じうして興るなり。鼙鼓は大鼓、長さ一丈二尺、面五尺餘。弗勝、鼓を以て之を節すれども止めざる也、民の事を作す、聊かも勞を厭はざるなり。

迺立臯門 臯門有伉 迺立應門 應門將將 迺立冢土 戎醜攸行
迺ち臯門を立て、臯門伉たることあり、迺ち應門を立て、應門將將たり、迺ち冢土を立つ、戎醜の行
く攸なり、

【句釋】臯門は「傳」に曰く王の郭門を臯門と曰ふ、臯は臯と同じ。「說文」に氣臯白の進むなりと、又高きなり。「鄭箋」に諸侯宮外の門を臯門と曰ふ。有伉、伉は高き貌。應門は正門なり。孫炎曰く、朝門を

言ふ。「考索」に曰く、天子に五門あり、阜門、應門、雉門、路門、庫門なり。「古義」曰く、說者謂ふ天子の九門は陽九の義に法る、宮門五あり五行に法る、外門四あり四時に法る、合して九門と爲す。關門、遠郊門、近郊門、國門、阜門、庫門、雉門、應門、路門なり。「通解」曰く、太王當時只二門と社とを作るとを知ること此の如し、後人の制を爲すに意あるにあらず。「說通」曰く、當時百度草創す、亦禮を守ること必とするにあらず。三の立字俱に創見の意を見る、始の未有家室と同じからずと言ふのみ。將は嚴正なり。立冢土は冢は大なり、土は社壇なり、即ち大社なり、軍を起し大衆を動かすときは是の社に祭して以て出行するなり。戎醜は傳に戎は大、醜は衆なり、乃ち大軍の行く攸とす、戎醜は字の如く「エビス」を指すと解するも通せざるにはあらず、然れども古今共に大軍の事と爲す、姑らく從ふ。

肆不殄厥愍 亦不隕厥問 柞棫拔矣 行道兌矣 混夷駟矣 維其喙矣

肆に厥の愍を殄たざれども、亦厥の間を隕さず、柞棫拔矣、行道兌矣、混夷駟矣、維其喙矣、

【句釋】肆は「傳」に故今なり。朱子曰く、猶は遂と言はんがごとし、上を承けて下を起すの辭、殄は音「テン」、訓「ツキル」、盡「ホロブ」、滅「タツ」、絶なり。愍は怒なり、文王が混夷即ちエビスの愍を絶滅せざるなり。隕は隕落。問は聞なり、文王が岐周に移りて後、混夷の爲め惱まざる、然れども己が聲聞を隕墜せざるなり。威嚴は決して侵されざるなり。柞は櫟。棫は白桜、共に是れ枝長く葉盛んにして

刺ある樹なり。拔は挺拔、岐周の未開墾の荒涼たる時、即ち文王が始めて來るの時。行道兌矣、人の行くべき道も無かりしに文王が來るや行道が完全に到達するに至るなり、兌は音「タイ」、訓「トホル」、通なり、自から蹊を成したるなり。混夷は昆夷を以て正しとす、或は緄夷、吠夷と書す、即ち犬戎なり。黃帝苗龍を生む、苗龍融吾を生む、融吾弄明を生む、弄明白犬を生む、白犬牝牡あり、是を犬戎と爲す、今日の甘肅省の地に棲息せし種族とす。駟は突なり、文王の爲め突破せられて遁逃する貌を言ふ。維其喙矣、喙は困なり、口を尖らして息を劇しくする也。柞棫を文王が開くとの前解も通するが、此の柞棫の拔んづる中に犬戎が逃れ去ると解するも亦能く通す。呂東萊曰く、此の章、或は以て専ら太王を指すと爲し、或は専ら文王を指すと爲す、義皆未だ安からず。孟子曰く、文王昆夷に事ふと、文王猶ほ昆夷に事ふる如きときは、太王安んぞ昆夷駟矣、維其喙矣の事あるを得んや。皇矣に曰く、帝其の山を省るに柞棫斯に拔んで、松柏斯に死たり、帝邦を作り對を作す、太伯王季よりとす、然らば則ち柞棫拔、行道兌、安んぞ指して文王の時と爲すを得んや。蓋し總て周家の王業、積施屈伸の理、太王に始まり、文王に終りしことを敍するのみ。安成劉氏曰く、下章の首に虞芮質成の事を言ふときは、則ち此の章の末、固より文王に通じて言ふなり、蓋し其の始めや昆夷服せずして、太王其の間を墜さず、其の終に及んでや、文王德盛んにして昆夷自から服し、一章の間、神祖聖孫、實に相首尾す。「集傳」已に太王始至と曰

ふ。又曰く、至_二於其後、又曰く己爲_二文王之時、則其歷年久矣と。若し皇矣の三章及び天作の頌を以て之を證するときは、此の章通じて太王季文王の事を言ふこと明なり。豊城の朱氏曰く、太王の邠を去る獵豸の難を避るなり、其の岐に至るに及んで、則ち又昆夷の慍有り、昆夷の慍は患の外より至るものなり、内治の修は、政の中より出るものなり、外より至るものは聖賢の必とする能はざる所、中より出るものは聖賢必ず勉を加ふ、蓋し君子は創業垂統、其の繼ぐ可きことを爲すもののみ、若し夫れ成功は則ち固より天命ありて存す、然れども之を積累すると既に久しく、之を培植すること既に厚し、木拔道通に至るときは、屈が屈に終へず、伸に必し、晦が晦に終へず、顯に必す、昆夷の竄、自から然ることを期せずして然るものあり。

虞芮質厥成 文王既厥生 予曰有疏附 予曰有先後 予曰有奔奏 予曰有禦侮
虞芮厥の成を質し、文王厥の生るを厥かせり、予は曰ふ疏附あり、予は曰ふ先後あり、予は曰ふ奔奏あり、予は曰ふ禦侮あり、

【句釋】虞芮は二國の名、今日の陝西と山西との間に居を占し者なり。質は正なり。厥成、成は平なり。「傳」曰く、二國の君相與に田を争ふ、久しうして平らかならず、乃ち相與に周に朝す、其の境に入れば、則ち畔者は畔を譲り、行者は路を譲り、其の邑に入れば男女路を異にし、班白の者提挈せず、其の

朝に入れば、士、大夫と爲るとを譲り、大夫、卿と爲るとを譲る、二國の君、感じて相謂て曰く、我等小人なり、以て君子の境を履むべからず、乃ち相譲りて其の争田を以て閒田と爲して退く、天下之を聞て歸する者四十餘國なり。厥厥生は「傳」に説無し。「箋」曰く、文王其の縣縣の民初生の道を動かし、其の徳を廣うして、王業日に大なるを言ふ。朱子曰く、未だ其の義を詳にせず、或は曰く、厥は動なり、動にして疾きなり、生は猶ほ起が如し。予は詩人自から言ふ。「傳」に曰く、下を率ゐ上を親しむを疏附と曰ふ、相道びき前後するを先後と曰ふ、徳を諭し譽を宣するを奔奏と曰ふ、武臣の折衝を禦侮と曰ふ。慶源輔氏曰く、虞芮の訟を質し、初め興起を期するにあらず、而して其の興起の勢、厥然として動く、此れ聖人の事なり、然れども亦豈一己の能く獨り致す所ならんや、故に周公以爲らく、四臣の助多しと爲す、其の辭諄復、深く其の人を得るの盛んなるを嘆ず、其の意深し、成王を戒しむる所以のもの切なり、所謂四臣は此の四等の臣あるを謂ふのみ、固より四人のみと言ふにあらず。

【評論】縣は九章六句を以て成る。一章は幽に在るを言ひ、二章は岐に至るを言ひ、三章は宅を定むるを言ひ、四章は田を授け民を居を言ひ、五章は宗廟を作るを言ひ、六章は宮室を治むるを言ひ、七章は門社を作るを言ひ、八章は文王に至りて混夷を服するを言ひ、九章は文王受命の事を言ふ。輔慶源曰く、以上の三篇皆周公の作、以て成王を戒しむるの詩、文王は則ち専ら文王の徳を美め、大明は則ち王季大

任文王大妣を追述して、以て武王の徳に及ぶ。蘇は則ち又太王大姜文王の徳を追述して、其の意は則ち蓋し其の先王、徳業を積累するの盛を歴述して、以て成王の任大に責重うして謹戒して之を保守せずんばあるべからざることを見すのみ。

芄芄棫樸 薪之標之 濟濟辟王 左右趣之

芄芄たる棫樸は、之を薪にし之を標にす、濟濟たる辟王、左右之に趣く、

【句釋】芄芄は木盛んなる貌。樸は木の名にあらず、棫の叢生せる貌。薪は字の如く竈用に供する物。樸は積なり、積んで以て其の乾くを待ち之を用ふ。濟濟は朱子曰く、容貌の美なりと。辟王は君王なり、

君王は文王を指す、辟は君たること前に辨あり。左右趣之、僅かに左右を言ふ、其の實東西南北の人皆文王の徳を慕うて之に趣くとなり。木盛んなれば人之を薪にし標にし、君徳あれば人之に歸し之に趣くなり。

濟濟辟王 左右奉璋 奉璋峩峩 髦士攸宜

濟濟たる辟王、左右璋を奉ぐ、奉璋峩峩たり、髦士の宜しき攸、

【句釋】璋は「傳」に半圭を璋と曰ふ。「箋」曰く璋瓚なり、祭祀の禮、王裸するに圭瓚を以てし、諸臣

之を助く、亞裸には璋瓚を以てすと、瓚は酒を酌む勺、璋は其の柄なり、黄金にて之を作る。王初裸を行ひ、后亞裸を行ひ、其の後故あるときは太宗伯之を攝す。璋は圭の半體、之を合するときは圭を成す。峩峩は衣冠偉壯の貌。髦士は俊秀の士、在官者を言ふ。攸宜は其の事を執るに宜しき人なりとなり。

溥彼涇舟 烝徒楫之 周王于邁 六師及之

溥たる彼の涇舟、烝徒之を楫さす、周王于に邁けば、六師之に及べり、

【句釋】溥は「傳」曰く舟行の貌。涇舟は涇水中の舟なり、涇は周地を流るる川。烝徒は衆人なり。

楫之、涇を行く舟、溥溥然として流れに順つて行く者は、衆徒の船人、之を楫櫂する安排を得ればなり、賢者多く以て國政を善く料理するに喩ふ。周王于邁、文王は即ち周王なり、文王征伐に邁行するなり。

六師、一師は二千五百人と爲すが周制なれば、合して萬二千五百人なり、殷末の制を其の儘用ふとも言ふ。及之、維命維從ひ、曾て命に背く者はあらず、皆及ばざらんとを是れ恐るる有様なり。「古義」に涇

水を説て曰く、「山海經」に涇谷の山涇水出づ焉と、東南に流れて渭に注ぐ。「說文」に云ふ涇水は安定涇陽の汧頭山に出づ。東南して渭に入る、隴州の川なり。「雍大記」に云ふ、涇水は平涼府城の西南より源を發し、涇州に至り、又東南して邠州界に至り、又東北して西安府涇陽縣の界に至り、涇陽由り東流して高陵縣に至り、渭に會す、文王岐より崇を伐つ、道必ず涇を渉る。按ずるに岐は即ち今の岐山縣、涇

州と界を連ぬ、崇は即ち今驛也。涇陽高陵と俱に陝西の西安府に隸す。嚴華谷曰く、文王未だ六軍あらず、大雅皆王者の事を述るを以ての故に云ふ。陳北溪曰く、汲汲然として之に及ぶ、戒命を待たずして至る。

倬彼雲漢 爲章于天 周王壽考 遐不作人

倬なる彼の雲漢、章を天に爲せり、周王壽考なり、遐ぞ人を作さざらん、

【句釋】倬は大なる貌。雲漢は天河、雲漢を擧げて日月星辰の文字を略したるなり。爲章于天、章を天に爲すもの獨雲漢のみならず、然れども今雲漢の一を出す。周王壽考、文王の死せる年九十七なれば、此の詩の成りし時は九十前後と見れば可なり。遐は何なり。不作人、壽長き人は事を成す意味なり。何事も短壽の人の作すこと能はざるは明白、長壽なればこそ、世を治め人を作すの業成るなり。輔慶源曰く、此の章方に人心の文王に歸向する所以を言ふ、文王能く以て之を振作することある故なり、人を作すは一日偶然の爲すべきに非ず、必ず積累漸漬の久、乃ち成るに底る。故に曰ふ周王壽考、遐不作人。先生嘗て學者に語りて曰く、此等の語言、自から箇血脈流通するあり、但涵詠久しうして、自然に條暢浹洽を見得す、必ずしも多く外來の道理言語を引き、却て詩人説底の意を壅滯せず。嚴華谷曰く、雲漢の倬然たる明大、文章を天に爲す、文王少より老に至る、人を興起する所以のもの多し、人心の善、之を作すときは興る、凡そ自暴自棄、習俗下に流るる者は、上の人以て之を興起すると無きに由る。故に

孟子曰く、文王を待て而して後興る者は凡民なり、蓋し人此の心を同じうし、心此の理を同うす、外に一道を立て以て其の無き所を強ふるにあらず、特に作して之を興し、之をして自から已むこと能はず、然る所以を知らずして然らしむ、如し樂しまば則ち生き、生きるときは烏ぞ已むべけんや、手の舞足の踏むを知らざるなり。

追琢其章 金玉其相 勉勉我王 綱紀四方

其の章を追琢し、其の相を金玉にす、勉勉たる我王、四方を綱紀せり、
【句釋】追は「傳」に彫なり、金に彫と曰ひ、玉に琢と曰ふ、其の文章を彫琢すること宛かも金玉を彫琢する如くする。相は金玉の質を言ふ、質の本來善なるもの彫琢すれば益す善なり。勉勉は詩人より我王に奨むる語なり。綱紀四方、「箋」曰く文王の政を爲す、先づ心を以て研精し、禮義に合し、然る後に之を施す、萬民視て之を觀、其の好んで之を樂しむ、金玉を觀るが如く然るなり。政を爲すに之を張るを綱と爲し、之を理するを紀と爲す。朱公遷曰く、此れ用心至極を以て興と爲す、蓋し追琢金玉は是れ物を貴重して用心致美の極、勉勉不已は是れ事に勤勞して、用心致治の極、故に取て以て興を起すこと此の如し。前に濟濟辟王と稱し、此に勉勉我王と稱す、濟濟は貌を以て言ひ、徳の外に見はるるなり、勉勉は心を以て言ふ、徳の中に存するなり。

【評論】椹椹は五章四句を以て成る。五章皆文王の盛徳を稱揚するを以て本旨とす、詩篇の美、亦金玉の如し。

瞻彼早麓 椹椹濟濟 豈弟君子 于祿豈弟

彼の早の麓を瞻れば、椹椹濟濟たり、豈弟の君子、祿を干めて豈弟なり、

【句釋】早は早山、陝西省漢中府に在りと先輩の説に見ゆるが、今日其の所在は未詳其の早山の麓。

椹は和名「ハシバミ」、栗に似て小。「爾雅翼」に關中に甚だ此の果多しと。關中は秦の地なり。椹は和名

未詳なり。先輩の訓に「ナマエ」とあり。「陸疏」に形荆に似て赤く、莖著に似たりと。濟濟は衆多なり。

豈弟、豈は體の正字、弟は悌なり、樂しみ易らぐなり。君子は文王を指す。干は求なり。祿は福祿なり。

詩人文王の徳を詠歌して言ふ。早山の麓は椹椹濟濟然たり、豈弟の君子は其の祿を求むるや豈弟なり。

嚴粲曰く、麓は山の氣を承るものなり、其の山高大なるときは、麓の其の氣を得るや深厚なり、峯巒回

合の茂ふ所、雲雨潤澤の漸する所、其の氣深厚なり、故に草木茂盛す。徐士彰曰く、聖人の一身は理氣

の統會する所、以て徳を爲す所の者至順の實あるときは、其の以て福を求むる所の者、要、至順の中よ

り出でず、聖人は豈福を求むるに心あらんや、理己に全うして、氣は天に全し、然るを期せずして然る

あるのみ。朱公遷曰く、此れ皆之を致すこと莫うして至るもの、故に自然の理を以て興を爲す。早麓は椹椹に意無うして、椹椹自から之に生ず、其の地の美なるを以てなり、君子は福祿に意無うして、福祿自から之に歸す、其の徳の盛んなるを以てなり。

瑟彼玉瓚 黃流在中 豈弟君子 福祿攸降

瑟たる彼の玉瓚、黃流中に在り、豈弟の君子、福祿降る攸、

【句釋】瑟は「箋」に潔鮮の貌とあり。朱子曰く、縝密の貌と。玉瓚の美麗なるを言ふ。黃流、瓚は酒

を盛る器、而して其の酒は秬にて製せる酒、此の酒を盛る器を稱す。其の酒の色黄なるが其の瓚より流

る、是を以て其の流るる所を直ちに言はず、流るる性質の物なるが故に在中と言ふなり。瓚の状は、圭

を以て柄と爲し、黄金を以て勻と爲し、青金を外とし、中央を朱とす。殷王帝乙の時、王季、西伯爲り

功德を以て此の賜を受く。此の章の意、玉瓚は黃流自から其の中に在り、豈弟の君子は必ず福祿其の

躬に降ることあり、必然の理を示したるものとす。

鳶飛戾天 魚躍于淵 豈弟君子 遐不作人

鳶飛んで天に戾る、魚淵に躍る、豈弟の君子、遐ぞ人を作さざらん、

【句釋】鳶は鷲鳥なり、其の飛ぶや雲漢に薄る、「トビ」の名、其の實を得たり。戾は至なり。朱子抱朴

子を引て曰く、鳶の下に在る力無し、上に至るに及んで身を聳かし、翅を直うするのみ、蓋し鳶の飛ぶ、全く力を用ひず。魚躍于淵、魚の淵に躍るや、怡然として自得して、其の然る所以を知らず。傳曰く、上下察なるを言ふ。箋曰く、鳶は鴟の類、鳥の貪悪なるものなり、飛で天に戻るは、惡人遠く去て民の害を爲さざるに喩ふ。魚の淵に躍るは、民喜樂して其の所得るに喩ふ。此の見を以て解するも亦通ず。嚴華谷曰く、三章は人を作すの妙を言ふなり、鳶飛魚躍は天地の内、其の性を自得せずと云ふこと莫して、而して然る所以を知らざるを言ふ。豈弟の文王、豈人を作さざらんや、必ず以て之を興起すること有て之をして自から已まざらしむるを言ふなり。箋の説は或は其の時世に因て可なり。詩の面目は其の自然の性を以て可とすべきなり。

清酒既載 駢牡既備 以享以祀 以介景福

清酒既に載せ、駢牡既に備れり、以て享し以て祀し、以て景福を介にす。

【句釋】清酒は字の如く濁酒の反對。既載、樽中に在るが即ち載るなり。駢牡は即ち赤色の肉、以て祖靈に供するなり。既備、肉も供するまでに出來たるなり。享祀は前に度度辨せり。孔疏曰く、駢牡の事、作者後(文王)に於て周の尙ぶ所に據て之を言ふ。通解曰く、此の詩聖徳を咏歌するを主とす、當に每章皆豈弟に及ぶべし、此の章獨祭りて福を受るを以て言を爲す。故に朱子曰く、上章を承けて豈弟の徳あるときは祭必ず福を受ることを言ふなり。所謂上章を承るとは但其の豈弟を承く、其人を作すを并承するにあらず、各の開説す、上章は言ふ文王豈弟の徳あれば、必ず人を化するの治ありと、此の章は言ふ文王豈弟の徳あれば、必ず奉祀の福を獲と。

豈弟柞棫 民所燎矣 豈弟君子 神所勞矣
豈弟の柞棫は、民の燎ぐ所、豈弟の君子、神の勞ふ所、
【句釋】豈弟柞棫、民所燎矣、傳曰く、豈弟は衆の貌、箋曰く、柞棫の茂盛なる所以のものは、乃ち人の爛燥して、其の旁草を除き、之を養治して害無からしむればなり、原野は火を好む、秋冬之際に放火するときは、翌春生ずる所のもの益す以て盛んなり。然るに或は曰く、飯を炊ぐ爲めに燥くなり。恐くは前説是ならん。神は祭祀の時の神を指すにあらず、所謂天なり、上帝なり。所勞、勞は燎と諧韻の故に用ふ、佑助の意味なり、天が佑助するなり。

莫莫葛藟 施于條枚 豈弟君子 求福不回

莫莫たる葛藟、條枚に施へり、豈弟の君子、福を求めて回ならず、
【句釋】莫莫は盛んに施ふ貌。葛と藟とは一類なり、然らず二類なりと辨する者あり。顧氏曰く「箋」疏」共に云ふ葛なり藟なり、明らかに是れ兩様。施は樹に附著するを言ふなり。條枚は條枝なり、枚

幹なり。回は邪。鄭氏曰く、文王の福を求むる、徳を脩め以て之を俟つ、回邪の行を爲して以て之を要せざるなり。

【評論】早麓は六章四句を以て成る。「傳」曰く、早麓は祖を受るなり。周の先祖世后稷公劉の業を修む、太王王季申ぬるに百福干祿を以てすと。

思齊大任 文王之母 思媚周姜 京室之婦 大姒嗣徽音 則百斯男

思齊大任は、文王の母、思周姜を媚みて、京室の婦なり、太姒徽音を嗣ぎ、則ち百の斯男あり、【句釋】思は語助、齊は莊、大任は王季の妃なり。文王之母、文王は王季が父、大任は母なり。思は語助。媚は「イツクシム」愛なり。周姜は太王の妃、大任より言へば舅母なり。其の舅母を愛すと言ふは聊か議する餘地あるが、要するに敬事する意なり。京室之婦、大任は周の天子の婦人なり、天子より下庶人に及ぶまで夫婦の稱は一般に通ず。是を以て婦と言ふ、母と婦とが諧韻なり。大姒は文王の妃。嗣は繼嗣なり。徽音は美音、周姜の美音は大任之を嗣ぎ、大任の美音は大姒之を嗣ぐとなり。則ち百斯男、三代此の如く相和し相愛し、家庭圓滿なり、是を以て其の中に男子を生むこと洵とに多しとなり。百は大數を言ふ。史記管蔡世家に云ふ武王兄弟十人、母を大姒と曰ふ、文王の正妃なり、其の長子を伯邑考

と曰ふ、次を武王發と曰ふ、次を管叔鮮と曰ふ、次を周公旦と曰ふ、次を蔡叔度と曰ふ、次を曹叔振鐸と曰ふ、次を鄭叔武と曰ふ、次を霍叔處と曰ふ、次を康叔封と曰ふ、次を聃叔季載と曰ふ、其の次必ずしも此の如くならず、其の十子の名は當に然るべきなり。或は曰く、此の十子外に毛、郟、雍、滕、畢、原、豐、郇の八人あり、則ち俱に武王の異母弟なりと。

惠于宗公 神罔時怨 神罔時恫 刑于寡妻 至于兄弟 以御于家邦

宗公に惠うて、神時を怨む罔し、神時を恫む罔し、寡妻に刑して、兄弟に至り、以て家邦に御へり、【句釋】惠は順なり。宗公は「傳」に宗神なり。朱子曰く、宗廟の先公なり。神は宗公の神靈。罔は無と同じ。時は是れと同じ、兒子能く禮を守る、神是れ怨むもの無きなり、又痛恫するものも無きなり。刑は法度、乃ち寡妻に以てする法度なり、寡妻は天子が自から寡人と稱するが如きなり、是れ謙遜の語。至于兄弟、以御于家邦、文王の法度を示す、先づ其の妻より、次に兄弟に至り、又次に家邦に迎ふるなり。要するに神人合一したる所、天下を治平すと云ふに在るなり。朱公遷曰く、孝鬼神を感じて、敎家國に行はる、皆積盛然ることを致すなり、此れ其の徳の施す所の者此の如きを言ふなり。

離離在宮 肅肅在廟 不顯亦臨 無射亦保 肆戎疾不殄 烈假不瑕 離離として宮に在り、肅肅として廟に在り、顯かならざれども亦臨めり、射ふこと無うして亦保つ、肆

に戎なる疾殄えざれども、烈假瑕たず、

【句釋】雖雖は和の至り也。肅肅は敬の至り也。「箋」曰く、宮は辟離宮を言ふ。羣臣、文王の養老を助くるには則ち和を尙び、祭を廟に助くるには則ち敬を尙び、禮の宜しきを得るを言ふ。不顯亦臨、「傳」曰く、顯を以て之に臨む。朱子曰く、不顯は幽隱の處なり、文王幽隱に居ると雖も、亦常に之に臨む者あるが若し。二説異なるが如きも、要は隱顯に因て其の道を二にせざる也、隱に在て惡を爲し、顯に在て善を爲すが如きことあらずとなり。無射亦保、「傳」曰く、保安して厭ふこと無し。朱子曰く、厭射ふこと無しと雖も亦常に守る所あり、其の純にして已ざることは是の如し。朱子の説、雖字刪る可し、厭ふこと無きなり、雖を挾むの間は無きなり。肆は故なり。戎疾は非常の難義と言ふ意味、非常の迫害と言ふ意味なり。不殄、殄は盡なり竭なり。文王の姜里に囚はれ、又昆夷の害等、總ての害殄ゆる時なきも、烈假、烈光が假大にして、聊かも其の徳を取げざるなり。孟子に所謂浩然の氣宇宙に滿るものは、天下の障害物、悉く吾有と爲るものなり、嚴華谷曰く、宮に在るときは和し、廟に在るときは敬し、其の誠寓する所に隨て形見す。不顯の處は、人の見ざる所なるも、亦臨む所あるが若し、洋洋乎として上に在るが如きなり。無厭の時、踐履已に熟して亦自から保守、悠久にして間無きなり。清潭曰く、是の章、朱子の集注は肆戎以下の二句を下章に移して亦保に止め、即ち四句の詩とす。今「毛傳」に従がつて六

句の詩とす。

不聞亦式 不諫亦入 肆成人有徳 小子有造 古之人無斃 譽髦斯士

聞かざれども亦式あり、諫めざれども亦入れり、肆に成人は徳あり、小子造すことあり、古の人斃ふこと無し、譽ある髦たる斯士、

【句釋】不聞亦式、式は法度、文王は他に教を聞かずとも、天と合一するの徳、自から法度に稱ふ。不諫亦入、諫争の者無しと雖も、文王の資性、善より善に入らざるは無し。「箋」曰く、式は用なり、文王の宗廟を祀る、仁義の行あつて、聞達せざる者も亦之を用ひて祭を助け、孝悌の行あつて諫争する能はざる者も亦入るを得、其の人を使ふに之を器にして備るを求めざるを言ふ。「箋」説は豎に過ぐ、今取らず。肆は故。成人は「箋」に曰く大夫士なりと。朱子曰く、冠以上を成人と爲す、(二十)今曰く、下の子の文字あるより見れば冠以上の説然るを覺ゆ、大夫士と斷ずるは可ならず、成人は有徳なり、小子は有造なり、少年も童子も皆文王の徳化を蒙りて一は徳を積み、一は造すある也、造は有爲の人と爲る意なり。古之人は聖王明君を指す、直接には文王を言ふ。無斃、斃は射と同じ、厭ふなり。事に當り斃ふこと無し、勤勉なるの謂なり。譽髦斯士、髦たる斯士と言はるる譽を、成人にも童子にも得せしめたるは即ち文王の徳ならずや。

【評論】思齊は四章六句を以て成る。朱子は五章、二章は六句、三章は四句とす、其の韻法も明白に知る能はざるを以て此の相違を爲すのみ、四章六句と爲すも、義理に於て解し難きにあらず、故に舊說に従ふなり、尙後賢の考を待つ。

皇矣上帝 臨下有赫 監觀四方 求民之莫 維此二國 其政不獲 維彼四國 爰究爰度 上帝耆之 憎其式廓 乃眷西顧 此維與宅

皇なるかな上帝 下を臨て赫たることあり、四方を監觀して、民の莫まらんことを求む、維此の二國、其の政獲ず、維彼の四國、爰に究め爰に度り、上帝之を耆さんとし、其の式廓を憎さん、乃ち眷み西に顧みて、此れ維與へ宅らしむ、

【句釋】皇は大なり。臨下有赫、上帝を以て其の力を示すに由なく、太陽を以て暫らく其の状を出す。監觀四方、四方を四方の國と見るは小なり、天下の代名詞と見て可なり。求民之莫、莫は定なり、民の歸處宜しく安定なるを求むるが上帝の仁愛なり、殷紂の暴虐は上帝の嫌ふ所なり。二國は夏と商となり。夏は禹王より十七世の天子を桀と稱す。暴虐無道なるを以て殷の始祖湯王に亡ぼさる、四百五十八年間の朝なり。商は湯王より二十八世の天子を紂と稱す、夏桀に劣らざる暴虐無道なるを以て周の始祖武王

に亡ぼさる。六百四十四年間の朝なり。其政不獲、二國の政治は其の宜しきを獲ざるなり、民の安定する所無し。維彼四國、二國には維此と用ひ、四國には維彼と用ふ。之を考ふるに彼此の字別に輕重あるにあらず、但語の優に從ふのみ。四國は『箋』曰く、密と阮と祖と共となり。爰究爰度、究は究尋、度は謀度、上帝が民の爲め君主と爲るべき人を四方の國に或は尋ね、或は度り玉ふとなり。上帝耆之、傳に耆は惡なり、其の高位に用ひて大政を行なふを憎むなり、(二國トナリ)『箋』曰く、耆は老なり、天須く此の二國に假し、之(二)を養ふ、老に至るまで猶ほ變改せず、其の用て惡を爲す所の者浸く大なるを憎むなり。朱子曰く、耆は致なり、上帝の致さんと欲する所のものは、則ち其の疆頃の規模を増大にす。以上三說の中にて姑らく朱說を可とす、以下の文相にて判然とするなり。憎其式廓、傳も『箋』も此の四字に就て說なし。朱子曰く、憎は増の誤寫ならん、式廓は猶規模と言ふがごとし、上帝の欲する所は疆境に於て其の規模を増大にするに在り、是に於てか乃眷西顧、眷然として目に太王を顧みる。此維與宅、上帝が西土を顧視するに此の岐周の地を以て太王に與へて居宅と爲さしむとなり。朱子の此の説有定すべし。『通解』曰く、夏商は紂を指すにあらず、太王は蓋し祖甲の時に當る、紂尙ほ未だ生れざるなり、但此の時殷政漸く衰ふ、故に然か云ふのみ、祖甲は殷の二十二世、紂王より百三十年前なり。

作之屏之 其蕃其翳 修之平之 其灌其柵 啓之辟之 其榘其楮 攘之剔之

其屨其柘 帝遷明德 串夷載路 天立厥配 受命既固

之を作なき之を屏たるは、其それ菑たれ其たれ翳たれ、之を修をめ之を平たらぐるは、其それ灌し其れ柘を、之を啓ひき之を辟ひくは、其それ柘かは其れ柘を、之を攘はひ之を剔きるは、其それ屨く其れ柘を、帝てい明德めいを遷うつして、串夷くわんい路みちに載のりて、天てん厥くわ配はいを立たて、命めいを受うくること既すでに固かたし、

【句釋】作は拔起なり。屏は屏去なり。菑は音「シ」、訓「アラタ」一歳の田なり、今は木の立て死る者ものを言ふ。翳は音「エイ」、草木の陰蔽ふを以て本義とす、今自いまから斃たるる者ものを言ふ。修と平とは樹の茂密なるを安排するなり。灌は叢生なり。柘は音「レイ」「傳」に柘しなりと、樹榭こくせ檄に似にて庫小ひせうなり、子は細栗しほの如く食ふ可し、江東かうとうに榭せと爲すと「字書」に見ゆ。朱子曰く、柘は行生する者なり、俗語ぞくごの竝木なみきを言ふなり。岡公翼おかこうよくは朱子の説其の義長せりと。案するに「説文」曰く、大雅の文、許説木の義と爲す、「毛傳」引伸假借の義と爲す、屋桁上の標なり、標は表なり高なり、是に由て之を觀れば、高くして列を爲す樹の謂ひなり。啓は芟除するなり。辟も除去するなり。柘は河柳、楊に似て赤色河邊に生ず、今御柳と曰ふ處處多く種う、生活し易し、然れども未だ大木に至るものを見ず。其の御柳と曰ふも亦是れ漢名、「五雜俎」に謝肇淛の説く所あり、枝の垂れずして短かきもの即ち是の柳なり。柘は「傳」に横なり、横は未だ和訓を見ず。朱子曰く、腫節扶老に似て杖と爲す可きもの。陸機曰く、今の靈壽是れなり。攘

と別は穿剔して其の繁冗を去て成長せしむるを謂ふなり。屨は音「エン」山桑なり。柘も山桑なり、共に美材、弓幹を作るべきものなり。「箋」曰く、天既に文王を顧て、四方の民大に之に歸往す、岐周の地、險隘樹木多し、乃ち競うて刊除して自から居處す、言ふころは有徳に就くの甚だしきなり。帝遷明德、「傳」曰く、徙りて文王の徳に就くなり。朱子曰く、明德の君即ち太王に就くなり。今日く、太王然るべし文王にはあらざるなり。串夷は「箋」曰く混夷なり、音を以て寫す或は然らん。載路、朱子曰く、載路は路に満ちて去るを謂ふ。「箋」曰く、混夷を伐つは天意に應ずるなり。天立厥配、配は太王に匹配せる賢妃即ち大姜なり。「箋」曰く文王が大妣を得て配と爲すなりと、其の然らざることは明白なり。受命既固、天の命に依て此の如し、其の堅固にして鴻業を爲すこと知る可し、太王が岐周に徙りし次第順序を敘せし詩なり、樹を伐り、山を開き、險を超え、王業の基を開き、而して天の徳之に賢妃を與へ、以て内助と爲さしむとなり。

帝省其山 柞棫斯拔 松柏斯兌 帝作邦作對 自太伯王季 維此王季 因心則友 則友其兄 則篤其慶 載錫之光 受祿無喪 奄有四方
帝其の山を省するに、柞棫斯拔んづ、松柏斯兌れり、帝邦を作し對を作すこと、太伯王季よりす、維此の王季、心に因りて則ち友なり、則ち其の兄に友あり、則ち其の慶を篤うし、載ち之に光を錫ふ、祿を

受けて喪ふこと無く、四方を奄有す、

【句釋】其山は岐周の地、一帶の山を指す。兌は「傳」に易直とあり、拔んで兌るの義とす。「箋」曰く、天既に文王を顧み、乃ち其の國の風雨を和し、其の山の樹木をして茂盛ならしむ、徒らに其の民人を養ふのみならず。作邦作對、傳に對は配なり、邦のみ作して對なきときは邦たるの資格なし、是に於て邦あらば必ず對あり、帝は其の對を以て誰に命するや。自太伯王季、太伯王季を以て即ち周の對と爲す、是に於て周の國家あり、又君主（對）あるなり、然るに太王の長子たる太伯は王季に嗣を譲り吳に去て返らず、已むを得ず弟の王季立て邦を嗣ぐに至る。因心は朱子曰く、勉強するに非ず、強て爲さんと欲するの謂にあらす、自然の意とす。則友、傳曰く、兄弟に善なるを友と曰ふ。則友其兄、兄が當然主と爲るべき邦を弟が有と爲し、而かも其の兄に友なりとは何ぞ。則篤其慶、兄が邦を譲られしとて之を治めず驕奢を爲さば、其の慶を篤うする人にあらす、又此の如き弟なるを知らば太伯は決して邦を譲らざるなり、是を以て弟たる者固より聰明、豈兄の意に背かん、日夜勵精、能く君たるの道を修む、周家の慶は益す篤きを爲す所以なり、周家の大は兄弟二人の小に比すべきにあらす。載錫之光、「箋」曰く、王季は宗族にも善、又尤も兄に善、太伯乃ち其の功美を厚明にし、始めて之を顯著ならしむ。「箋」意は兄が弟の光を著はさしめたるなり。朱子曰く、其の兄に與ふるに讓徳の光を以てす、猶ほ其の人を知る

明にして、徒らに讓ることを爲さざることを彰かにすと曰ふが如きのみ、朱子の意は弟が兄の光を著はさしめたるなり。漢儒と宋儒と意見の異なる多く此の類。余を以て公平に論せしめば朱子の説詩意を得たるもの如し、兄も弟の光を發せしめんとし、弟も兄の光を發せしめんとし、兄弟共に同一の事に出でしは疑ふの餘地なし、然れども當面の詩意を主として之を言へば、因心則友より意味が貫ぬき來るなれば必ずや弟が兄の光を錫ふと見ざるべからず。受祿無喪、兄の徳は言はざるも可、弟の徳已に此の如し、是を以て天祿を長く喪ふこと無く、文王と爲り、武王と爲り、位を相續し來り、奄有四方、遂に天下を有するに至るとなり。徐光啓曰く、因心の句を觀て、聖人但天命を知るのみ、讓るべきときは讓り、其の名を邀めず、受くべきときは受けて其の跡を避けず、意も無く必も無く、爾を忘れ我を忘る、其の天顯の愛、鞠子の哀に於て分毫も損すること無きを見るべし、推して之を論ずれば、堯舜禹の授受其の意亦只是の如し。張叔翹曰く、按ずるに王季の其の兄を友愛する者、形迹の間に拘拘たらず、故に因心と曰ふ、篤慶錫光正に其の因心の愛を成す所以なり、詩人の立言深意あり、人罕に之を知る、此の詩三王各の一段の語を敘す、唯此れ王季を敘する處、上章太王に接して説下す、上文と相聯ぬ、下章又先文王を挿入して、以後二段の意を起す、此の如くなるときは血脈聯貫して板板ならず、突兀ならず、此れ詩人行文の妙處、王季上太王に承け下文武を開く、其の勤の績ありと雖も、故事實の詩

人の頌述に稱ふべき無し、但其の徳を稱するのみ、然れども只此の如く數語、豈寂寥ならざらんや、詩人却て太王に従うて、太伯の讓に説到し、直ちに説到文王に比し、孫子に施す、他人枯澹の處、他却て許多の波浪を翻出し、許多の關節を生出す、如椽の筆なり、此等の處、以て作文の法を悟る可し、詩傳闡云ふ按ずるに古樂録稱すらく、太王疾に寢ぬ、季歴に傳へんと欲す、是に於て太伯と虞仲と去り、被髮文身し、王の爲め藥を探るに托す、後太王卒すと聞て、還りて喪に奔る、門に哭して、夷狄の人、王庭に入ることを得ざることを示す。季歴涕を垂れて之を留む、肯て止す、吳に適く、是の後季歴哀慕の歌を作りて曰く。先王既殂 長實異都 哀喪腹心 未寫中懷 追念伯仲 我季如何 梧桐妻妻 生于道周 宮館裴徊 臺閣既除 何爲遠去 使此空虛 支骨離別 垂思南隅 瞻望荆越 涕淚交流 伯兮仲兮 逝宵來游 自非二人 誰訴此憂、譯に曰く、先王既に殂す、長實都を異にす、腹心を喪ふを哀しみ、未だ中懷を寫さず、伯仲を追念す、我が季如何、梧桐妻妻として、道周に生ず、宮館裴徊して、臺閣既に除く、何爲遠く去て、此をして空虛ならしむる、支骨離別して、思を南隅に垂る、荆越を瞻望し、涕淚交流す、伯や仲や、逝て宵て來游せんや、二人に非ざるよりは、誰にか此の憂を訴へん。按ずるに此の歌蓋し後人の擬托、然れども善く王季が爲め心を傳ふ、云ふ所の奔喪既に畢り、宵て止らずして吳に適くは、當に是れ實録なるべし。蓋し至德太伯の如く、父歿して奔喪せざるの理なし、伯既に

意を讓に決す、必ず藥を衡山に探るの故轍を踵みて人をして以て物色するを得せしめじ、故に知る吳に適くは奔喪の後に在るを。『史記』乃ち云ふ太伯荆蠻に犇り、自ら勾吳と號す、荆蠻之を義とし、從つて之に歸する千餘家、立て吳太伯と爲す。荆即ち吳と爲す者の若きは、遂に後人の臆附を滋す。後漢の趙燁云ふ殷末世衰へ中國侯王 數兵を用ふ、太伯荆蠻に及ばんことを恐れ、城を起す、周三百里、西北隅に在り、名けて故吳と曰ふ、卒して梅里の平墟に墓むる、則ち又吳即ち荆と爲す者の若し、荆の吳を去る遠なり、固に是の若く其れ辨なけんや、『焦氏筆乘』又云、何を荆蠻と謂ふぞ、古は中國亦夷狄あり、蠻の荆に處する者、或は嘗て吳に徙る、太伯其の徙る所の地に至るのみ、此れ皆其の一を知て、其の二を知らず、孔子太伯の三讓を稱す、必ず指す所あらん、夫れ荆に適き吳に適く、亦再と云ふのみ。此の議古義亦載す。又『魯詩世學』を引て豊坊云ふ、『史記』周の本紀に古公の長子太伯、次を虞仲と曰ふ、太姜少子季歴を生むと謂ふときは太伯乃ち庶長にして、季歴は嫡出爲るなり、太伯庶出なるときは、國其の有にあらす、季歴固より當に立つべし、何を以てか夫子之を讓と謂ふ、殊に知らず夏商質を尙ぶの世、其の傳唯其の長を立るに在て、而かも未だ嫡庶の辨あらず、周に至りて始めて嫡を立るの法を定む。蓋し太伯長を以て自から居らず、嫡を以て季歴に推しより、遂に萬世の準則と爲る、夫子商の制に據て之を稱す。此れに據るときは太伯虞仲、太姜に出でざる理或は之ありと雖も、商嫡を立すと謂ふが若きは

則ち紂と微子と本一母に出づ、尙微子を生む時、未だ立てて后と爲さず、大史、法に據て争うて終に紂を立つるに至る、豊が説非なり、亦辨せざるべからず。

維此王季 帝度其心 猶其德音 其德克明 克明克類 克長克君 王此大邦
克順克比 比于文王 其德靡悔 既受帝祉 施于孫子

維此の王季、帝其の心を度り、其の德音を猶にして、其の徳克明かなり、克明かにして克類ち、克長し、克君たり、此の大邦に王として、克順ひ克比めり、文王に比つて、其の徳悔ゆること靡し、既に帝の祉を受け、孫子に施せり、

【句釋】帝は上帝、度其心、傳に心能く義を制するを度と曰ふ、上帝が王季が心をして能く其の義を制せしむるなり、帝が王季を忖度するにはあらず。猶其德音、猶は音「ハク」、訓「シヅカ」、靜と「傳」にあり。「説文」豸部に此の字を出さず原意を知るに苦しむ。朱子曰く「春秋傳」「樂記」皆莫に作る、其の莫然として清淨なるを言ふなり、姑らく從ふ。克明、四方を照臨する徳あるが故に明なり。類は分辨、明なるが故に羣物を分辨す、善惡共に分辨するなり。克長は教誨して倦ざるの謂なり。克君は賞罰が極めて正しきなり。「箋」と朱子と同一の説なり。王此大邦、克順克比、傳曰く慈和徧服を順と曰ひ、善を擇んで從ふを比と曰ふ。「箋」曰く、王は君なり、王季を王と稱するは追王なり。(生前ニ王ト稱セザリシナリ)比于文

王、此の比に就て、「箋」曰く王季の徳、文王に比するに悔ゆる所あるなきなり。朱子曰く、比は至于なり、王季の徳此の六者を能くす、文王に至りて、其の徳尤も遺恨無し。朱説を以て勝れり。文王に至りて殆んど圓滿になりたりとの意なり。王季と文王とを比較するなどは其の人に背く。既受帝祉、「箋」曰く、帝は天なり、祉は福祉。施于孫子、其の徳施て子孫に及ぶとなり。

帝謂文王 無然畔援 無然歆羨 誕先登于岸 密人不恭 敢拒大邦 侵阮徂共

王赫斯怒 爰整其旅 以按徂旅 以篤周祜 以對于天下
帝文王に謂ふ、然く畔援すること無かれ、然く歆羨すること無かれ、誕に先づ岸まれるに登れり、密人恭しからず、敢て大邦を拒み、阮を侵して共に徂けり、王赫として斯に怒り、爰に其の旅を整へ、以て徂旅を按む、以て周祜を篤うし、以て天下に對ふ、

【句釋】帝謂文王、帝が文王に謂ふ意を詩人代つて謂ふなり。無然は猶ほ此の如くなる可らずと言ふが如し、禁止の詞とす。畔は離畔。援は援攀、此を捨て彼を取るを言ふ。要するに一方に私しすることはならぬとなり。彭廬陵曰く、無畔援は則ち中正にして私に溺れざるなり。「箋」曰く、畔援は猶ほ跋扈と言ふが如し、是れ道に叛きて人の國を援取することなれとなり、朱説を以て可とす。歆羨、朱子曰く、歆は欲の動くなり、羨は愛慕なり、情を肆ままして物に徇ふを言ふなり。コレもすることならぬ。誕

は大なり。岸は高位なり、道の究極する處、左も右も善も悪も小なるものに附著すること無く、先一等
 高き處へ登れとなり。密人不恭、朱子曰く、密は密須氏、媯姓の國、今の寧州に在り。安定郡陰密縣、
 甘肅省平涼府涇州靈臺縣の西五十里、邠州の西界と相接するなり。不恭は無禮と言ふが如し。敢拒大邦、
 岐周を指して大邦と言ふ、周の命を拒むは何事ぞや、周の命は徒らに兵を起す無きに在り、然るに不恭
 にも兵を起して、侵阮徂共、阮も共も密國の近鄰なり、密が武藏とすれば、阮は下總なり、共は上總な
 り。密人周命を用ひず、阮より侵して共に及ぶなり。王赫斯怒、文王赫然として天下の爲めに斯に怒り
 玉ふ。整は整正なり。旅は軍旅なり。以按徂旅、徂旅は行軍のことなり、密人が共に赴むかんとする行
 軍を此に止め玉ふなり、密人遂に共に入るを得ず。以篤于周祜、祜は福祜、密人が共に赴むくには必ず
 周地を過ぐ、周地を軍旅が過ぐとせば、民人は自から種種の害を蒙むること明白なり、是に於て文王は
 之を抑止す、周民の祜福と言ふべきなり。以對于天下、義の爲めに我が兵強しとせば、以て天下の威信
 を受ること必然なり。私の爲めならざればなり、小國は勢ひ周に歸せざるべからず。輔慶源曰く、人心
 一も畔援歆羨有るときは、私欲に流る、凡そ云ふ所必ず先知先覺する能はず、又焉んぞ能く濟す所あ
 らんや、況や周兵行師の際、情欲易縦の時に於てをや、二病去らずんば、幾何か窮蹙に流れざらんや、
 故に此の章將に文王の征伐を言はんとして、先づ文王の此の病無きを言ふなり。誕先登于岸と涉水を以

て譬と爲すなり。王半山曰く、畔援歆羨する所あり、其の欲を得ずして怒るときは其の怒りや私のみ、
 文王の怒、是れ乃ち民と同じく怒つて、人の私欲に異なるなり。

依其在京 侵自阮疆 陟我高岡 無矢我陵 我陵我阿 無飲我泉 我泉我池

依として其れ京に在り、侵すこと阮の疆よりす、我が高岡に陟れば、我が陵に矢ぬる無し、我が陵我が
 阿、我が泉を飲む無し、我が泉我が池、其の鮮原を度り、岐の陽に居り、渭の將に在り、萬邦の方、下
 民の王なり、

【句釋】依は依依なり、安全なる貌。京は周京、大都元來安全なり。侵自阮疆、密人命を用ひず妄りに
 兵を起す、文王赫怒せるが故に遂に我が兵を動かし、阮の地を通過して以て密國を平定せるなり。陟我
 高岡、我が周地の高岡なり。無矢我陵、我が周地の陵に密兵は矢ぬる無し、矢は陳なり、密人は我が周
 地を如何ともする無きなり。我陵我阿、無飲我泉、我泉我池、五句中に我の字七字あり、之を讀むの際
 聊も厭ふべき無く容易に口にする處、詩法の妙と嘆せざるを得ず。我が周地に密兵が馬に飲ふこと無
 く、周地の泉池は即ち周地の泉池なり、密人に侵さるる所無きを言ふ、或は阮の地は既に我が有なるが
 故に此の阮地を指して皆我陵我阿等と言ふなりと。此の如く解するも、前條の如く解するも要は同じ。

度其鮮原、度は度り相るなり。鮮は善なり妍なり、善き平原を相して遂に居岐之陽、岐山の陽に程邑あり、是以て居るべき處と定めたり。阮の地帯を以て我が有する處と爲す。渭之將、將は側と同じ、程邑は渭水の側、岐山の南に當るなり。萬邦之方、方は方郷にて我に郷ふなり。下民之王、密の民も阮の民も皆仰ぎて以て王と爲すなり。輔慶源曰く、文王の兵密を侵し、乃ち遽かに我陵我阿我泉我池、敢て其の兵を陳し、其の水を飲む者無しと曰ふ者、辭直理正、威靈氣饒、敵する者有ること無し。所謂帝王の道萬全に出る者なり。嚴華谷曰く、文王西伯を以て密の罪を討す、豈一毫畔援の私あらんや。阮不幸にして密と鄰を爲す、幸にして文王の伯たるに遇ふ、崇を伐つとき訊讖伐肆の事あり、而して密を伐つことを言はざるは、是れ師其の境に次り、密人即ち服し、戰ふことを待たざればなり。

帝謂文王 予懷明德 不長夏以革 不識不知 順帝之則 帝謂文

王 詢爾仇方 同爾兄弟 以爾鉤援 與爾臨衝 以伐崇墉

帝文王に謂ふ、予明德を懷ふ、聲と色とを大にせず、夏なるを革とを長さず、識す知す、帝の則に順ふ、帝文王に謂ふ、爾の仇方に詢て、爾の兄弟を同じうし、爾の鉤援と、爾の臨衝とを以て、以て崇墉を伐て、【句釋】予は上帝が自から稱す。予は明德の人を懷ふ久しきなり、其の明德の人は文王是れなり。不大聲以色、聲は號令、色は威權、此の號令と威權とを大にせずして、天下服するは則ち是れ、言はずして

信あり、動せずして化する者、聖者以外に此の事は能はざるなり。文王の聖者なること知るべし。不長夏以革、傳曰く、長大を以て革むる所あらず。箋曰く、夏は諸夏なり、天の言に曰く、我人君光明の徳ありて、虚しく言語を廣め、外容貌を作さず、諸夏に長として、以て王法を變更せざるなり。朱子曰く、夏革は未詳と。呂東萊曰く、私意を縦ままにせざるが夏革なり、此れ明德の實なり、姑らく「箋」説に従ふべし。不識不知、識は記なりと注する文字、乃ち見しる心覺えの意義なり、因て淺し。知は外物の白とか黒とかが心に入ることなり、因て深し。心と意と一にして二、二にして一なる如く、知と識とは一にして二、二にして一なり。然るに何等の心意を勞せずして、順帝之則、帝の則とする自然の天理に隨順するなり。文王の徳を言ふ。詢爾仇方、詢とは仇方の罪を鳴して責め問ふ義なり、兵を出すも私にあらす、彼に罪あればなり。仇方は敵國と同じ。同爾兄弟、甲の惡に乙丙が與せば共に是れも并せて問ふ、其れ等を稱して兄弟と曰ふ。同の字は罪を問ふこと同じとなり。叔翹曰く、崇(國)を謂うて仇方とするは虎(崇國)名紂を倡めて不道を爲す、肆行暴亂にして方伯の約束に遵はず、是れ我と仇敵を爲すなり。以爾鉤援、鉤は梯の類なり、援は助。與爾臨衝、臨は臨車、高くして敵陣に臨むなり。衝は衝車、大にして敵陣を突くものなり、我より之を言へば正しく仇たる者の崇國の爲め、或は鉤と爲りて彼を助け、或は臨車と爲り、或は衝車と爲る者は盡な我が敵なり、一括して伐たざる可らざるものなり。以伐崇墉、墉は

城なり、虎侯初め西伯を嫌ひ之を紂王に讒言す。紂王其の言を信じて西伯を羑里に囚ふ。西伯の臣、珍奇異物を紂に獻ず。是に於て紂王西伯を免し、之に弓矢を賜ふ。西伯は弓矢を得て、征伐するの權を得、乃ち虎侯を伐て以て之を服す、此の詩乃ち此の事を言ふなり。然るに『淮南子』曰く文王徳を砥ぎ政を修む、天下二分之に歸す。紂聞て之を患へ、曰く余一人を伐んことを恐る、乃ち文王を羑里に拘ふと、皆崇侯の讒に及ばず、『左傳』文王崇の亂に因て之を伐つと言ふ、亦文王を讒することを見ず。蓋し崇が西伯を讒すること獨『史記』の周紀に見る、詩に伐崇の事あるを以て其の説を傳會するか。徐光啓曰く、仇方の句看得して大なるを要す、文王の仇は、天下の仇なり、故に師を興し衆を動かして已むことを得ざるなり。徐氏の説拔羣なりと謂ふべし。

臨衝閉閑 崇墉言言 執訊連連 攸馘安安 是類是禡 是致是附 四方以無侮

臨衝蒞蒞 崇墉攸攸 是伐是肆 是絶是忽 四方以無拂

臨衝閉閑たり、崇墉言言たり、訊を執ふること連連たり、馘する攸安安たり、是れ類し是れ禡し、是れ致し是れ附く、四方以て侮る無し、臨衝蒞蒞たり、崇墉攸攸たり、是れ伐ち是れ肆ち、是れ絶ち是れ忽せり、四方以て拂ること無し、

【句釋】閉閑は二つの車徐緩なり。言言は城の高大なり、閉閑は未だ城に逼らざる時、言言は高大な

るを見て急に攻撃するなり。執訊、特に罪ある者を執るなり。連連は字の如く二人に止らず續續と執る貌なり、攸馘、馘は獲なり、降服せざる者は殺して其の左の耳を獻するを馘と曰ふ、馘或は馘に作る。安安は字の如く噪噪しからざるなり。是類是禡、征伐に臨む際、軍神を祭る、内に於てするもの類、外に於てするもの禡なり。朱子曰く、類は將に師を出さんとするとき上帝を祭る、禡は征する所の地に至りて始めて軍法を造る者を祭る、黄帝と蚩尤を言ふなり。是致是附、致は召致なり、我敵軍に降服を命じて命に應じ至る者は我が軍の附とするなり。蒞蒞は臨車、衝車の彊盛なるなり。攸攸は言言と同じ、墉の堅くして大なる貌。是伐是肆、肆は突擊にて、伐は擊刺なり。絶と忽とは敵を全滅せしむるの謂なり。『解頤』曰く、閉閑然として徐緩なるは之を設けて用ひざるなり。言言然として高大なるは之を縦して未だ攻めざるなり。『政ムルナリトノ説ア』連連は相續て絶えざるなり、安安は詳密にして暴ならざるなり、伐て以て其の罪を聲し、肆て以て其の力を奮ふ、絶て以て其の祀を殄し、忽以て其の國を滅す、而して四方以て侮る者なし、四方以て拂る者無きなり。

【評論】皇矣は八章十二句を以て成る。『傳』曰く、周を美むるの詩、天殷に代るを監るに周に若くは莫し。周世徳を修むる文王に若くは莫し。朱子曰く、一章と二章は天太王に命するを言ひ、三章と四章は天王季に命するを言ひ、五章と六章は天文王に命じて密を伐つことを言ひ、七章と八章は天文王に命

じて崇を伐つとを言ふ。「講意」曰く、通詩皆天命を重んじて説く、本文第二章帝命等の字あるを觀る。故に朱子總注に於て各の天命を以て之を言ふ、毎に二章一類と作す、第二章を以て其の事を詳にし、以て其の意を足す。

經始靈臺 經之營之 庶民攻之 不日成之 經始勿亟 庶民子來

靈臺を經始す、之を經し之を營す、庶民之を攻る、日ならずして之を成す、經始亟にする事勿れ、庶民子のごとく來る、

【句釋】靈臺は文王の宮の名、神の精明なる者を靈と稱し、樓の高き者を臺と稱す、文王が命名せしや、侍臣なりや、又庶民が命名せしやは史上記載なし。經始は計りて立てしむるを言ふ。經之營之、經は縱横にして度るの義、營は回旋して度るの義、經も營も共に造の意義は一なり。庶民攻之、攻は力を用ふる義を以てすれば何事にも通ずる字なり、今以て作るとす。不日成之、期日を設けずして之を成すなり。勿亟、亟は急なり。「箋」曰く、靈臺の基趾を度始する、急に之を成すの意あるに非ざれども、庶民各の子父の事を成すと以ひ來りて之を攻るなり。朱子曰く、國の臺あるは氣祿を望み、災祥を察し、觀游を時にし勞佚を節する所以なり。孟子曰く、文王民の力を以て臺を爲り沼を爲り民之を歡樂す。其の臺を

謂ひて靈臺と曰ふ、其の沼を謂ひて靈沼と曰ふ、此の謂なり、天子は靈臺、諸侯は別に觀臺あり。【關中記】曰く、靈臺は長安の西北四十里に在り。「三輔故事」に云ふ豐水の北に在て、靈臺の西を經、文王又水を引て辟離靈沼を爲る。「括地志」曰く、今悉く處所を復すること無し、唯靈臺孤立す、臺基猶高さ二丈、周回一百二十步。或は曰く高さ二十丈、周回四百二十步。

王在靈囿 麀鹿攸伏 麀鹿濯濯 白鳥嚶嚶 王在靈沼 於物魚躍

王靈囿に在り、麀鹿の伏す攸、麀鹿濯濯たり、白鳥嚶嚶たり、王靈沼に在り、於物ちて魚躍れり。

【句釋】靈囿は靈臺の下に在るなり。囿は「イク」入聲讀と、「イウ」去聲讀とあり、今入聲音讀とす、蕃あるが園にて牆あるが囿なり、禽獸を域養する所以のものなり。「周禮注」に古は之を囿と謂ひ、漢家之を苑と謂ふ、一種の動物園なり。麀鹿は牝鹿なり、文王囿に至り牝鹿の伏す攸を見しなり。濯濯は肥澤の貌、滋養分を多く食はしむること知るべし。白鳥は羽色を以て言ふ、白鳥なる鳥にあらす。嚶嚶は潔白の貌なり。靈沼は囿中に沼池あるなり。於是嘆美の言。物は滿と同じ。躍は魚意の娛を知る、水陸の生物皆其の所を得て娛しむなり。詩は文王卒して後なること言ふを要せず、文王の徳化此の如きを詩人想像しての作ならん、或は西伯の生前此の如き狀ありしを見しものが後に作りしものか、此の間の消息は明白に知る能はず。

虞業維縱 賁鼓維鏞 於論鼓鐘 於樂辟靡
虞業維縱あり、賁鼓維鏞あり、於鼓鐘を論じ、於辟靡を樂しめり。

於論鼓鐘 於樂辟靡 鼙鼓逢逢 矇瞍奏公

於鼓鐘を論じ、於辟靡を樂しめり、鼙鼓逢逢たり、矇瞍公に奏す、

【句釋】虞は木を左右に立て、樂器を挂る具、大鐘にせよ半鐘にせよ、皆此の虞あらざるは無し。業は大板なり、虞の上に横木あり、之を柶と名く、柶の上に板を刻みて飾とするものなり。縱は業の上に鐘磬を懸る所に、綵色を以て崇牙を爲す其の狀縱然たるなり。賁は大鼓、長四尺、中圍三の一を加ふ。鏞は大鐘なり。論は論議の論にあらず、倫理を得るを言ふ、倫理とは鼓鐘の列ね方、次第あるの謂なり。辟靡は文王の學宮の名。鼙は音「タ」、蜥蜴の大なるもの、鱗あり皮を采て鼓と爲すべきもの、龍の一種とす。逢逢は其の音の和調を言ふ。矇瞍は「傳」曰く、眸子有て見ること無きを矇と曰ふ、眸子無きを瞍と曰ふ、共に瞽者なり、古は瞽者を以て樂師と爲す、音律に精を一にすればなり。奏公は字の如く公堂に在て奏すとすなり。

【評論】靈臺は四章。前二章は六句を以て成り後二章は四句を以て成る。毛傳には五章四句とす。呂東萊曰く、前二章は文王臺池鳥獸あるを樂しむの樂なり、後二章は文王鐘鼓あるを樂しむの詞なり。朱公遷

曰く、靈臺辟靡、本同じからざる處、靈臺にあるときは、靈臺の樂あり、辟靡に在るときは辟靡の樂あり、民と樂を同じうす、隨處皆然り、故に民之を樂しむ、詩人以て之を述ぶるを得。嚴華谷曰く、文王始めて靈臺を作る、民樂しんで之を成す、其の囿沼に遊ぶや、又其の鳥獸魚鼈有るを樂しむ、其の樂を辟靡に作すや、又其の鐘鼓の音あるを樂しむ、所謂文王此に鼓樂する欣欣然として喜色あるなり、言の盡ること能はずして、嗟嘆の已むこと能はざるは、民の愛戴するもの深きなり。

下武維周 世有哲王 三后在天 王配于京

下武維周、世哲王有り、三后天に在り、王京に配す、

【句釋】下は「箋」に猶ほ後の如しと解す。朱子曰く、未詳。或は曰く、當に文に作るべし、文王武王實に周を造るなり。「箋」曰く、後人能先祖に繼ぐ者、維周家最も大、世世益す明知の王あり、太王、王季、文王稍就徳を言ふ。朱説を以て善とす、下字は文と誤り易し。世有哲王、哲は「アキラカ」明なり、哲王の繼げること周の如きは無し。三后は太王と王季と文王なり、后は君と同じ。在天、魂は天に歸し、魄は地に歸すと云ふは後世の説にて上古は悉く天に歸すと云ふ。三后の靈精は天に在るなり。王は武王。配于京、京は鎬京、其の道を配行するなり。豊城の朱氏曰く、聖人興王の業、先后に非ずんば固より以

て之を前に基すると無くして、先后在天の神、聖人に非ずんば以て之を下に配すると無し、蓋し一代興
王の業、必ず世徳の相承け、以て之を其の始めに基すると有て、而して後聖徳の命を受け、以て之を其の
終に成すことあり、周の王業、文王より始めて著はれ、武王より始めて成る、是れ文王武王實に周を造
る、然して其の始を推し原るに則ち文王の前、固より王季あるなり、王季の前又太王あるなり、王業の
基する所、是に在らずと謂うて可ならんや。夫惟るに太王、王季、文王既に歿して其の精神、上天と合
するなり、是を以て武王之を繼ぎ、實に能く彼の在天の靈に鑄京に配す、則ち武王の三后に繼ぐ、王業
の成る所にあらずと謂て可ならんや。詩人は於て其の始を原ね、美を三后に歸す、其の終を要して、
功を武王に歸す、則ち繼述の責に任ずる者、其れ必ず法とする所を知らん。

王配于京 世徳作求 永言配命 成王之孚

王京に配す、世の徳作り求む、永く言に命に配す、王の孚を成せり、

【句釋】世徳は文王武王と經て、世世厚徳を積むなり。作求、作は起なり、其の先世の徳を求むるなり。
例せば今王は前王の徳を求め、前王は前前王の徳を求め、遂に能く其の功を成すなり。永言配命、三后
の教命に配すと爲すも、天理の命に配すと見るも二者共に通するなり。成王之孚、孚は信なり、王者た
るの信を天下に成すなり。武王が能く先王の徳を繼で、周家王道の信を示すをいふ。徐光啓曰く、即ち

夫子の所謂身天下の顯名を失なはず、孟子の所謂天下之を信するなり。

成王之孚 下土之式 永言孝思 孝思維則

王の孚を成して、下土之式とるは、永く言に孝を思へばなり、孝を思ふ維則とす、

【句釋】下土は上天に對する文字、天下の臣民を一括して言ふ詞なり。之式、王の信する所を信として、
天下の臣民皆之を法式とするなり。孝思、先王の志を正しく繼ぐものは是れ先王に孝なるなり。維則は
之式と文字は異なるも意は同じ。劉氏曰く、武王の孝、天下の法と爲す可し、此れ達孝たる所以、所謂
徳教百姓に加はり、四海に刑る、此れ天子の孝なりとは、是れなり。

媚茲一人 應侯順徳 永言孝思 昭哉嗣服

茲一人を媚しんで、應するに侯順徳なり、永く言に孝を思ふ、昭かなる哉服を嗣ぐこと、

【句釋】媚は愛なり悦なり。一人は武王なり、天下の民皆武王を悦愛するなり。應は應答、彼に我
を信するものあれば、我も彼に應せざるを得ず。侯は維と同じ。順徳は和順の至徳、武王民に應するに
和順の至徳を以てする也。昭は明なり。服は事なり、武王が先王の事を嗣ぐなり。李氏曰く、天下武王
を媚愛す、之に應するに順徳を以てす、所謂天下之に化する也、孝は徳の順、故に又言ふ武王永く孝思
あり、昭昭然として能く其の先世の事を嗣ぐなり。朱公遷曰く、二章より此に至る、其の詞を反覆す、

又章の意を以て、詳らかに之を言ふ、蓋し其の總述に善にして天下の心を得ことを美む。「通解」曰く、此の章前二章と俱に是れ一意、但前二章は武王身上より説て天下に及び去る、此は則ち天下より説て文王の身上に歸し來る、其の語勢同じからずと雖も、其の意は則ち未だ始より異ならず、故に朱子嘗て謂ふ生民は是れ事を序する詩、首尾を序し盡さんことを要す、下武、有聲等の詩、却て反覆歌咏の意思ありと、蓋し此を以てのみ。

昭茲來許 繩其祖武 於萬斯年 受天之祜

茲來許を昭にし、其の祖武を繩がば、萬斯年に於て、天之祜を受けん、

受天之祜 四方來賀 於萬斯年 不遐有佐

天之祜を受けて、四方來り賀せん、萬斯年に於て、遐ぞ佐あらざらん、

【句釋】昭茲の茲、「箋」曰く茲は此なり。朱子曰く、昭茲は昭哉なり。茲と哉と聲相近し、古蓋し通用ならん、乃ち昭なるかな來許と訓むが朱子派の法なり、今用ひず、茲來許を昭にすと訓む、以て前章の茲一人を媚くむと同一讀方とす。「傳」に許は進なり。「箋」曰く武王能く此の勤行を明にし、善道に進み其の祖考の履踐する所の迹を戒慎し、其の之を終成するを美む。朱子曰く、許は猶ほ所のごとし。今案するに許は進なり從なり聽なり。「ススム」「シタガフ」「ユルス」なり。處の意味に用ふるは後世の事なり、

今は進の義を取る。繩は「傳」に戒と注し、朱子は繼と注す。武は迹なり、其の祖が爲しし迹を戒慎するなり。於萬斯年は萬年に至るまでの意なり、俗に「イツマデモ」なり。受天之祜、祜は福と同じ。徐光啓曰く、此の章は創守の一道なるを見す。「講意」曰く、此下章と俱に武王の身上を重んじて説く、萬年は其の久きを言ふ、壽に非ざるなり。四方來賀は四方の侯國より以て武王の朝に來賀するなり、來賀するは即ち臣從たるを示すなり。不遐有佐、遐は何なり、佐は助なり。徐光啓曰く、此の章は天人の無理なるを見す。

文王有聲 適駿有聲 適求厥寧 適觀厥成 文王烝哉

文王聲あり、適つて駿に聲あり、適つて厥寧きを求め、適つて厥成るを觀る、文王烝なる哉、
【句釋】聲は佳聲、名譽、令聞があるなり。適は「箋」に述とあり、令聞の聲あるの道を述行するなり。朱子曰く、適義未詳、疑ふ聿と同じ發語の詞ならん。今兩義共に取らず。適は循なりとの「説文」に依て循の義を取る、循なるが故に聲あり、聲あるが故に循なり。駿は大なり。寧は安寧。成は成就。烝は

君なり、文王の征伐や天下安寧の爲なり、而して其の成就を觀る、文王は其れ眞に君主たるの徳あり。

文王受命 有此武功 既伐于崇 作邑于豊 文王烝哉

文王命を受け、此の武功あり、既に崇を伐ち、邑を豊に作る、文王烝なる哉、

【句釋】受命は上天の命を受たるなり。武功は文王が紂の爲め弓矢斧鉞を賜はり崇を伐て功を奏せしことなり。作邑于豊、崇を伐て岐より豊に遷る。豊は「地理今釋」に今日の江蘇省徐州府豊縣即ち是なり、とあるが、朱子曰く、鄆縣杜陵の西南に在りと。是の説可ならん、即ち陝西省鳳翔府なり。

築城伊洺 作豊伊匹 匪棘其欲 適追來孝 王后烝哉

城を築くこと伊洺し、豊を作ること伊匹す、其の欲を棘にするに匪す、來孝を適追す、王后烝なる哉、

【句釋】洺は城溝、蓋し方十里を一成田と曰ふ。洺は其の四方を繞る水溝、廣深各の八尺とす。作豊伊匹、豊邑を作るに大小共に城と偶匹す、諸侯よりは天子の制よりは小なり。匪棘其欲、棘は急、欲は望、其の欲望の急棘なるにあらず。適追來孝、心に欲する所は、王季勤孝の行を循追して其の業を進むるなり。王后は文王なり。「箋」曰く、諡(王)を變じて王后と言ふは、其の盛事にあらず、義を以て諡せざるなり。或説に非常の盛事にあらざるよりは諡を用ひずと。此の説未詳。

王公伊濯 維豊之垣 四方攸同 王后維翰 王后烝哉

王公伊濯かなるは、維豊の垣なり、四方の同まる攸、王后維翰たり、王后烝なる哉。

【句釋】王公の公は「箋」に事なり。朱子曰く功なり、文王の功業なり。濯は「傳」に大なり。朱子曰く著明なり、文王の功業が著明なるなり。垣は垣墻、豊に城き之を繞らすに垣墻を以てす、王は公侯を以て國の垣墻と爲すなり。四方攸同、天下心を同じくして之に歸する攸と爲る、民心一に歸するなり。維翰。翰は幹と同じ、王が國家の幹根と爲るなり。朱公遷曰く、黎に戡ち密を伐つ、文王の兵を用ふる一ならず、而して崇を伐つは其の功の最も著るしき者、四方攸同は歸する所あるなり、王后維翰は附く所あるなり、此に至り三分して二を有つ。

豊水東注 維禹之績 四方攸同 皇王維辟 皇王烝哉

豊水東に注ぐ、維禹の績なり、四方の同じうする攸、皇王維辟とす、皇王烝なる哉、

【句釋】豊水は朱子曰く、豊水東注して豊邑の東を経て渭水に入り河に注ぐ、清の李兆洛の「地理志韻編」に豊水は廣西平樂府荔浦縣西北五十里とあり。「類腋輯覽」にも鳳翔府に漆水と洺水と渭水とを出ししも豊水を出さず、案するに水の名にあらずして豊を繞るの水ならんか。維禹之績、禹王は舜の命を受けて洪水を治め功績を揚ぐ。皇王は武王。辟は君、武王が今都とする豊の地は禹王の本洪水を治めし處、暗に禹王と武王との徳を同じうするを含む、武王が鎬京に遷らざる以前なること勿論なり、此を言ふは

以て下文の鎬京に遷るの張本と爲すなり、王后を變じて皇王と爲す、益す其の大を爲す。

鎬京辟靡 自西自東 自南自北 無思不服 皇王烝哉

鎬京辟靡あり、西より東より、南より北より、思服せずといふこと無し、皇王烝なる哉、

【句釋】鎬は史家の稱する西都、武王始めて京を作る、秦に關中と稱し、漢武は京兆、馮翊、扶風の三

輔を立つ、即ち今日の陝西省西安府是れなり。張子曰く、周家后稷初めて部(陝西)に居、公劉(邠州)に

居、大王岐(陝西)に居、文王豊(陝西)に居、武王に至りて鎬に移る。是の時に當り民の歸する者日に衆

く、其の地容ること能はざるなり、遷らざるを得ざるなり。辟靡の辨は前章に在り。西東南北、無思不

服、四方の民、皆周に歸せざるは無きなり。坦叔曰く、四方先西を言ふ、鎬京西に在り、近き者先づ其

の化を被むるなり。『左傳』に周の景王曰く、我夏より后稷を以て、魏、邠、芮、岐、畢は吾が西土なり、

武王商に克に及んで蒲、姑、商、奄は吾が東土なり、巴、濮、楚、鄧は吾が南土なり、肅、慎、燕、亳

は吾が北土なり。其の四方を數ふるの次第正に此と同じ。劉氏曰く、鎬に都して先學(靡)を建るは、首善

の地、教化の源なればなり、周は西土より興る、近者化を被むり、其の後漸く東に及ぶ、故に自西自東

と曰ふ。周文王より、化已に南して江漢に行はる、其の後漸く北に及ぶ、故に自南自北と曰ふ。皆對舉

の辭、亦立言の序なり。

考ト維王 宅是鎬京 維龜正之 武王成之 武王烝哉

トに考ふれば維れ王、是の鎬京に宅らんと、維れ龜之れを正し、武王之れを成せり、武王烝なる哉、

【句釋】考ト維王、宅是鎬京、武王が都城を鎬に置かんとするは徒爲にあらず。龜トに稽考して以て之

を正定せしなり。凶出でずして吉出づ、是を以て其の無窮の基を成就せるなり。武王は誠に人君たるの

道を得たり。

豐水有芑 武王豈不仕 詒厥孫謀 以燕翼子 武王烝哉

豐水に芑あり、武王豈仕とせざらんや、厥の孫謀を詒し、以て翼子を燕んず、武王烝なる哉、

【句釋】芑は草の名、音「キ」、訓「モチキビ」、又「ニガサ」、又「ツツジタマ」、今此の三訓を取らず、但

草とす。武王豈不仕、仕は事、豐水猶ほ潤澤を以て芑菜を生ず、況や武王豈澤を以て後人に及ぼすを事

とせざらんや。詒は遺なり。燕は安なり。武王が子孫に遺すの謀、種種あるべきも、要は敬恭に在る

と知るべし。翼は敬なり、翼子は成王は勿論、其の子孫まで含むと知るべし。輔氏曰く、此の章兩説

同じからずと雖も然かも孫謀を遺して翼子を安んずるを以て、武王の事と爲すは則ち同じ。

【評論】文王有聲は八章五句を以て成る。此の詩武功を以て文王を稱し、武王に至りては則ち皇王維

辟、無思不服と言ふのみ、蓋し文王既に其の始を造すときは、武王續いて之を終ること、難きこと無き

なり。又以て文王の文、武に足らざるに非ずして、武王の天下を有つ、力を以て之を取るに非ざること
を示すなり。蓋し文武の時の人の詩なりや、或は文武の後の詩なりやと言はば、成王周公以後の詩と定
むべし。

文王の什十篇、六十六章、四百一十四句。

生民の什三の二

厥初生民 時維姜嫄 生民如何 克禋克祀 以弗無子 履帝武敏 歆攸介攸止

載震載夙 載生載育 時維后稷

厥の初め民を生む、時維姜嫄、民を生むこと如何、克禋り克く祀り、以て子無きを弗へり、帝の武敏を
履み、歆せられて介なる攸止まる攸、載ち震み載ち夙しみ、載ち生み載ち育へり、時維后稷なり、

【句釋】生民は后稷なり、之を民と謂ふは本其の初生、未だ貴位あらざればなり。時維姜嫄、姜は姓、

名は嫄、炎帝神農氏の後、有邰氏の女、帝嚳高辛氏の妃と爲る。周の祖は后稷にして、此の祖を生める

は姜嫄なり。生民如何、上を承けて其の貴ぶべき理を言ふ。克禋克祀、禋は敬なり、敬恭を以て牛羊を

享て以て神を祭る。祀は郊外にて天を祭り、先媒を以て配す。先媒は古代嫁娶の媒介を爲しし人なり。

其の禮玄鳥至るの日を以て、大牢を用ひて之を祀る、春分二月を言ふ。以弗無子、弗は祓と同じ、姜嫄

未だ子無き故に其の疾を祓ひのけて郊禘の神を祭り、其の子を得んと祈るなり。履帝武敏、履は踐、帝

は上帝、武は跡、敏は足の大指、姜嫄が上帝の足跡の大指の處を履なり。歆音「キン」字書に神饗氣

也、又好樂、又欲なり。朱子の歆は動なり、猶驚異のごとしと言ふは今用ひず。介は大、止は留、今

姜嫄が踐む彼の上帝の跡は、上帝も氣を饗て福祿の大に止まる彼なり。震は妊娠の義、震は震動、姜嫄が上帝の足跡を踐むとき何か奇瑞の見はれかすと念する同時に其の感ありしなり、是を以て乃ち妊娠む。夙は肅なり、姜嫄已に其の妊娠せるを知る、乃ち身を夙しむ。載生載育、生育の中には、教を以てし愛を以てすること勿論なり。時維后稷、此の如くにして大人と爲りし者維后稷なり。巨人の跡を踐むの説、先儒議論紛紛たり。要するに異人に對する後世の尊敬のみ、信念のみ、信念なきもの豈此の如き事を事實と思はんや、信する者は事實と認むるも亦可なり。郭景純曰く、宜しく其の玄致を領して、之を冥會に歸すべし。

誕彌厥月 先生如達 不圻不副 無菑無害 以赫厥靈 上帝不寧 不康禋祀

居然生子

誕に厥月を彌へたり、先めて生るに達の如し、圻けず副けず、菑無く害無し、以て厥の靈を赫せり、上帝寧んせざらんや、禋祀を康んせざらんや、居然として子を生めり、

【句釋】誕は發語の辭、彌は終なり、身てより十月を終たるなり。先生は始生、達は小羊なり、安産せるを言ふなり。羊は子を生むに易易たる者なり。不圻不副、無菑無害、難産なりせば其の母、或は圻或は副、若し圻副の時は是れ菑なり是れ害なり、安産なるが故に總ての菑害なきなり。以赫厥靈、母子共

に菑害なきは以て厥の靈を赫すに足る。上帝不寧、上帝も亦安心せしならん。不康禋祀、郊媒の神も亦安心せしならん。居然は自然と同じ、徒然にあらす、人道即ち夫婦の倫道無くして子を生みたるなり。神人の精を感ずれば交接の道なくとも人は生るるものなり、蓋し是れ靈ならずや。

誕寔之隘巷 牛羊腓字之 誕寔之平林 會伐平林 誕寔之寒氷 鳥覆翼之 鳥

乃去矣 后稷呱矣 實覃實訃 厥聲載路

誕に之を隘巷に寔げば、牛羊腓ひ之を字めり、誕に之を平林に寔げば、平林を伐るに會へり、誕に之を寒氷に寔げば、鳥之を覆翼す、鳥乃ち去矣、后稷呱矣、實に覃實に訃、厥の聲路に載てり、

【句釋】寔は置と同じ、隘巷は小路なり、子を生んで之を小路に寔くは即ち捨てたるなり。牛羊腓字之、腓は人間の脛の腓なり、脛の腓は元來肥肉なるが故に腓と訓す。牛羊が我が子の如く芘ひ愛しむなり。寔之平林、會伐平林、隘巷に於ては牛羊の爲め育せられ死せざるを以て、夏に之を平林の中に棄つ、然るに平林は亦人の伐采し去るに會うて、是の方も目的を達せざるなり、人の收め取る所と爲る。寒氷、鳥覆翼之、夏に之を寒氷の中に棄つ、然るに水鳥ありて之を覆翼す。鳥乃去矣、如何になるならんと尾して行く人に驚て鳥は去る。后稷呱矣、是に於て天異あるを知て往て之を取る、后稷聲を放ち呱呱然たり。覃は長、訃は大、呱呱と啼聲が長大にして路に載るなり。是の如き事の實なりや否やは知る所にあ

らず、然れども此等の事全く無しとせず、異人と爲り、哲人と爲るものは是の如きこと無しとせず、收めて以て棄と名けしなり。

誕實匍匐 克岐克巖 以就口食 蕤之荏菹 荏菹蒹蒹 禾役稂稊 麻麥幪幪

誕に實に匍匐して、克く岐に克く巖なり、以て口に就いて食ふ、之の荏菹を蕤う、荏菹蒹蒹たり、禾役稂稊たり、麻麥幪幪たり、瓜瓞啍啍たり、

【句釋】匍匐は手足並行と訓す、乃ち「ハラバヒ」に行くなり。岐も巖も共に身體の大にして且秀たる状を言ふ、巖は平聲「キ」と訓み、入聲「キヨク」と訓む。以就口食、自ら能く食ふ漸く將に五六歳ならんとする時なり、蕤は樹なり。荏菹は大豆、蒹蒹は荏菹の生長して盛んなる形容。禾は一を舉げて黍稷等を含む。役は列。稂稊は苗の美好なるを言ふ。幪幪は濛濛と同じ、植物の茂密なるを言ふ。啍啍は瓜瓞の實多きを言ふ。后稷は五六歳より已に禾稷の事に關して其の天性を發露せるなり。

誕后稷之穡 有相之道 蒹厥豐草 種之黃茂 實方實苞 實種實衷 實發實秀 實堅實好 實穎實栗 卽有邠家室 誕后稷の穡、相くる之の道あり、厥の豐草を蒹め、之の黃茂を種けり、實に方なり實に苞なり、實に

種ち實に衷び、實に發き實に秀で、實に堅く實に好く、實に穎き實に栗る、有邠に卽いて家室せり 【句釋】穡を訓して「ナリハヒ」業と爲したるは頗る佳、穡は穀を穫收めること、后稷は是を以て業務と爲すなり。有相之道、相は助、朱子は人力の助と言ふ、然らず。「箋」に后稷の稼穡を掌る助けらるの道あり、神之が力を助くるが若きを謂ふは當れり。蒹は治。豐草、草なぞを治めて何の用を爲す、豐草は牛羊に食はすべく、又肥料と爲すべし。朱子は豐草を等閑視す、頗る意を得ず。黃茂は黃は嘉穀を言ふ、茂は美盛を言ふ。方は穀實の齊等なるなり。苞は甲にして未だ拆ざるなり。種は甲拆て種るに堪へたるなり。蕤は苗の漸く伸ぶるなり。發は苗の盡發するなり。秀は已に穗に出るなり。堅は實の堅る也。好は其の味の好なり。穎は實繁碩にして末を垂るなり。栗は栗栗然として秕の無きなり。有邠、有は意味なし、邠は國名、今日の陝西省西安府商州武功縣、后稷が農業を獎勵して功ありしを以て帝舜命じて此に封殖の地を賜ふ。家室は小大共に通ず、天子は天子の家室、庶人は庶人の家室あり、后稷は卽ち王公の家室を爲したるなり、是に於て姜源の祀を主とす、周人亦世姜嫄を祀る所以なり。邠は姜嫄の舊地、是に至りて亦回復せり。

誕降嘉種 維秬維秠 維糜維芑 恆之秬秠 是稷是畝 恆之糜芑 是任是負 以歸肇祀

誕に嘉種を降せり、維秬維秠、維糜維芑、之の秬秠を恆くして、是れ穫り是れ畝す、之の糜芑を恆くして、是れ任ひ是れ負ふ、以て歸り肇めて祀れり、

【句釋】降嘉種、衆人に嘉種を降して之を作らしむるなり。秬は黑黍。秠は黑黍の一稔二米のもの。糜は赤梁粟なり、芑は白梁粟なり、秬秠は酒醴鬱鬯に供す可く、糜芑は黍盛に供す可きなり。恆は徧、甲乙丙丁の地皆種しむるなり。是稷是畝、穀の登りし時之を穫り以て畝に置く。是任是負、任は荷ふ、負は背にする。秬秠も糜芑も共に悉く任負するものなれど、文字を互にする爲め此の如く用ひしなり。肇は始。祀は祭、后稷始めて國を受け以て宗廟羣神を祀るなり。

誕我祀如何 或春或掄 或簸或蹂 釋之叟叟 烝之浮浮 載謀載惟 取蕭祭脂

取羝以軼 載燔載烈 以興嗣歲

誕に我が祀如何、或は春づき或は掄とる、或は簸あげ或は蹂み、之を釋せば叟叟たり、之を烝せば浮浮たり、載ち謀り載ち惟ひ、蕭を取りて脂を祭る、羝を取りて以て軼し、載ち燔にし載ち烈ものにす、以て嗣歳を興す、

【句釋】我祀如何は下の句を引出さん爲め之を言ふ。春は古制地を掘る、後世木石を用ふ、此の時代は恐くは地を掘て春とせしものならん。穀の糠を始めて除る器なり。掄は春より抒出すなり。簸は後世の

籠と稱する物に當る、糠を簸するなり。蹂は「傳」に禾を蹂者とあり。朱子曰く、禾を蹂き穀を取り以て之を繼ぐなり。釋は米を浙ぐなり。叟叟は浙米の聲を形容す。烝は炊くなり、浮浮は飯の氣の上るを形容す。載謀載惟、謀は已に供食の整ひたるを以て祭日を卜し、祭に關係する人を擇ぶ。惟は思なり、齋戒具脩の事を惟ふなり。蕭は蒿と同じ、之を取て黍稷に合し、臭牆屋に達す、先づ奠して而して後烝く、蕭は馨香を合するなり。脂は祭性の脂なり。羝は牡羊、軼は行道の神を祭る。燔は諸を火に近く焼くなり。烈は諸を火に遠く焼くなり、蕭を取て脂を祭る、(一)羝を取て軼を祀る、(二)或は之を燔す、(三)或は之を烈す、(四)此の四者は祭祀に於て必ず行なふ所。以興嗣歳、來年の祭は此の祭に嗣ぎて興るとの意、秋嘗の祭、冬烝の祭、祖道を祭るの禮皆終る、是に於てか來祭を最後に説くなり、此の章の意詳悉に知らんと欲する者は「毛詩古義」を見よ、紙數今許さざるを憾みとす。

印盛于豆 于豆于登 其香始升 上帝居歆 胡臭亶時 后稷肇祀 庶無罪悔

以迄于今

印豆に盛る、豆に登に、其の香始めて升る、上帝居歆す、胡を臭の亶に時なる、后稷肇めて祀れる、庶罪悔無うして、以て今に迄れり、

【句釋】印は我なり。豆は木製、登は瓦製、共に菹醢を薦むる祭器。其香始升、上帝居歆、豆登に盛る

の物の香氣升るが故に上帝安んじて之を歌となり。居は安、鬼神氣を食ふを歌と曰ふ。胡は何、臭豷時、豷は誠と同じ、此の祭を爲す正しく其の時を得たるを言ふ。佛家の時節到來の意味なり。后稷肇祀、庶無罪悔、庶の字「箋」に衆人の意と爲し、朱子は庶幾の意と爲す。今「箋」に従がつて衆人の意を取る、后稷肇めて上帝を郊に祀る、而して天下の衆民、咸其所を得て罪悔あること無きなり。以迄于今、子孫其の福を蒙りて以て今に至る、故に推して以て天に配す。徐光啓曰く、后稷肇祀の三句、祖宗功德婉にして暢、典にして實なることを形容す。漢人の符命、萬分して一に及ばず。顧氏曰く、此の章后稷を主として言ふ、肇祀の三句只后稷の身上に在て説く。

【評論】生民は八章。四章は十句、四章は八句を以て成る。「傳」曰く、生民は祖を尊ぶ也。后稷姜嫄に生る、文武の功、后稷に起る、故に推して以て天に配す。朱子は此の詩の用ふる所を疑ふ。輔氏曰く、郊社の後釐を受け昨を頌つての禮あるときは此の詩を用ふるも可也。劉氏曰く、此の詩、尊稷配天の事を明言せずと雖も、而も一詩の意實に尊稷配天の爲にして推本して之を言ふ、以て受釐の樂歌と爲す也。

敦彼行葦 牛羊勿踐履 方苞方體 維葉泥泥 戚戚兄弟 莫遠具爾 或肆之筵 或授之几

敦たる彼の行葦、牛羊踐履すること勿れ、方に苞し方に體し、維葉泥泥たり、戚戚たる兄弟、遠きこと莫くして具に爾し、或は之が筵を肆べ、或は之が几を授く、

【句釋】敦は聚る貌。行葦、行は道なり、道旁に生ずる葦。勿踐履、牛羊に戒止する汝等行葦を踐履することなかれ。方苞、苞は甲して未だ拆げざるなり。方體は已に形を成したるもの。維葉泥泥、葦葉の柔澤なる形容を泥泥と言ふ。朱子曰く、此の詩は祭畢つて父兄耆老を燕する詩ならん。行葦の如きも牛羊の踐履に遇はずんば、自然と生長して其の天分を損せず、況や人に於てをや、況や父母兄弟に於てをや、相融和して各の其の天分を損せざるべきなり。戚戚は内相親しむ義なり。兄弟、莫遠具爾、兄弟は遠ざかることは不祥なり、爾が善となり、爾は邇の正字、此の時代兄弟不和の多かりし結果、此の如き句の生れたる所以なり。或肆之筵、或授之几、肆は陳、几は老人の倚踞る物、共に飲み共に食ふと言ふ事、親和を謀るの第一機關たるは、古今東西同一なるが如し。「箋」曰く、少年は只筵を設くるのみ、老者は之に加ふるに几を以てす。朱公遷曰く、行葦敦然として生意あり、兄弟戚戚にして亦相親の意あり、此物を愛するの意を以て、親を親とするの意を興して、其の要は勿踐履、莫遠具爾の二句に在り。

肆筵設席 授几有緝御 或獻或酢 洗爵奠俎 醑醢以薦 或燔或炙 嘉穀脾臄 或歌或粿

筵を肆いて席を設ぬ、几を授くるに緝御あり、或は獻め或は酔い、爵を洗ひ畢を奠けり、醢醢以て薦め、或は燔し或は炙す、嘉穀脾臄、或は歌ひ或は罇うつ、

【句釋】肆筵設席、上章已に肆筵と言ひ、而して又言ふは「傳」曰く設席は重席、今日所謂二次會なるものか、筵席は義に於て同じ。有緝御、老者の爲め几邊に侍坐して給仕する者が交代するを言ふ。緝は繼、御は侍者、不佞を感せしめざるなり。獻は主人より客に薦む。酔は客より主人に答ふ。爵は杯なり、學音「カ」訓「サカヅキ」爵と同じ。奠は客受けて之を奠き舉ざるなり。醢は醢の汁多きもの。醢は醢の汁少なきもの、肉を以て醬に作るを醢と言ふとあれば、和訓して「シシビシホ」と言ふ。燔は多く肉、炙は多く肝。嘉穀は盤中の總稱。脾臄は牛羊類の唇の肉なり、燔炙の外に之を加ふ。歌は口歌のみならず、琴瑟絃此の中に含む。罇は鼓を撃つなり、此の章は飲饌歌樂の盛んなるを言ふ。徐光啓曰く、醢醢の四句廟に徹する者、悉登りて燕私の需を爲し、廟に作す者悉入て後寢の奏を爲すを見んことを要す。

敦弓既堅 四鍔既鈞 舍矢既均 序賓以賢 敦弓既句 既挾四鍔 四鍔如樹
序賓以不侮
敦弓既に堅く、四鍔既に鈞し、矢を舍つこと既に均し、賓を序づるに賢を以てせり、敦弓既に句り、既

に四鍔を挾めり、四鍔樹つるが如し、賓を序づるに侮らざるを以てす、
【句釋】敦弓は「傳」に畫弓とあり、弓に彩色のあるもの。敦は「トン」の音を用ひず、「テウ」彫の音を用ふ。四鍔、矢根を鍔と曰ふ。鈞は根方一分、羽の方二分、鈞合の平鈞なるを曰ふ。舍は放と同じ。既均、一耦二人皆中る。序賓以賢、序は次序即ち席順なり。克く中る者を賢と爲す、其の賢者を以て一席二席と次第するなり、賢は勝の義。既句、舍たんと欲して弓を引き滿るなり。既挾四鍔、射禮に三を措み、一を挾むと、三本を帶の間に挿み、一矢を以て絃に扣て射るなり、一人にて四矢を用ふるものと知る可し。四鍔如樹、四矢悉く中に勝負なきが故に禮義の正しきと禮義を失するを以て賓の次第とす。根據齋曰く、二人の四矢悉く中り勝負なきが故に禮義の正しきと禮義を失するを以て賓の次第とす。根據無き説に近し。朱子曰く、或人曰く、中るを以て中らざる者を病しめざるなり、射は中る多きを以て雋と爲す、侮らざるを以て徳と爲す。乃ち勝て誇る者無からしめ、負て病ふる者無からしむるの謂なり。負し者と雖も決して侮蔑せざるなり、酒に罰爵あるは敗者も亦病とせざるなり。此の章は燕間に弓を射て樂しむことなり。

曾孫維主 酒醴維醑 酌以大斗 以祈黃耆 黃耆台背 以引以翼 壽考維祺
以介景福

曾孫維主たり、酒醴維醕し、酌むに大斗を以てし、以て黃考を祈めり、黃考台背にして、以て引き以て翼く、壽考維祺にして、以て景福を介にせん、

【句釋】曾孫は此の祭の主人公たる人を言ふ、「傳」には成王とせり、成王が先王を祭るの主人なりと見る亦可。醴は甜酒。醕は厚酒なり。酌以大斗、「傳」に大斗は長さ三尺とあり、其の柄を言ふ。漢の「制度注」に勺は五升、徑六寸、長さ三尺と是れなり。蓋し大器より之を挹に樽を以てするに此の勺を用ふるなり。以祈黃考、考は考と同じ、老人の稱、此の醴醕を以て老人に薦め年長けたる上に猶ほ長久なれと祈求するなり。台背は「傳」に大老とあり。「箋」曰く、台の言は鮐なり、大老なれば背に鮐文あり、舍人曰く、老人氣衰へ、皮膚涸瘠して、背鮐魚の如し。故に「箋」之を申ぶ。「釋名」に九十を鮐背と曰ふ、鮐は河豚なり。引翼、大老の人は前引の者と後翼の者とが扶けて行かしむるなり。壽考維祺、祺は吉祥、老人は目出度ものなりと之を尊ぶなり。以介景福、介は助、壽考なる者他人亦之が景福を助け大にするなり。

【評論】行葦は四章八句を以て成る。或は八章四句と爲す本あり。今四章八句説に據る。朱公遷曰く、一章は設燕の意を言ふ、二章は燕飲の禮を言ふ、三章は燕射の樂を言ふ、四章は祝頌の情を言ふ。「傳」曰く、行葦は忠厚なり、周家の忠厚、仁草木に及ぶ、故に能く内九族を睦しくし、外黃考に尊事す。

養老乞言、以て其の福祿を爲す。

既醉以酒 既飽以德 君子萬年 介爾景福

既に醉ふに酒を以てし、既に飽くに徳を以てす、君子萬年、爾の景福を介にす、

【句釋】既醉以酒、醉ずんば酒に功なし、藥の爲めに酒を飲むと稱して一爵二爵の輩あり、愚も亦極まれり。酒は算爵なきを以て貴しとす、故に人に酒を飲しめんと欲する者は全力を傾注して飲しむべきなり、吝念ある者は酒を飲む資格なきものなり。今黃考の人既に醉ふ、眞に酒を飲たる者なり、衷心感謝して此の答詩と成るなり。既飽以德、酒に醉ふは意味明白、徳に飽くとは何ぞ、十分に飲しめ、十分に食はしめたる人の徳を嘆じたるなり。陳氏曰く、燕接の間、恩澤充足す、故に既飽以德と言ふ。此の言當れり。君子萬年、成王を指して君子と言ふ、皆祈る成王は壽福其れ久しかれと。介爾景福、爾も成王を指す、成王の景福益す以て介なるを祈るなり。

既醉以酒 爾殺既將 君子萬年 介爾昭明

既に醉ふに酒を以てし、爾の殺既に將ふ、君子萬年、爾の昭明を介にす、

昭明有融 高朗令終 令終有假 公尸嘉告

昭明融なることあり、高朗にして終を令くす、終を令くせんとして俶あり、公尸嘉告す、
【句釋】爾殺既將、「傳」に將は行なり、殺は牲體即ち廟に捧げたる俎の肉を以て之を一一賓客に分つ之を行と言ふなり。昭明は成王の福の高明光大を指して言ふ。有融は昭明の愈よ盛んなるを言ふ、明而未融の語を以て其の意味を知れ。高朗は上の融を更に説明する文字、逗徹して礙へるもの無く虚明なるなり。令終は終を善くするなり。令終有俶、俶は始なり、終を善くするには必ず始を善くす、始善きものは終も亦善なるなり。公尸は「傳」に天子卿を以てす諸侯を言ふ。朱子曰く、公尸は君尸なり、周、王と稱し、而して尸は但公尸と曰ふ、蓋し其の舊に因る、秦已に皇帝と稱して、其の男女、猶ほ公子公主と稱するがごとし。「箋」曰く、諸侯功德あるもの、入て天子の卿大夫と爲る、故に公尸と云ふ。嘉告は公尸が王の爲め假辭を謂ふなり。

其告維何 籩豆靜嘉 朋友攸攝 攝以威儀

其の告ぐること維何ぞ、籩豆靜く嘉し、朋友の攝むる攸、攝むるに威儀を以てす、

【句釋】前章に公尸嘉告とあり、其の嘉告の意味は維何と問ふ。籩豆は祖先を祭りし事。靜嘉は「箋」曰く、籩豆に用ふるの物、潔清にして美なるは、政平にして氣和の致す所なり。朋友は將に祭らんとするの先、其の臣の吉者を筮して之を成す、之をして祭を助け裸獻の事を爲さしむ、之を賓客、又朋友

と謂ふ。攸攝は其の祭事を攝め佐くる也。以威儀、風威儀容ありて誠に祭事を助くるに的切なる人也。

威儀孔時 君子有孝子 孝子不匱 永錫爾類

威儀孔だ時なり、君子孝子あり、孝子匱きず、永く爾に類きことを錫ふ、

【句釋】孔時、孔は甚、時は宜、威儀甚だ其の時宜を得たるなり。君子は正しく祭の主人公。孝子は嗣子なり、祭禮の時、嗣子盥して入て拜す、尸人爵を執る、嗣子進んで受け位に復して拜す、尸人答拜す、嗣子飲畢り尸人を拜す、尸人又答拜す、此の如くにして嗣子、次子、三子に及ぶなり、其の誠敬を失なはざるなり。不匱、匱音「キ」「説文」に匱なり、何物も收めて無き空匱なり、是を以て不匱を訓して不竭と爲したるは毛公の聰明たる所とす、孝子の誠意が竭すとす。永錫爾類、天は永久に此の如き孝子(爾)に類即ち善を錫ふとなり、今日の善を見て、後來の善を祝す。

其類維何 室家之壺 君子萬年 永錫祚胤

其の類きこと維何ぞ、室家の壺あり、君子萬年、永く祚胤を錫ふ、

【句釋】其類維何、類を問ひ且説明し來る。室家之壺、「傳」に壺は廣なり、什宮云ふ宮中の巷之を壺と謂ふ、宮中巷路の廣きを言ふ。「箋」曰く、壺の言は捆なり、室家先づ以て己に捆綴して乃ち天下に及ばす。祚胤、祚は福祿、胤は子孫、之に錫ふに善を以てす、此より大なるは莫し。

其胤維何 天被爾祿 君子萬年 景命有僕
其胤維何ぞ、天爾に祿を被らしむ、君子萬年、景命僕くことあり、

其僕維何 釐爾女士 釐爾女士 從以孫子

其の僕くこと維何ぞ、爾に女士を釐へん、爾に女士を釐へて、從つて孫子を以てせん、

【句釋】其胤維何の章は男子に就て其の福祿を被むるを言ふ。景命は大命なり天の大命なり。僕は附なり。大命が子孫に至るまで附きて離れず、乃ち祚胤の説明なり。其僕維何の章は女士に就て其の福祿を受るを言ふ。釐は「傳」に予とあり。「箋」曰く、天の大命女に附著すと云ふは何ぞ、女に予るに女にして士の行ひある者を以てす、淑媛を生じ、之が妃と爲さしむるを謂ふ、何の爲めに女士を予ふと言ふに、賢知の子孫を多く生せしめんが爲めなり。

【評論】既醉は八章四句を以て成る。祭事より賓客の頌辭に至る、三章以下は悉く前語を説明して、其の語義を明白ならしむ、大雅の大雅たる氣象自から彰彰たり。

鳧鷖在涇 公尸來燕來寧 爾酒既清 爾殽既馨 公尸燕飲 福祿來成

鳧鷖涇に在り、公尸來り燕し來り寧んず、爾の酒既に清み、爾の殽既に馨し、公尸燕飲して、福祿來り

成る、

【句釋】鳧は俗の「マガモ」。鷖も「カモ」即ち鷗なり。涇は水名、涇水は涇陽の并頭山より出て渭に入る、鎬京と相接す、今日の陝西省西安府を流るる水なり。公尸來燕來寧、祭事の時の公尸を此の處に賓とし迎へ以て飲燕するなり、鳧鷖は人の捕ふる無し、是を以て涇水に浮び遊ぶ、公尸は宗廟の祭已に畢り以て此に飲燕して安寧なり。爾は公尸より主人を指す。酒は清酒。殽は馨馐、誰か是れ満足ならざらん。福祿來成、福祿ならざれば燕飲する能はず、燕飲する者は心に不平なきが故に福祿も亦自から來成するなり。徐士彰曰く、楚茨、鐘を鼓らして尸を送り、神保聿に歸るは祭畢るの燕、尸は與らず、尸何を以て與からざる、其の神に象どる故に敢て留めず、而して専ら次日の燕を爲す、次日に燕するは尸を尊ぶ所以なり、尸を尊ぶは神を尊ぶ所以なり。

鳧鷖在沙 公尸來燕來宜 爾酒既多 爾殽既嘉 公尸燕飲 福祿來爲

鳧鷖は沙に在り、公尸來り燕し來り宜し、爾の酒既に多く、爾の殽既に嘉し、公尸燕飲して、福祿來り爲く、

【句釋】沙は水傍なり、涇水の旁沙なり。爲は「箋」曰く助なり。「說通」曰く、亦是れ拘束無し、喜愜して其の宜しきを得るなり。嚴氏曰く、來宜は之を樂しむを謂ふなり、大意上章と同じ。

鳧鷖在渚 公尸來燕來處 爾酒既滑 爾殽伊脯 公尸燕飲 福祿來下
鳧鷖在渚 公尸來燕來處 爾酒既滑 爾殽伊脯 公尸燕飲 福祿來下
鳧鷖在渚 公尸來燕來處 爾酒既滑 爾殽伊脯 公尸燕飲 福祿來下

鳧鷖在淶 公尸來止熏熏 旨酒欣欣 燔炙芬芬 公尸燕飲 無有後艱
鳧鷖在淶 公尸來止熏熏 旨酒欣欣 燔炙芬芬 公尸燕飲 無有後艱
鳧鷖在淶 公尸來止熏熏 旨酒欣欣 燔炙芬芬 公尸燕飲 無有後艱

【句釋】渚は水中の高地、『釋名』に渚は遮なり能く水を遮ぎり廻らしむるなり。滑は濁酒を茅を以て之を沛して其の糟を去るもの。脯は『說文』に乾肉とあり、乾燥して相搏著するなり。淶は『說文』に小水が大水に入るなり。傳に水會なり。箋曰く、水外の高き者なり、水の會聚する處を以て本義とすべし。宗は來宗の宗、尊と義を同じうす、公尸の來燕、徒爾にあらす主人を宗ぶなり。燕子宗、此の宗は所謂宗廟にして、前句の宗とは異なる。福祿攸降、徐士彰曰く、攸降は前日の祭祀を以て言ふ、只神無し、

春に就て寬に説くなり。來崇は今日の燕飲を以て言ふ、則ち前日の福、積んで而して高大なり。朱子曰く、崇は積んで而して高大なるなり。在臺は『傳』に曰く山水を絶つなり。箋曰く、臺の言は門なり、七祀の尸を門戸の外に燕す、故に以て喩ふ。朱子曰く臺は水峽中に流れて兩岸門の如きなり。熏熏は『傳』に和説なり、尸たる役を勤むる時の嚴格とは異なるなり。欣欣は懽樂なり。芬芬は燔炙の香氣なり。無有後艱、前に福ありて後に禍來るときは艱まざるを得ず、今は前後の區別なく樂し、乃ち後艱の憂無きなり。以上鳧鷖は五章六句を以て成る。傳曰く、鳧鷖は成を守るなり、太平の君子能く盈を持し成を守り、神祇祖考之を安樂にするなり。

假樂君子 顯顯令德 宜民宜人 受祿于天 保右命之 自天申之
假樂の君子、顯顯たる令徳あり、民に宜しく人に宜し、祿を天に受く、保右して之に命す、天より之を申ぬべし、

【句釋】假は『傳』に嘉なりとあり。君子は成王を指す。宜民宜人、『傳』に曰く、民を安んずるに宜しく、人を官にするに宜し、民は庶民、人は官に在ると知るべし。受祿于天は民人を用ふる其の宜しきを得たるが故に自然と祿を天に受けたる也、保右、天は王を保んじ王を右くる也。傳に羣臣保右とある

は今用ひず、命之、天が王に於て之を命するなり。自天申之、申は重なり、已に保し又右し又命す、申
なると知るべし。顧氏曰く、嘗て先輩一の保右命之二句の文を兩扇の格と作すを讀む、前扇の句、保之、
右之、命之を以て三小比と作し、後扇の句、既保之、而又申其保、既右之、而又申其右、既命之、
而又申其命を以て三小比と作す、甚奇たることを嘆ず、其の「輯録」に本づくを知らず、六句三連と
作すときは首一連は其の本を言ふ、中一連は已に然るの福、後一連は將に然らんとするの福なり。

于祿百福 子孫千億 穆穆皇皇 宜君宜王 不愆不忘 率由舊章
祿を干めて百福あり、子孫千億ならん、穆穆皇皇として、君に宜しく王に宜し、愆らず忘れず、舊章
に率ひ由る、

【句釋】干は求と同じ。祿は賜を賞するなり、又善なり。百福は其の多きを言ふ。子孫千億、永久に子
孫の相續する意味。穆穆は天子なり。皇皇は諸侯なり。宜君宜王、子孫たる者或は天子と爲り、或は諸
侯と爲り、而して悉く先王の道を奉じて。不愆不忘、過愆せず忘却せざるなり。率由舊章、由舊章、
先王定むる所の舊憲法の文章に由て、政治を執るとなり。徐士彰曰く、聰明を作す者は先人の制度を狹
小とす、逸豫を好む者は并に祖宗の成法を置く、繼體守文、此に出で彼に入る、故に不愆不忘と言ふ、
其の意を曲に盡すと謂ふ可し。率由舊章は「文選」政に從うて故實を咨ひ、憲を播いて遺風を稽ふと。

威儀抑抑 德音秩秩 無怨無惡 率由羣匹 受福無疆 四方之綱
威儀抑抑たり、德音秩秩たり、怨無く惡無し、羣匹に率由す、福を受くること疆無く、四方の綱なり、
【句釋】威儀は王たる者の威風儀容。抑抑は「傳」に美なりと。「箋」曰く、密なり、成王之朝に立つ威
儀緻密にして失する所無きなり。秩秩は「傳」に有常なりと。「箋」曰く清なり。朱子曰く、有常なり。
常は今日の所謂主義のことなり、一定の主義ありて變らざるなり。無怨無惡、天下之を樂仰して怨惡有
ること無きなり。率由羣匹、匹は類なり、羣類とは何ぞ、朝に在る人、野に在る民、此等の民人の言に
率由する所あるなり。君民一體の致あること見るべし。朱子は羣臣と定む、今之を取らず。無疆は際限
なく福を受るなり。四方之綱、天下の物悉く容るるに於ては王は以て天下の大綱たるなり。徐士彰曰
く、凡そ守成の君は必ず多賢の助に頼る、故に并に賢を用ふるに及ぶ、率由の二字奇なり、凡情相拂る
ときは怨生ず、意相反するときは惡作る、其の原皆私意に本づく、孟子に所謂始らく女が學ぶ所を舍
て而して我に従へといふは則ち怨惡の由來する所、是の二者無ければ、廓然たる大虛、人あるを知て、
己あるを知らず、羣賢朝に満て、顧忌する所無く、皆四體を展布することを得、各の其の志を行ひ、
各の其の職を營む、國家何ぞ其の益を受けざることをあらんや。

之綱之紀 燕及朋友 百辟卿士 媚于天子 不解于位 民之攸暨

之綱なり之紀なり、燕きこと朋友に及ぶ、百辟卿士、天子を媚しむ、位に解らず、民の堅ふ攸、
【句釋】綱紀、大に統るが綱、小に治るが紀なり、又綱は統、紀は目。燕は安なり。朋友は羣臣を指す、
成王能く天下の綱紀と爲り、法度を立て以て之を理治するなり。百辟は畿内の諸侯。卿士は正しく朝廷
に政を執る羣臣なり、百辟は外を護る、卿士は内を衛るなり。媚は愛、成王恩意を以て臣下に及ぶ、
臣下は敬愛を以て天子に及ぶ。不解于位、解は懈、天子は天子の勤を、臣下は臣下の道を共に懈らざる
なり。攸堅、堅は息なり、民の依て以て安息する所なり。
【評論】假樂は四章六句を以て成る。四章悉く成王の徳を嘉稱しての詩なり、極めて平易の文字、而
かも其の義の徹底せる、吾に於て間然するなし。

篤公劉 匪居匪康 迺積迺倉 迺裹餼糧 于橐于囊 思輯用光 弓

矢斯張 干戈戚揚 爰方啓行

篤いかな公劉、居んせず康んせず、迺ち場り迺ち疆り、迺ち積み迺ち倉にし、迺ち餼糧を裹む、囊に囊
に、輯ぎて用て光にせんことを思へり、弓矢斯張り、干戈戚揚、爰に方めて行を啓く、
【句釋】篤は篤厚、公劉は后稷の曾孫、公は爵、劉は名、后稷始め邰に封ず、不窋に傳へて、其の官を

失なひ、戎狄の間に奔る、其の孫公劉又邰に居る、夏人の亂に遭うて邰を去る、去て西戎を平らげ其の
民を遷し邕に邑す、故に召公之を稱して以て成王を教ふ。匪居匪康、公劉が身を居くに康からざりしな
り。迺は乃。場「エキ」も疆「キヤウ」も田畔なり、場は小、疆は大。積倉、米は積み、又倉に満つ、國
富裕と爲る。裹は苞なり。餼糧は「ホシイヒ」乾食なり。裹は底の無き袋。囊は底の有る袋なり。思輯
用光、輯は和なり、光は顯なり、民と和し、以て時に顯るるを思ふ也。弓矢は字の如し。干は枝なき戟。
戈は枝ある戟。戚は斧。揚は鉞なり。爰方啓行、以上の武器を以て戎狄の命を奉せざる者を伐り、以て
我が行を啓くとなり。邰と邕とは百餘里を隔る地、邰は陝西の武功縣、邕は陝西の邠州とす。王臨川曰
く、周の公劉ある、其の時を言ふときは甚だ微なり、其の事を言ふときは甚だ勤なり。時の甚微を以て
其の盈を戒め、事の甚勤を稱して以て其の逸を懲す、蓋し召公の志なり。周人忠厚を以て家法とす、
子孫忘るべからざるなり。

篤公劉 于胥斯原 既庶既繁 既順迺宣 而無永嘆 陟則在嶺 復降在原 何

以舟之 維玉及瑤 鞞琫容刀

篤いかな公劉、于に斯原を胥る、既に庶く既に繁し、既に順んじ迺ち宣ふ、而して永嘆無し、陟りて則
ち嶺に在り、復降りて原に在り、何を以て之を舟びん、維玉及瑤、鞞琫の容刀なり、

【句釋】于胥、胥は相なり。斯原、始め如何なる處が居住に可ならんと先づ斯原を胥る。庶も繁も人民の從ひ來りて斯原に住せんと欲する者多きなり。順は人民が安んずる。宣は徧く人が棲むなり。而無永嘆、嘆は「ナゲク」此の處を喜んで故郷を思ふの嘆を發する者無し。陟則在巘、巘は小さな山。復降在原、公劉が此の原の地形を廣く巡視するなり。舟之、舟は帶なり。玉も瑤も共に「タマ」玉佩なり。鞞は刀の「サヤ」。琫は鞘口の飾。容刀は容飾の刀、或は曰ふ容具と言はんが如し、鞞琫の中此の刀を容るを謂ふのみ。公劉が此の如き風彩を爲し、此の山原を上下して以て民の爲め勞苦せることを言ふなり。黃氏曰く、詩人の情、其れ是の人を惡むや、必ず車馬の盛、佩玉の飾を言ふ、其の以て之に稱はざるを見はず、其れ是の人を喜ぶや、亦必ず其の車馬の盛、佩玉の飾を言ふ、以て其の以て之に稱ふを見はずなり。知言と謂ふ可し。

篤公劉 逝彼百泉 瞻彼溇原 迺陟南岡 乃覲于京 京師之野 于時處處 于

時廬旅 于時言言 于時語語

篤いかな公劉、彼の百泉に逝く、彼の溇原を瞻る、迺ち南岡に陟り、乃ち京を覲る、京は師の野なり、時に處を處とし、時に旅を廬とす、時に言を言とし、時に語を語とす、

【句釋】百泉は字の如く多くの泉。溇原は廣原なり。大原なり。岡は山脊なり。覲は見なり、公劉が幽

の山泉水を相て居宅を定めんとするなり、泉より原、原より岡、岡より京と次第して見る。京師之野、京と雖も人家多からざる時代は即ち野なり、野は但に土地の意味にも取る。于時處處、都合に依りて處るべき所に處る。廬旅、時には旅することあり。言言、時に言ふべきことは言ふ。語語、時に語るべきことは語る、言語を強て區別すれば、言は一人自ら言ひ、語は兩人相對して語るなり。

篤公劉 于京斯依 踰躅濟濟 俾筵俾几 既登乃依 乃造其曹 執豕于牢 酌

之用匏 食之飲之 君之宗之

篤いかな公劉、京に斯依る、踰躅濟濟たり、筵せしめ几せしむ、既に登り乃ち依る、乃ち其の曹に造る、豕を牢に執へ、之を酌むに匏を用ふ、之に食はしめ之に飲ましむ、之に君たり之に宗たり、

【句釋】于京斯依、公劉が京を以て身の依る所と定む。踰躅濟濟の四字は「箋」に士大夫の威儀を形容すとあり。俾は使なり。筵几、筵は馳走する、几は老人の爲め設く。既登は筵に登るなり。乃依は几に依るなり。「曲禮」に踰躅は翔舉舒揚の貌、濟濟は脩飾齊一の貌とあり。公劉の宮室既に成りて士大夫と共に落成の祝燕を開くなり。造は到なり。曹は羣牧の處、和訓に「マキ」なり。執豕于牢、豕を其の牢より出し執へ來る。酌之用匏、酒を酌むには匏の如き疎物、肴を用ふるには豕の如き疎肉、儉約質素此の如し。食之飲之、「箋」は士大夫が公劉に食はしめ飲しむとす。朱子は公劉が羣臣に食はしめ飲しむと。

今朱説を取。君之宗之、羣臣等公劉を仰ぎて以て君とし、以て宗と爲す。宗は尊宗の義、嫡庶の別、同姓の臣なぞと先儒論ず、餘計な注釋なり。

篤公劉 既溥既長 既景廼岡 相其陰陽 觀其流泉 其軍三單 度其隰原 徹

田爲糧 度其夕陽 廼居允荒

篤いかな公劉、既に溥く既に長し、既に景り廼ち岡に、其の陰陽を相、其の流泉を觀る、其の軍三單、其の隰原を度り、田を徹して糧を爲る、其の夕陽を度り、廼の居允に荒なり、

【句釋】既溥既長、朱子曰く、其の芟夷墾辟して土地既に廣く且長きを言ふ。景、岡、土地を相するに日景を度りて以て東西南北の方位を正しくせんと欲し、是に於て岡に登り以て四方を望むなり、民に土地を分割し、且其の税法を定めん爲めなり。相其陰陽、東南は陽にして暖、西北は陰にして寒、寒暖に應じて其の互に宜しきを度るなり。觀其流泉、田水無くんば苗長せず、人水無くんば死す、水利を測量して其の患無からしむ。其軍三單、「傳」に三單は相襲なり。「箋」曰く、大國の制三軍、其餘卒を以て羨と爲す、單とは羨卒無きなり。「孔疏」曰く、羨とは家の副丁を謂ふ、今其軍三單と言ふは、是れ單にして副無きなり。朱子曰く、三單は未詳、姑らく傳箋等に従ふ。度其隰原、隰は低地、原は高地、其の隰田原田の多少を度りて民をして畊やさしむ、而して什一の徹法を以て税に充てしむ。徹田爲糧、徹は通

なり、周の徹法は殷の助法と同じく、一井の田九百畝、八家が各の百畝を畊し、是を私田とし、中間公田の收穫を以て税に充つ、然らば公劉は三萬七千五百人の兵數にて軍は足れりとし、田は十分の一を收納せしめて以て足れりと爲ししなり。度其夕陽、夕陽は何處の世界も西山なり、公劉は山西の地を度る。廼居允荒、荒は大の意、山西地方を擴大して、廼地は益す廣大と爲るなり。

篤公劉 于廼斯館 涉渭爲亂 取厲取鍛 止基廼理 爰衆爰有 夾其皇澗 遡

其過澗 止旅廼密 芮鞠之卽

篤いかな公劉、廼に斯館せり、渭を涉り亂を爲り、厲を取り鍛を取り、基を止めて廼ち理め、爰に衆く爰に有たり、其の皇澗を夾み、其の過澗に遡ふ、止旅廼ち密、芮鞠之卽く、

【句釋】于廼斯館、公劉が都を奠めんと欲して廼に來り先づ館舎に入る、是れ旅舎なり。涉渭、渭水なり。爲亂、「傳」に正しく流を絶を亂と曰ふ。朱子曰く、亂は舟の流を截て横に渡るものなり。俗の渡舟なり。厲は砥石、鍛は鐵なり、渭水を渡り南して砥と鐵とを山より截り出さしむるなり、居邑を作る材料の爲めなり。止は居止。基は根基。廼理、土臺と爲るものを先づ整理する。爰衆爰有、「箋」曰く、人家益す衆多、器物足ること有るなり、富有と爲る意は勿論とす。夾其皇澗、皇澗を中央に夾んで兩岸に住する者も有る。遡其過澗、或は過澗を遡ふに於て住する者も有る。皇澗は縦にて過澗は横なり。止旅

廼密、止は居、旅は衆、人は衆く家は益す密なり。芮は水名、又は汭に作る、芮の言は内なり、水の内を隄と曰ひ、水の外を鞠と曰ふ、此の水は陝西の吳山より出で東して涇水に入る、芮の近旁まで人も家も充滿し來るとなり。之即は密にして離れざる意なり。

【評論】公劉は六章十句を以て成る。召康公、成王を戒むるなり、成王將に位に泄まんとす、戒むるに民事を以てす、公劉の民に厚篤なるを美め、而して是の詩を獻せるなり。

洞酌彼行潦 挹彼注兹 可以饒餽 豈弟君子 民之父母

洞く彼の行潦を酌み、彼に挹んで茲に注ぐ、以て饒餽す可し、豈弟の君子、民の父母、

【句釋】洞音「ケイ」訓遠なり。行潦は流潦即ち雨水なり、道に流るる雨水の滯りたるを言ふ。挹彼注兹、人をして道上流潦の水を酌取して、之を大器に置き、來て其の清澄を待ち、又彼の大器の水を挹んで之を小器の中に注ぐなり。可以饒餽、米を一度蒸し而して水を以て之に沃ぎ、再度蒸す之を饒と曰ふ、饒は饒の製就るの名。豈弟君子は前章に辨あり。民之父母、父は子に對して嚴、母は子に對して寛、寛嚴宜しきを得始めて以て子を教ふ可し、今以て王は人民の父母なり。

洞酌彼行潦 挹彼注兹 可以濯鬯 豈弟君子 民之攸歸

洞く彼の行潦を酌み、彼に挹んで茲に注ぐ、以て鬯を濯ふべし、豈弟の君子、民の歸する攸、

洞酌彼行潦 挹彼注兹 可以濯漑 豈弟君子 民之攸暨

洞く彼の行潦を酌み、彼に挹んで茲に注ぐ、以て濯漑すべし、豈弟の君子、民の暨ふ攸、

【句釋】鬯は酒を盛る祭器。濯は滌なり。暨は息なり。歸は歸趣するなり。濯漑は祭器を洗ふことなり。

【評論】洞酌は三章五句を以て成る。召康公が成王を警戒する詩なり、「說通」曰く興意味あり、行潦の水を以て、彼に挹み茲に注ぐ、尙不可なし、豈に豈弟の君子にして民の父母にあらざらんや、平澹にして之を美む、正に之を戒しむる所以。

有卷者阿 飄風自南 豈弟君子 來游來歌 以矢其音

卷れる阿あり、飄風南よりす、豈弟の君子、來り遊び來り歌へり、以て其の音を矢ぶ、

【句釋】卷は曲なり。飄風は傳に迴風とあり、惡人徳化を被むりて消す、猶ほ飄風の曲阿に入るが如し。【箋】曰く、大陵に阿と曰ふ、大陵卷然として曲るあり、迴風長卷の方(南)より來りて之に入る、興する者王當に體を屈して以て賢者を待つ可し、賢者則ち猥來し之に就くに喩ふ、飄風の曲阿に入るが如く然り、其の來るや民を長養せんが爲めなり。來游來歌、以矢其音、【箋】曰く、王能く賢者を待するこ

と是の如くば則ち樂易の君子、來りて王に就き遊んで歌ひ、以て其の聲音を陳出せん、其の將に以て王を樂ましめんとするを言ふなり。矢は陳なり。

伴奐爾游矣 優游爾息矣 豈弟君子 俾爾彌爾性 似先公會矣

伴奐として爾游べり、優游として爾息へり、豈弟の君子、爾をして爾の性を彌まで、先公の會に似俾めん、
【句釋】伴奐は「傳」に廣大にして文章あるなり。「箋」曰く、伴奐は自ら縱弛の意なり。「朱子」曰く、伴奐優游は間暇の意なり。今「箋」と朱子の説を取る。爾は召公より成王を指して言ふ。息は休息。彌は終なり。性は命なり。會は終なり。曰く、爾が伴奐として優游するは皆是れ先公の餘徳なり、是の故に先公の餘徳を餘徳として、豈弟君子たるの道を失はず、以て爾が天命を終ると、猶ほ先公の天命を無事に終へしが如くなるべしとなり、始も善なり、終も亦善、是れ王の道なり。先王に奉ずるの道なり。

爾士宇嘏章 亦孔之厚矣 豈弟君子 俾爾彌爾性 百神爾主矣

爾の士宇嘏に章なり、亦孔だ之厚矣、豈弟の君子、爾をして爾の性を彌るまで、百神爾主たら俾めん、
【句釋】士宇は「箋」に居民を謂ふに土地の屋宅を以てするなり、土は地、宇は屋。嘏は音「ハシ」、訓「オホイ」大、「ヨシ」善なり。章は章明、「傳」の廣大にして文章と訓するは是に當る、嘏章を版圖の意に解するも亦通ず、曰く廣大の版圖なり。亦孔之厚矣、之を有するの堅固なるを言ふ。徐士彰曰く、

嘏章は畿甸要荒、倬然として大明、車書一統して侵陵紊亂の意無し、厚矣は基圖鞏固にして震はず騰ざるなり。百神爾主、山には山神、川には川神、大と無く小と無く凡そ此の地に多くの神あらん、而かも之が主と爲るものは爾即ち一國の君主であるなり。

爾受命長矣 萑祿爾康矣 豈弟君子 俾爾彌爾性 純嘏爾常矣

爾命を受くること長矣、萑祿爾康矣、豈弟の君子、爾をして爾の性を彌るまで、純なる嘏爾をして常あら俾めん、
【句釋】萑祿は「傳」に萑は小なりと。今小の意には取らず、萑は福なり、福祿安康なるなり。「箋」曰く、爾賢者を得て之と天地に承順せば、則ち壽長の命を受け、福祿又爾を安んぜん。純嘏は大福なり。常は變の反對、常にして衰變せざらしむるなり。

有馮有翼 有孝有德 以引以翼 豈弟君子 四方爲則

馮るべきあり翼くべきあり、孝あるあり徳あるあり、以て引き以て翼は、豈弟の君子、四方則と爲ん、
【句釋】馮は依馮なり。翼は輔翼なり。孝は子が親に對する義務なり。徳は己に得る所のものなり。以引以翼、引は其の前を導くなり、翼は其の左右を相くるなり。四方爲則、人主常に人主の道を守り其の謬らざるに於ては、天下の民皆之に従ふなり。

頤頤印印 如圭如璋 令聞令望 豈弟君子 四方爲綱

頤頤印印たり、圭の如く璋の如し、令聞令望たり、豈弟の君子、四方綱と爲ん、

【句釋】頤頤は「傳」に温なる貌と。「爾雅」に君徳なり、大なり仰なり、體たる故に温なり。印印は

「傳」に盛なる貌と。志氣たる故に盛なり。朱子曰く、頤頤印印は尊嚴なり。之を要するに各家各の

説を異にするは本源古くして容易に見難ればなり、要するに天子の尊嚴なる體度と爲すなり、圭も璋も

共に「タマ」なり、王の徳を以て圭璋に比するは其の圓滿純潔を以てなり。令聞令望、蘇子由曰く、之

に遠かるときは令聞あり、之に近くときは令望あるなり。朱公遷曰く、頤印は外に見る者なり、圭璋

は内に存する者なり。「古義」曰く、上章の爲則は徳を以て言ふ、此章の爲綱は位を以て言ふ。

鳳凰于飛 翾翾其羽 亦集爰止 藹藹王多吉士 維君子使 媚于天子

鳳凰子に飛び、其の羽を翾翾し、亦爰止に集る、藹藹として王吉士多し、維君子の使へる、天子を媚

しめり、

【句釋】鳳凰は靈鳥、雄を鳳、雌を凰とす、羽蟲三百六十にして鳳之が長たり。翾翾は其の羽聲なり。

亦の字に對して朱子は等閑視すと雖も、「箋」曰く、亦是衆鳥に亦するなり、鳳凰の往て飛ぶ翾翾然たる

も亦衆鳥と止る所に集る、衆鳥鳳凰を慕うて來る、賢者の在る所、羣士皆慕うて往仕に喩ふ、時に鳳凰

至るに因て故に以て喩ふ。藹藹は猶ほ濟濟の如きなり。王多吉士、王に吉士多きは猶ほ鳳に衆鳥の隨ふ
が如きなり。維君子使、吉士は皆王の使役する所のものなり。媚于天子、媚は愛なり、君子も天子を指
す。「箋」は君子と天子を臣と君とに分つ如きも是は誤なり。朱子曰く、既に君子と曰ひ、又天子と曰ふ、
猶ほ王子 出征、以佐天子と曰ふが如きなり。朱公遷曰く、禽鳥の性、必ず止る所を得んと欲す、賢
者の心、必ず用に致さんと欲す、苟も用ひらるることを得ば、則ち使令する所に隨つて皆一心に天子を
媚愛す。下章の意此に類す。上の兩章重きこと賢を得て以て自ら輔くるに在り、此と下章とは則ち賢
者王朝に集ること此の如く其の多きを言ふ、是れ馮翼孝徳の至、具に有て使令に供するに足る、故に使
と曰ひ命と曰ひ、再三意を致して、以引以翼と相應す。

鳳凰于飛 翾翾其羽 亦傳于天 藹藹王多吉士 維君子命 媚于庶人

鳳凰子に飛んで、其の羽を翾翾す、亦天に傳れり、藹藹として王吉人多し、維君子の命、庶人を媚しむ、

【句釋】傳は戻なり、鳥の天に戻るは鳥の性なり、以て人の王に朝する是れ亦人の性なるに喩ふ。吉人

は吉士と同じ。維君子命、羣臣我が質を君に委ねて一に其の使令を聽くを謂ふなり。媚于庶人、「箋」曰

く、吉士、庶人を親愛し、之を撫擾し職を失せざらしむるを謂ふ、撫擾は安樂の義なり。

鳳凰鳴矣 于彼高岡 梧桐生矣 于彼朝陽 萃萃萋萋 離離嗃嗃

鳳凰鳴けり、彼の高岡に、梧桐生ひたり、彼の朝陽に、萃萃萋萋たり、離離喑喑たり、
【句釋】鳴矣、前章には于飛、此の章は鳴矣と、層一層高くなるを知る可し。梧桐は柔木にして貴重なり。朝陽は山の東を曰ふ。萃萃萋萋は梧桐の盛なるを言ふ。離離喑喑は鳳凰の鳴聲なり。「箋」曰く、鳳凰山脊の上に鳴く、高に居て下を視て、集止べきを観る、賢者禮を待て乃ち行き翔て後集るに喩ふ、梧桐生ずるは猶ほ明君出るがごとし、朝陽に生ずるは溫仁の氣を被むるなり、亦君徳なり、鳳凰の性、梧桐にあらずんば棲ず、竹實にあらずんば食はず。「傳」曰く、梧桐盛んなるは鳳凰鳴く、臣其の力を盡すときは地其の化を極む、天下和合するときは鳳凰徳を樂しむ。

君子之車 既庶且多 君子之馬 既閑且馳 矢詩不多 維以遂歌

君子の車、既に庶く且多し、君子の馬、既に閑うて且馳す、詩を矢ふると多からずとも、維以て遂に歌へり、
【句釋】君子之車は王の車、庶多是同義の字。馬も王の馬。閑は閑習なり、閑と閑とは異なる、今人同義に用ふ笑ふべし。御者の意に随つて縦横自在なり、故に且馳と言ふ。矢は陳なり。詩を作りて以て陳するなり。不多、多と言はずして不多と言ふは王氏曰く此の詩多からざるにあらず、召公以て不多と爲すは君を愛するの心已むこと無きなり。遂歌、何人が歌ふや、王も歌ひ、侍臣も亦歌ふなり。王の徳を頌する詩、公卿皆之を獻するなり、我邦に於ける獻歌の如し。

【評論】卷阿は十章、六章は五句、四章は六句を以て成る。嚴粲曰く、康公の三詩皆成王將に政に泣んとするの初に作る、公劉、洞酌、皆直に陳するの辭、唯卷阿は宛轉反覆して、人をして再三歌詠して後悟らしむ、蓋し其の深意の寓する所、實に此の篇に在り。「竹書紀年」に成王、卷阿に遊ぶ、周公治成の後、三十三年に在り。

民亦勞止 汔可小康 惠此中國 以綏四方 無縱詭隨 以謹無良 式遏寇虐 憚不畏明 柔遠能邇 以定我王

民も亦勞止り、汔はくは小しく康んず可し、此の中國を惠しんで、以て四方を綏んせよ、詭り隨ふを縱すこと無かれ、以て無良を謹め、式て寇虐して、憚て明を畏れざるを遏めば、遠きを柔んじ邇きを能くし、以て我が王を定めん、

【句釋】民亦勞止、此の章は此に於て聊か辨を爲すべし。「序」に召穆公、厲王を刺るなりと。厲王は成王より九世の孫に當る。朱子曰く、同列相戒しむる詞なり、未だ必ずしも専ら王を刺らんが爲めに發するにあらず。今日く朱說當らず、宜しく子夏に隨ふべき也。厲王の暴虐無道は殷紂にも下らざる也、己を刺る民二萬五千人も捉へて市に戮せし一事にても其の愚王なること知るべし。召公穆と周公和の二人無

かりせば、天命を終らすして殺さるる惡王なり、此の事は史上彰彰たり、朱子史を無視して却て子夏を破す、今用ひざる所とす、民は賦斂重敷、其の勞苦に堪へず。汜「箋」に幾なり。可小康、小しは安んずならしむべし。惠此中國、都城を中心として中外の區別を爲す、先づ邇より惠愛せよとなり。以綏四方、後に四方の康綏に及べとなり。無縱詭隨、善惡を區別せずして妄動することなけれ、或は人の善を詭り、人の惡に隨ふこと無かれ。以謹無良、惡王の惡を助くる榮の夷公の如きは是れ無良の人なり、此等の人に對しては謹ざるべからず、或は小を慎んで以て大を懲す。式遏寇虐、式は用なり。遏は止るなり。憊は會なり。不畏明は明白の刑罪を畏敬せざるなり、無良の徒、寇虐を爲し易し、是を以て此を遏止せしめ、且明を畏れしめよ。柔遠能邇、遠人を柔安し、邇人を順仰し、以定我王、王は王たるの徳を保たしめんとなり。朱公遷曰く、此の詩大旨、小人を遏むるに在り、詭隨、無良、寇虐、無畏皆以て其の心術の一ならざるを言ふ、後章に憊、罔極、醜厲、繾綣の類を言ふ、亦以て其の形容を極む。

民亦勞止 汜可小休 惠此中國 以爲民述 無縱詭隨 以謹憊懼 式遏寇虐

無俾民憂 無棄爾勞 以爲王休

民亦勞止り、汜はくは小休すべし、此の中國を惠しんで、以て民の述まることを爲せ、詭り隨ふを縱すこと無かれ、以て憊懼を謹しめ、式て寇虐を遏めて、民をして憂へしむること無かれ、爾の勞を棄つる

こと無うして、以て王の休きことを爲せ、

【句釋】述は音「キウ」、訓「アツマル」聚なり、民は聚まるを以て善とす、散するときは國に利あらず、西戎も南夷も中國の良政を敬慕して其の聚まることを謀れとなり。憊懼は「傳」に大亂なりと注す。

朱子曰く、猶ほ謹諱と言ふが如し。大亂は謹諱なり、謹諱は大亂なり。「箋」には好事の者を謂ふとあり、惡事を好むことを謹しめとなり。三說義は一致せり、要するに王の惡を助くる惡臣は其の惡を慎めよとなり。無俾民憂は字の如し。無棄爾勞、「箋」に勞は爾の功勞なりと。其の高き地位を得たるは免に角爾の功勞に酬はれたるなり、謹しんで其の功勞を空しくする無かれ。以爲王休、「傳」に休は美なり、王に侍する榮の夷公の如き者自から其の勞を持し、且王の美を爲せよとなり。

民亦勞止 汜可小息 惠此京師 以綏四國 無縱詭隨 以謹罔極 式遏寇虐

無俾作慝 敬慎威儀 以近有德

民亦勞止り、汜はくは小息すべし、此京師を惠しんで、以て四國を綏んせよ、詭り隨ふを縱すと無かれ、以て罔極を謹め、式て寇虐を遏め、慝ことを作さ俾むること無かれ、威儀を敬慎し、以て有徳に近づけ、【句釋】罔極は罔は無と同義、惡を爲して窮極する所無き人なり。慝も惡なり。有徳は徳ある人、惡を捨て善に従へとの意。輔氏曰く、罔極も亦是れ詭隨者の證なり、妄を以て人に隨ふときは惡を爲し、豈

窮極する所あらん、無縱詭隨、式遏寇虐は是れ小人を防禁するなり、敬慎威儀、以近有徳は是れ賢者に親近するなり。

民亦勞止 汔可小愒 惠此中國 俾民憂泄 無縱詭隨 以謹醜厲 式遏寇虐

無俾正反 戎雖小子 而式弘大

民亦勞止、汔はくは小愒すべし、此中國を惠しんで、民の憂を泄しめん、詭り隨ふを縱すと無かれ、以て醜厲を謹しめ、式て寇虐を遏め、正をして敗れしむる無かれ、戎小子と雖も、而かも式て弘大なれ、

【句釋】愒は息なり。泄は去なり。正敗は正道敗壞なり。戎は汝なり。式は用なり。小子は後進、又諸生等の意味、今此の語を同列同輩に用ふるは此の詩の作者の老宿なるやを想はしむ。徐士彰曰く、正の字、國の紀綱法度を言ふ。

民亦勞止 汔可小安 惠此中國 國無有殘 無縱詭隨 以謹繾綣 式遏寇虐

無俾正反 王欲玉女 是用大諫

民亦勞止、汔はくは小安すべし、此の中國を惠しんで、國に殘あると無かれ、詭り隨ふを縱すと無かれ、以て繾綣を謹しめ、式て寇虐を遏め、正に反せしむると無かれ、王女を玉にせんと欲す、是を以て大諫す、【句釋】國無有殘、義を賊するを殘と曰ふ、王此の京師の人を愛せば、則ち天下邦國の君、殘酷を爲さ

す。繾綣は『傳』に反覆なりと。朱子曰く、繾綣は小人の其の君を固結するなり。『孔疏』に繾綣は牢固相著の意、善惡の辭にあらず、但善に施するときは善、惡に施するときは惡、王の心に小人の心が固く相著く、此の如きは謹めよとなり。無俾正反、正道に反對せしむること無かれとなり。王欲玉女、女は汝、汝を玉の如く所謂人格を玲瓏玉の如くならしめんと王は期するなり、王の實際は全く然らざるも、詩人の言此の如く蓋藉に出るなり。是用大諫、同僚が王の意は此の如しと言うて以て其の同僚を戒しむるなり。民勞は五章十句。大旨は前に辨せし如し、復贅せず。

上帝板板 下民卒瘁 出話不然 爲猶不遠 靡聖管管 不實於亶 猶之未遠

是用大諫

上帝板板、下民卒く瘁む、話を出すこと然らず、猶を爲すこと遠からず、聖を靡しとして管管、亶を實とせず、猶の未だ遠からず、是を用て大諫す、

【句釋】上帝は王を指す。板板は反反と同じ、道に反き反くなり。下民卒瘁、王と直指せずして上帝に托す、承けて以て下民と言ふ、卒は盡なり、瘁は病なり、病は憂ふなり、人民の憂ふるは王が王道を守らざればなり。出話不然『箋』に話は善言なり、善言を出すも之を行はざるなり。朱子曰く、女の言を

出す、皆理に合せず。「疏義」曰く、其の便佞を恃む者なり。「箋」の善言は今取らず、便佞の言は甚だ不
然と見るなり。爲猶不遠、猶は謀なり、其の謀を爲す、徒らに眼前を見て遠慮なき也。靡聖は聖人
を無視するなり。管管は依る所無きなり。今日の語の自分の立場は無きなり。不實於直、直は誠なり、
此等の徒輩は全く虚偽の生活を喜ぶもの、是を用て誠を實として行なはざるなり。猶之未遠、極めて淺
慮にして遠謀無きなり。是用大諫、大に諫むる所以は以て天意を回して民を安んせよとなり、

天の方難 無然憲憲 天の方蹶 無然泄泄 辭之輯矣 民之洽矣 辭之憚矣
民之莫矣

天の方に難む、然く憲憲たること無かれ、天の方に蹶く、然く泄泄たること無かれ、辭之輯矣は、民之
洽矣、辭之憚矣、民之莫矣、

【句釋】天の方難、天自から難むにあらす、天人を難すなり。無然憲憲、天が人を難す際に於て、人は
當に憂懼すべし、決して欣欣然として自適なるなけれ。蹶は動、天の世を動搖させる際に於て、人は當
に緊張すべし、決して泄泄然として弛緩なる無かれ。辭は政教を論ずるの言辭なり。輯は輯和、朝廷の
論議も相和調なるときは、民之洽矣、洽は合なり、散の反對、政治が良ければ民自から來り合ふ。憚は
懼憚、莫は定なり、政教和悦するときは、民心一に定まりて亂るるもの乃ち治まらん、蓋し是れ急務なり。

我雖異事 及爾同僚 我即爾謀 聽我囂囂 我言維服 勿以爲笑 先民有言
詢于芻蕘
我事を異にすと雖も、爾と僚を同じうす、我爾に即いて謀れば、我に聽くこと囂囂たり、我が言は維服
なり、以て笑と爲ること勿れ、先民言へることあり、芻蕘に詢ると、
【句釋】我雖異事、我と汝と職務は異なるも。及爾、及は與なり。同僚、同じく王臣なり、同じく官僚
なり。僚は普通友の意にはあらず、官に限る文字なり。我即爾謀、即は就く、爾の爲めを思うて密接に
謀る。聽我囂囂、囂囂は人言を聽かざる貌、一向に我の忠言を爾は容れずとなり。我言維服、我が言ふ
所は維服すべきことなり、何の故に服なる、急事なればなり。勿以爲笑、一笑に付することは不可。先
民は古の賢者を指す。有言、詢于芻蕘、薪を采る者を芻蕘と曰ふ、極めて賤者なり、其の賤者にすら詢
る、況や此の僚友に於てをやとなり。

天之方虐 無然諛諛 老夫灌灌 小子躑躑 匪我言耄 爾用憂諛 多將熇熇
不可救藥

天の方に虐へる、然く諛諛たること無れ、老夫灌灌たり、小子躑躑たり、我が言の耄なるにあらず、爾
憂を用て諛とせり、多きこと將に熇熇として、救藥すべからざらんとす、

【句釋】虐は酷虐、殘虐、天斯民を殘虐するなり。無然諛諛、戲侮を諛諛と曰ふ、天此の如く民を殘虐するに、爾は然かく戲侮して諛諛然として閒視するなかれ。老夫は戒しむる人が自からを稱す。灌灌は款款と同じ、丁寧に至誠を盡して言ふ。小子は同僚を指す。蹻蹻は驕る貌、老人の言ふ所を小子共に用ひざるなり。耄は八十の人を稱す、我は老耄して妄言するにあらす。爾用憂諛、憂國の大事を談するに爾は翻つて戲諛とせり。多將焞焞、不可救藥、焞焞は火の盛んなる形容、火も微微たる間は救ふ可し、焞焞と天を燒くに到りては救ふ可らず、憂も亦然り、小憂は救ふ可し、大憂に到りては到底救ふ可き藥方なしとなり。

天之方憯 無爲夸毗 威儀卒迷 善人載尸 民之方殿屎 則莫我敢葵 喪亂蔑

資 曾莫惠我師

天の方に憯れるとき、夸毗を爲ること無れ、威儀卒く迷ひて、善人載ち尸のごとくならん、民の方に殿屎するとき、則ち我を敢て葵ること莫し、喪亂蔑くも、曾て我が師を恵むこと莫し、

【句釋】憯は音「セイ」、訓「イカル」怒なり。無爲夸毗、傳曰く、夸毗は體柔を以てする人。箋曰く、王方に酷虐の威怒を行ふ、女夸毗して形體を以て之に順従すること無かれ。朱子曰く、夸は大、毗は附、小人の人に於ける、大言を以て夸るにあらざれば、諛言して之に毗る。威儀卒迷、若し此の如くなれば

卿士たる者の威風儀容卒く迷亂す。善人載尸、尸は祭事に當り、祖先に扮して來り、不言不爲にして但飲食するのみ、賢人君子は徒らに尸の如きのみ、此の如く尸と爲らしめてはならぬとなり。殿屎は「傳」に呻吟なりと、民愁苦して呻吟するなり。則莫我敢葵、葵は揆と同じ、民は何故に呻吟するやと我は揆らざるなり。喪亂蔑資、傳に蔑は無と同じ、資は財と同じ。「箋」曰く、喪亂に遭ひ、素より賦斂空虚なるを以て財貨以て其の事を共にする無きなり。朱子曰く、蔑は滅なり、資は咨と同じ、嗟嘆の聲なり。今漢儒に従うて宋儒に従はず、喪亂して天下資財蔑亡するなり。曾莫惠我師、師は衆民なり、衆民如何に愁苦するも惠施する道無し、是の如きは皆王が暴虐の致せる結果なりと之を戒しむ。

天之牖民 如堦如筵 如璋如圭 如取如攜 攜無曰益 牖民孔易 民之多辟

無自立辟

天の民を牖くこと、堦の如く筵の如く、璋の如く圭の如く、取るが如く攜ぐるが如く、攜ぐれば益さんと曰ふこと無し、民を牖くこと孔だ易し、民の辟多き、自から辟を立ること無かれ、

【句釋】牖は「傳」に道くなり。朱子曰く、開明なり。今曰く開き道くなり。如堦如筵、堦は土を燒て製せる樂器、乃ち「ツチブエ」と訓す、筵は竹を用て製せる樂器、堦聲と箴聲と相和するは君と民と相和するに喩ふ。如璋如圭、璋も半珪なり、圭も半珪なり、二物相合するを以て君民相合するに喩ふ。如

取如攜、攜無曰益、取と攜とは必ず従ふを曰ふ、物を他處に取て而して手を以て之を擧るが如し。之を
求むれば即ち得、己に費して以て之を益す無し。牖民孔易、民を開導することは王に於て易易たる問題
のみ、民之多辟、無自立辟、民已に邪辟多し、之を開かずして却て其の邪辟を自から立つることは決して
無かれとなり。

价人維藩 大師維垣 大邦維屏 大宗維翰 懷德維寧 宗子維城 無俾城壞

無獨斯畏

价人維藩なり、大師は維垣なり、大邦は維屏なり、大宗は維翰なり、徳を懷くは維寧し、宗子は維城な
り、城をして壞れしむること無かれ、獨斯畏ること無かれ、

【句釋】价人は善人、又大人。藩は籬、即ち衛なり。大師は三公なり。垣は牆、是れも衛なり。大邦は
王國を衛る諸侯の中の大邦を指す、屏は門内の樹蔽なり。大宗は強族なり。翰は幹と同じ、物の依りて
立つ所のもの。懷德維寧、人君たるものは徳を以て命とす、其の徳を失はざるときは國家安寧なり。宗
子は王の適子と限らず、其の同姓と見るべし。城は藩垣屏翰より以上のものとす。無俾城壞、城壞ぶれ
なば何處に身を置かん。宗子背かば城は必ず壊破するなり。無獨斯畏、獨居の人とならば斯れ畏るべき
なり、滅亡に至るが故に畏るるなり。

敬天之怒 無敢戲豫 敬天之渝 無敢馳驅 昊天曰明 及爾出王 昊天曰旦

及爾游衍

天之怒を敬して、敢て戲豫すること無かれ、天の渝れるを敬して、敢て馳驅すること無かれ、昊天曰に
明なり、爾と出でて王けり、昊天曰に旦なり、爾と遊び衍まん、

【句釋】戲豫は逸豫と同じ、怠惰にして放逸なるなり。渝は變なり。馳驅は自恣なるなり。王は往。明
と旦と義同じ。游衍は寛縦の意、天は敬せざるべからず、其の敬すべきを敬せざるときは天は怒り、天
は渝る、乃ち戲豫し乃ち馳驅すれば天の怒り、天の渝る亦當然なり、而かも昊天は公明なり、大旦なり、
物として照さざるは無し、物として明らかならざるは無し、往くも附隨し、衍むも亦附隨せんとなり。
【評論】板は八章八句を以て成る。序説の如く、厲王を諷刺するが本意、而して兼て僚友を責むるの詞
なり。

生民の什十篇六十一章四百三十三句

蕩の什三の三

蕩蕩上帝 下民之辟 疾威上帝 其命多辟 天生烝民 其命匪誥 靡不有初

鮮克有終

蕩蕩たる上帝、下民の辟なり、疾威なる上帝、其の命辟多し、天生烝民を生ず、其の命誥にあらす、初有らずといふこと靡し、克く終有ること鮮し、

【句釋】蕩蕩は『箋』曰く、法度廢壞の貌を言ふ。朱子曰く、蕩蕩は廣大の貌と。朱説を以て宜とす。廣大なる上帝なり。下民之辟、天下の君となるなり。疾威、『傳』曰く、疾は人を病す、威は人を罪す、人を病すとは賦斂を重くするなり、人を罪すとは刑法を峻にするなり、其の政教又邪僻多く舊章に由らざるなり。其命多辟、王命邪僻多きなり。天は自然の天を言ふ。烝民は衆民なり。匪誥、誥は信なり、賦する所の命本より善なるに邪僻多きが故に其の命信じ叵し。靡不有初、初めは必ず善、風俗良淳なり。鮮克有終、其の習ふ所惡しきこと多きを以て遂に終を善くせずとなり。朱公遷曰く、一二は理に據て正言し、蕩蕩の二字本稱美の詞、三四は方に之を怪しむ、故に之を怨むの辭を爲る。五六以下は又其の亂亡の故を探る。徐士彰曰く、蒸民の四句總て上文を解す、天生の二句又是れ下文を喚起す、靡不の

二句又上句を解す、正に命の誥に匪ざるを見はす。章意末二句に説到して以て歸宿と爲さんことを要す。但上文來得、十分委曲、正に羊腸詰屈の如く、遂に覽者をして駭愕して由る所を知らざらしむ。

文王曰咨 咨女殷商 曾是彊禦 曾是掎克 曾是在位 曾是在服 天降惛德

女與是力

文王の曰く咨、咨女殷商、曾て是れ彊禦、曾て是れ掎克、曾て是れ位に在り、曾て是れ服に在り、天降惛德を降して、女興して是れ力めし、

【句釋】咨は嗟嘆の聲。殷商は紂王を指す、詩人今厲王を諷刺するに在り、而かも直指せず、故に前代の暴王を借り來りて以て詞を托す。曾是彊禦、『傳』曰く、彊禦は彊梁善を禦ぐなり、惡彊くして善を容れざるなり。掎克は民を掎ち之に克ち、人の力を奪ふことなり。彊禦は暴虐の臣、掎克は聚斂の臣、共に王の惡を助くる害は一なり。在位、在服、此の如き惡臣が其の位に在り、其の事に當り居るなり。惛德、惛は慢なり、背徳戾徳の人を天が降して大に民を虐たぐ。女は同僚を指す。興是力、貴様等が之を諫めず、却て其の暴を助けしは何ぞやとなり。

文王曰咨 咨女殷商 而秉義類 彊禦多讒 流言以對 寇攘式內 侯作侯祝

靡屆靡究

文王の曰く咨、咨女殷商、而義類を秉れ、疆禦にして懟多し、流言して以て對へしむ、寇攘式て内に
するなり、侯作み侯祝ること、屈り靡く究り靡し、
【句釋】而は女と同じ。義は宜。類は善。而は善類を秉れよ。多懟、懟は怨と同じ。流言は無根不實の
言。以對、一方は善を爲さんと欲するも、一方は無根の事を流言して以て其れに酬對するぞ。寇攘式内、
惡人共を用て内に容れる、惡人内に在り、王何ぞ善政を取るを得ん。侯は維と同じ。作は「傳」に詛な
り、祝も同じ、民の詛祝を爲す。靡屈靡究、屈は極、究は窮、民の怨謗すること窮極する所なきなり、
内に衣冠の盜あり、外に干戈の盜あり、此の詩ある所以。

文王曰咨 咨女殷商 女怙然于中國 斂怨以爲德 不明爾德 時無背無側 爾

德不明 以無陪無卿

文王の曰く咨、咨女殷商、女中國に怙然として、怨を斂めて以て德と爲せり、爾の德を明らかにせずし
て、時背無く側無し、爾の德明らかならず、以て陪無く卿無し、

【句釋】怙然は「傳」に猶ほ彭亨の如しとあり。「箋」曰く、怙然は自矜氣健の貌、旁若無人の態度を言
ふなり、此の徒が勢力を中原に張るなり。斂怨以爲德、「箋」曰く、羣不逞怨を作すの人を斂聚して之を
有德と言ふ、己の下に聚まり來る徒は皆民の怨謗を受け居る人なり、然るに王は此の人の來るを見て有

德の君子と思ふなり。無背無側、我が背の眞の助と爲る人も、我が側の眞の助と爲る人も無きなり。無
陪は無陪貳なり、陪貳は三公の類を曰ふ。無卿、卿士、王の前後左右、惡人のみにして、善人は無きなり。
文王曰咨 咨女殷商 天不洎爾以酒 不義従式 既懲爾止 靡明靡晦 式號式

呼 俾畫作夜

文王の曰く咨、咨女殷商、天爾を酒はしむるに酒を以てせず、義からざるに従ひ式ふ、既に爾の止を
懲る、明も靡く晦も靡し、式て號び式て呼ぶ、晝をして夜と作さ俾む、

【句釋】酒は沈酒なり、酒を飲み面色變するが酒なり、然るに今王は酒に沈酒するにあらず、暴虐の爲
めに沈酒するなり。不義従式、「箋」に式は法なりと解して「從テ之ヲ法行スベカラズ」と訓む、今朱子
が不義のみ是れ従つて用ふの説を取る。既懲爾止、懲は過なり。止は容止、爾の容止を懲るなり。靡明
靡晦は明時と晦時の區別なく、式號式呼、號呼は大に叶ぶの聲、酣醉して號呼するなり、王の狂態を言
ふ。俾畫作夜、夜の暗は自然なり、晝の暗は不自然なり、其の不自然の状態に在る如きは暴虐不明の天
子なればなり。

文王曰咨 咨女殷商 如蜎如蠙 如沸如羹 小大近喪 人尙乎由行 內爨于中
國 覃及鬼方

文王の曰く咨、咨女殷商、蝸の如く蟪の如く、沸くが如く羹の如し、小大喪ぶに近けれども、人尙由つて行ふ、内は中國に哭られ、覃いて鬼方に及ぶ、
【句釋】蝸は蟬なり。蟪は蟻なり。醉て號呼する聲蝸蟪の如く頗る噪噪しきなり。如沸如羹、又喻ふ號呼の聲、湯の沸が如く、羹の方に熟するが如くなり。小大近喪、小國も大國も滅亡するに至らん。人尙自由行、此の邪行を尙且行うて聊かも改むるを欲せず、君臣上下其の非此の如し。内哭于中國、哭音「ヒ」訓「イカル」字書に醉はずして怒るなり、惡人共權樂の末、禮を亂し哭怒するに至る。覃は延なり。鬼方は遠夷の國を指す、内に亂れて外に及ぶとの意なり。

文王曰咨 咨女殷商 匪上帝不時 殷不用舊 雖無老成人 尙有典刑 曾是

莫聽 大命以傾

文王の曰く咨、咨女殷商、上帝時ならざるにあらず、殷舊を用ひざればなり、老成人無しと雖も、尙典刑あり、曾是是れ聽くこと莫し、大命以て傾けり、

【句釋】匪上帝不時、上帝が不善を爲すの時にはあらず。殷不用舊、殷人が舊法を用ひざれば此の如く亂るるなり。雖無老成人、舊法を守る老臣を指す、此の老成人は今無きも。尙有典刑、舊典刑は人に關せず尙嚴然とあるなり、曾是莫聽、聽は用の意、用ひざれば有も無に同じ。大命以傾、大命は先王の大命

なり、此の大切なる大命は傾廢して救ふ可きなし。

文王曰咨 咨女殷商 人亦有言 顛沛之揭 枝葉未有害 本實先撥 殷鑒不遠

在夏后之世

文王の曰く咨、咨女殷商、人も亦言へるあり、顛沛の掲れる、枝葉は未だ害あらず、本實に先づ撥えぬ、殷鑒遠からず、夏后の世に在り、

【句釋】人は古の賢人。顛沛、「傳」に顛は仆、沛は抜とあり、樹が倒れ、本が抜る。掲は本根蹶起の貌木の根が露れたるなり、枝葉未有害、漸漸と枝葉にも害の及ぶは論勿きも、根本の傾倒するは如何とも再生の望なし。本實先撥、撥は絶と同じ。殷鑒不遠、在夏后之世、殷の亡滅を鑒の如く明かに見しは猶ほ昨日の如きなり、夏の桀王は不義を爲して國亡び、以て殷の鑒と爲れり、殷の鑒は今以て周の鑒と爲るべきなり。朱公遷曰く、根本の實は國家の天命を指して言ふ。「說通」曰く、厲王の惡四あり、小人に任せ、典刑を廢し、酒に酒し、忽然たり、而して其の本は小人に任すに根す、故に各章屢ば意を致す。
【評論】蕩は八章八句を以て成る。召穆公、周室の大壞を傷む、厲王無道にして、天下蕩蕩として綱紀文章無し、故に是の詩を作る。

抑抑威儀 維德之隅 人亦有言 靡哲不愚 庶人之愚 亦職維疾 哲人之愚

抑抑たる威儀は、維徳の隅、人も亦言へるあり、哲として愚ならざるは靡し、庶人の愚なるは、亦職とする維疾、哲人の愚なるは、亦維斯戾れり、

【句釋】抑抑は細密なり。隅は廉隅。威儀の細密も徳の一端なり。人は古の賢人。靡哲不愚、哲人は愚なるものにあらず、愚なれば哲人にあらざるなり。然るに世に哲人と稱せらるる者を見るに哲人にあらずして愚人なりとの意。庶人之愚、亦職維疾、庶は衆、職は主、衆民は其の主質本來愚にして、其の愚は即ち疾なり、疾なるが故に怪しむに足らず。斯戾、哲人の愚に至りては、其の稱せらるる所に違ふ、是れ戻る所以なり。哲人とは誰を指す、是れ厲王なり。

無競維人 四方其訓之 有覺德行 四國順之 訶謔定命 遠猶辰告 敬慎威儀

競きこと無けんや維人、四方其れ之を訓とす、德行を覺にする有れば、四國之に順ふ、訶に謔りて命を定め、遠く猶りて辰に告ぐ、威儀を敬慎するは、維民の則なり、

【句釋】競は彊なり。維人は彊しと言ふ意を反言するなり。四方其訓之、人は人たるの道を守れば孔た

彊きものなり。然るときは四方の民皆之を以て教訓の平本とす。有覺德行、覺は直大なり、其の能く德行を直大にする人あらば、四國順之、天下皆之に隨順するなり。訶謔、訶は大、謔は謀。定命、大に天下の爲めに謀りて其の命を定めよ、命は號令なり。遠猶辰告、猶は圖なり、一時の計を圖らずして、長久の計を圖れ、所謂辰を以て戒告し、法を紊すなかれ、歳時を嚴肅にせよ。敬慎威儀、維民之則、則是法則、上威儀を正さば、下自から法則とせんのみ。

其在于今 興迷亂于政 顛覆厥德 荒湛于酒 女雖湛樂從 弗念厥紹 罔敷求

其の今に在りて、政ごとに迷亂することを興び、厥の徳を顛覆し、酒に荒湛す、女湛樂に從すと雖も、厥の紹ぐことを念はざらんや、敷く先王を求めて、克く明刑を共ること罔けんや、

【句釋】其在于今、厲王の世を言ふ、衛の武公が今日の所爲を言ふなり。興は尙ふなり。迷亂于政、厲王が小人の政事を迷亂する者を尙ふを言ふ。顛覆厥徳、王たる者の徳を顛覆なり、而して樂む所は何ぞ。荒湛于酒、唯酒にのみ荒湛す、荒は手の著け様なきなり、湛は極端までタノシムなり。女は人をして武公自身を指さしむるなれど、其の本尊は厲王なること知り易し。雖湛樂從、樂は極むべからずの人道を知らず。飽まで劣欲に從す。弗念厥紹、紹は繼紹、祖先に紹ぐ身は我なりと念はざるやと詰問的に出る

なり。罔は無と同じ。敷は廣なり。求先王、克共明刑、共は執なり、先王の明法を執て以て其の正道を求めよと咎むるなり。

肆皇天弗尙 如彼泉流 無淪胥以亡 夙興夜寐 洒掃廷內 維民之章 脩爾

車馬 弓矢戎兵 用戒戎作 用邊蠻方

肆に皇天尙しとせず、彼の泉流の如く、淪つて胥ひ亡ぶこと無けんや、夙に興き夜に寐ね、廷内を洒掃し、維民の章、爾の車馬、弓矢戎兵を脩めて、用て戎の作るに戒へ、用て蠻方を邊けよ、

【句釋】肆は故と同じ。弗尙、皇天も尙ぶに足らず。如彼泉流、國の亡滅の速なるを泉流に喩ふ。無淪胥以亡、淪は陷なり、胥は相と同じ、國は陷り民は亡ぶ。夙興夜寐、早く興て晩く寐。洒掃廷内、廷は庭と通ず、宮庭内を洒掃する。維民之章、章は表、民の見て以て表章と爲す所。脩爾車馬、弓矢戎兵、爾の國を衛る兵備をして、用戒戎作、敵の襲來に備ふるなり。用邊蠻方、邊音「テキ」、訓「トホキ」遠なり、蠻夷を遠ざけて患を絶つなり。日常の洒掃は易易たる事、此の易易たる事が日常に行なへる者なれば、必ず兵備も嚴重に行なへるなり、兵備嚴重なるときは、蠻夷何ぞ遠ざからざるを得ん。是れ戎備の教訓なり。

質爾人民 謹爾侯度 用戒不虞 慎爾出話 敬爾威儀 無不柔嘉 白圭之玷

尙可磨也 斯言之玷 不可爲也

爾の人民を質め、爾の侯度を謹み、用て不虞に戒へ、爾の話を出すを慎み、爾の威儀を敬し、柔嘉ならずといふこと無し、白圭の玷けたるは、尙磨く可し、斯言の玷けたるは、爲む可からざるなり、

【句釋】質は成なり定なり、人民を鎮め安んずるなり。侯度は諸侯の法度を謹ましむるなり。用戒不虞、不虞は意外の事、不慮の事、平常の用心を言ふ、平常の用心は何ぞ、内を正し、外を防ぐなり。慎爾出話、話は語と同じ、輕輕に語を出すを慎むなり。無不柔嘉、威儀を敬慎するときは、言語應對、總て柔和嘉善ならざるは無し。白圭之玷、玷は缺なり。尙可磨、缺たる玉は更に磨けば復圓玉と爲る。斯言之玷、不可爲也、言語は白圭と異なる、若し一失すれば遂に能く之を救ふこと莫なり、身正しうして而して後國治るの説、此等の詩より來るなり。南容一日に此の章を三復す、而して孔子其の兄の子を以て之に妻すと「論語」に在り。

無易由言 無曰苟矣 莫捫朕舌 言不可逝矣 無言不讐 無德不報 惠于朋友

庶民小子 子孫繩繩 萬民靡不承

易く由つて言ふこと無かれ、苟くもすと曰ふこと無かれ、朕が舌を捫ること莫し、言逝るべからず、言として讐へずといふこと無し、徳として報いずといふこと無し、朋友庶民小子を恵しまは、子孫繩繩

として、萬民承けずといふこと靡けん。

【句釋】無易由言、上章の意を反覆して言ふ、言語は輕易に視ること無かれ。無曰苟矣、苟は輕輕と意義同じ、輕輕に曰ふこと無かれ。莫捫朕舌、朕は今日上一人に用ふ、周代は一般に通用すると知るべし、乃ち我なり、我が舌を他人が捫去らば言ふ能はざるも、他人は決して我が舌を捫ぬ。言不可逝矣、我が自由なれば、慎んで恣に往かしむ可らず。無言不讐、讐は用なり答なり。無德不報、我が善言は必ず答あり。我が徳は必ず酬あり。惠于朋友、庶民小子、羣臣や庶民の子弟に惠順する徳を我が施せば、子孫繩繩、萬民靡不承、繩繩は戒なり繼續なり、子孫永く傳へ、萬民亦之を奉承して王の教令を行なはんとなり。

視爾友君子 輯柔爾顔 不遐有愆 相在爾室 尙不愧于屋漏 無曰不顯 莫予

云觀 神之格思 不可度思 矧可射思

爾の君子に友なふを視るに、爾の顔を輯柔にす、遐ぞ愆ち有らざらん、爾の室に在るを相るに、屋漏に愧ぢざらんことを尙へ、曰ふこと無かれ 顯ならずして、予を云に觀ること莫しと、神の格思、度る可からず、矧や射ふ可けんや、

【句釋】視爾友君子、君子は賢士大夫を言ふ、爾の君子即ち賢士大夫に友とし遊ぶを視るに。輯柔爾顔、

輯は和なり、爾の顔色は頗る和柔である。不遐有愆、遐は何、何ぞ愆あらざらん、顔色和柔ならざれば交際する能はざればなり。相在爾室、室は室内。尙不愧于屋漏、西北の隅を屋漏と言ふ、如何なる悪事も出来る處、然れども人の知らざるを以て悪事を爲すなかれ、天地に愧ぢざる行をせよ。無曰不顯、他人は知らずと曰ふこと無かれとなり。莫予云觀、予の事は他人は觀すと云ふこと莫かれ、俯仰天地に愧ぢざる行をせよ、君子は其の睹す聞かざる所に戒慎するの意なり。神之格思、思の字は語助、格は至と同じ。不可度思、矧可射思、矧は況、射は厭なり、神は鬼神、鬼神の妙、物として體せざるは無し、人間の度を能はざる力を有す、人の睹聞せざる所、鬼神は能く睹聞す、是を以て善を爲し祭を爲す、決して厭倦なるべからずとなり。

辟爾爲德 俾臧俾嘉 淑慎爾止 不愆于儀 不僭不賊 鮮不爲則 投我以桃

報之以李 彼童而角 實虹小子

辟爾徳を爲して、臧からしめ嘉からしめよ、淑く爾の止を慎み、儀に愆またざれ、僭はす賊はず、則と爲さざること鮮けん、我に投するに桃を以てすれば、之に報ゆるに李を以てす、彼の童にして角とらんといふは、實に小子を虹れるなり、

【句釋】辟爾爲德、辟は武公を指す、徳は廣く内外を指せども、今特に儀を謹しむ上に於て言ふ。俾臧

俾嘉、俾は使、臧は善、嘉は美なり。淑慎爾止、淑も善なり、爾が容止を慎めよ。不愆于儀、儀も容止も殆んど同じ、容止を慎めば威儀自から愆たず、威儀を愆たざれば容止は自から慎むなり。不僭不賊、僭は差、賊は害、上の如く容止威儀に於て差はず害はざる時は、鮮不爲則、人の爲め規則と爲らざることは少きなり。投我以桃、彼より我に桃を贈らるときは、報之以李、我は彼に李を以て返禮と爲す、桃の卑しく、李の貴きこと知る可し。彼童而角、童即ち牛羊の子、子は角のあるべき理なし、其の無きものを角ある如くするは、實虹小子、「傳」に虹は潰なり。「字書」に虹は託なり、託亂するなり、小子即ち武公を託亂するものなり。豊城の朱氏曰く、桃を投じて李に報ゆるは理の必ず有るものを言ふ、彼童にして角あるは理の必ず無きものを言ふ、有るは之を勉めしむ、無きは之を戒しむなり。

荏染柔木 言緝之絲 溫溫恭人 維德之基 其維哲人 告之話言 順德之行

其維愚人 覆謂我僭 民各有心

荏染たる柔木は、言に之に絲を緝く、溫溫たる恭人は、維德の基なり、其維哲人、之に話言を告ぐれば、德に順つて之行ふ、其維愚人、覆つて我を僭れりと謂ふ、民各心あり、

【句釋】荏染は「孔疏」に猶ほ溫溫のごとしとあり、所謂溫柔の嘉木なり。言緝之絲、緝は綸、綸は繩なり、絲を以て綸を爲り之を柔木に被るなり、被めて何の用をか爲すや、之に弦を掛け以て弓と爲す。

溫溫恭人、柔溫にして恭謹の人。維德之基、基は基止、柔溫恭謹なる人格にして始めて德を成就するを得、柔溫恭謹は是れ德の基なり。學者は先づ其の客氣即ち霸氣を去て、以て宜しく溫柔なるべきなり、溫柔なるときは以て學に進むとなり。其維哲人、哲人は明智の人を主とす、前の恭人は溫德の人を主とす。告之話言、古人の善言を擧げて以て明智の人に告ぐるなり。順德之行、智より德に進み、順敬して以て之を實行するに至る。其維愚人、智も德も眼中に無き徒輩は是れ愚人なり。覆謂我僭、覆は反なり、善言を若しや愚人に告ぐるときは、反對に我を僭を言ふ人間と爲す。民各有心、民を余は「ヒト」と訓讀す、上の恭人も哲人も愚人も此の三者盡な此の民の字の中に收む、恭人と哲人は善言を容れども、愚人は之を容れず、容れざるは各の別に心あればなり。徐士彰曰く、溫溫は恭人の貌を形容して字重し、人未だ矜高にして以て德に進む者あらず、必ず一段恂恂として人に下るの氣象あらんとを要して纔かに好し、而して今日一善、明日一善と、向上に積み去れば優ち高大にして能く哲なり、客氣ある者は、眞性未だ湛ならず、理明ならず、退然として自下すれば湛然虛明なり、日用の間に驗す可し。顧氏曰く、言緝之絲は案するに荏染の柔木ありて以て弓と爲す、然して後、絲を以て弦と爲して之に被らしむべし、直ちに之を柔木に被らしむるにあらず、但柔木あつて、之に被らしむるに弦を以てせざるときは、弓と爲すこと能はざるなり。今此の願説を以て前説に代ふべきなり。

於乎小子 未知臧否 匪手攜之 言示之事 匪面命之 言提其耳 借曰未知

亦既抱子 民之靡盈 誰夙知而莫成

於乎小子、未だ臧否を知らず、手之を攜くのみにあらず、言に之に事を示す、之に面命するのみにあらず、言に其の耳を提さぐ、借ひ未だ知らずと曰ふも、亦既に子を抱けり、民の盈つること靡き、誰か夙く知つて莫く成さん、

【句釋】於乎は嘆辭、賞嘆にも、嗟嘆にも共通する文字なり。小子は武公。未知臧否、臧否は善惡と同じ、聞かざるを以ての故に知らざるなり、聞くも分知せざる底の妄味のものと言ふにはあらず。匪手攜之、教へんが爲め手を以て之を攜掣するのみにあらず、尙ほ其の上に、言示之事、親しく示すに事の實例を擧げてするなり。匪面命之、又面に向つて之を語るのみにあらず、尙ほ其の上に、言提其耳、面命して判らず、夏に其の耳を提擗する、教戒の親切、其の勞を辭せざるなり。借は假なり。曰未知、爾は未知知識が發達せざるが故なりと人は曰はんも、亦既抱子、子を抱くほどの長大なる人、何ぞ知らざる程の幼少ならんや。民之靡盈、盈は滿、人若し己が智充分ならずと悟らば、人の教は曾に入る筈なり、箱の中虚しければ盈るに至るまで物品の入るべき筈なると同じ。誰夙知而莫成、誰か早く知る所ありて、而して反つて莫く成らんや、以て王の成ること無きは本知ること無きが故なるを言ふ。

昊天孔昭 我生靡樂 視爾夢夢 我心慘慘 誨爾諄諄 聽我藐藐 匪用爲教
覆用爲虐 借曰未知 亦聿既耄

昊天孔昭、我生靡樂、我に罪あるは昊天昭明にして能く察知し玉ふ、是を以て之を畏る、樂の靡き所以なり。視爾夢夢、夢夢は昏昏と同じ、王政昏亂の意を言ふ、爾は武公。我心慘慘、慘は痛なり恨なり、音「サン」、「サウ」にあらず、爾の昏昏たる状態を視て、我は樂しますして慘慘たるなり。諄諄は詳熟の意、我は詳熟、所謂面命し提耳し誨ふれども、爾は我に對し、藐藐然として疎略なり。匪用爲教、覆用爲虐、爾は我が所言を用ひて政令を爲さず、反て之を事に妨害ありと言つて忠言を受ざるなり。借曰未知、亦聿既耄、聿は述の義と自の義とあり、耄は八十歳以上の老人に通用する文字、知あらずと曰ふも、既に九十に垂んとす、其れ是の年を如何せんや。

於乎小子 告爾舊止 聽用我謀 庶無大悔 天方艱難 曰喪厥國 取譬不遠
昊天不弔 回遹其德 俾民大棘

於乎小子、爾に舊止を告ぐ、我が謀を聴き用ひば、庶はくは大悔無けん、天方に艱難なり、曰に厥の國を喪さん、譬を取ること遠からず、昊天忒はず、其の徳を回適して、民をして大に棘ならしむ、【句釋】告爾舊止、止は語助、舊は舊章舊典なり、先王の舊章なり。聽用我謀、我が謀と舊章とに因て儀を慎まば、庶無大悔、大なる悔恨は招かずとなり。天方艱難、艱は險、難は患なり。曰喪厥國、災あり寇あり、艱難の事多し、國滅亡するに至るなり。取譬不遠、講意曰く、譬は譬喩にあらず、曉譬なり、即ち道理を曉示するなり。『箋』に今我王の爲め譬喩を取ること遠きに及ばず、維近きのみ。『箋』の説も亦通ず。昊天不忒、忒は音「トク」、訓「ウタガフ」疑なり。『箋』は差なりと言ふ、共に通ず。昊天の徳常ありて差忒せざるが如くなるべし、天道の禍福忒ふ所無きを以て知れ。回適は回は曲、適は僻、王が其の徳を曲僻して常なきときは、俾民大棘、棘は急。『箋』曰く、王其の行を邪にして、貪暴を爲し、民の財をして匱盡して大に困急せしむ。

【評論】抑は總て十二章。三章は八句、九章は十句を以て成る。侯包言ふ、武公行年九十有五にして猶ほ人をして日に是の詩を誦し、其の側を離れざらしむ。然らば則ち「序說」厲王を刺ると爲すは誤れり。今謂く、厲王の傳を知らざる者は共に是の詩を語るの力なし、幸に厲王の事を知り、以て序說の亦取るべきあるを知れ。

蕩彼桑柔 其下侯甸 捋采其劉 瘼此下民 不殄心憂 倉兄填兮 俾彼昊天 寧不我矜

蕩たる彼の桑柔、其の下侯甸し、捋り采つて其れ劉たり、此の下民を瘼しむ、心憂を殄たず、倉兄たること填兮、俾たる彼の昊天、寧ぞ我を矜まざる、

【句釋】蕩は「傳」に茂盛の貌とあり、桑の柔濡にして其の葉宛然として茂盛するなり。其下侯甸、甸は桑陰の均き也、桑葉の茂盛は以て周世の盛代を言ふ、其下陰の均しきは以て周民の子來を言ふ。捋采は桑葉を捋り采て其の跡爆爆として疎なるなり。劉は殘なり。瘼は病なり。此下民を病しむるなり、周の衰世、厲王の暴虐あり、民をして安息せしむべき仁澤を施さず、宛かも夏日に憩ふべき桑の陰なきが如く、民の頼るべき所なしと嗟きて、芮伯なる諸侯が此の詩を作るなり。不殄心憂、殄は絶、心の憂絶ゆる時なし。倉兄は愴惻なり、悲悶の意。填兮、傳に填は久とあり、悲しみ悶ふること久し。俾は「箋」に明大の貌とあり。昊天は王者を指す。寧は何と同じ。不我矜、我を矜まずして反て我を困ましむるや。芮伯は武王、成王、桓王、厲王の四王に涉りて有りとすれば芮國の伯爵の意ならん、厲王の世の芮伯は字を良夫と稱す。

四牡騤騤 旗旐有翩 亂生不夷 靡國不泯 民靡有黎 具禍以燼 於乎有哀
國步斯頻

四牡騤騤たり、旗旐翩たるあり、亂生つて夷かならず、國として泯びざるは靡し、民黎きこと有ること靡し、具に禍あつて以て燼きぬ、於乎哀あり、國歩斯頻なり、

【句釋】四牡騤騤、四牡は四馬、騤騤は不息なり。旗は鳥羽を以て造る旗、旐は龜を畫ける旗、此の二旗が翩翩たるは、以て軍役の繁多なるを言ふ。亂生不夷、平夷ならず。靡國不泯、國として殘滅を免かるものなし。民靡有黎、黎は「傳」に曰く齊なり。「箋」曰く、時民齊しく兵寇の害を被むらざる者なし。朱子曰く、黎は黒なり、黒首を謂ふ、民皆軍事に奔走し、黒髮の者あること無きなり。以上諸説皆通す。具禍以燼、燼は灰燼、禍に罹りて火の燼きたる如くなるなり。國歩斯頻、國の運命茲に逼らんとするを哀しむなり。

國歩蔑資 天不我將 靡所止疑 云徂何往 君子實維 秉心無競 誰生厲階

至今爲梗

國歩蔑びんとして資なく、天我を將はず、止疑する所靡し、云に徂いて何くに往かん、君子實に維、心を秉ること競無し、誰か厲階を生じて、今に至りて梗と爲す、

【句釋】國歩蔑資、「箋」曰く、蔑は猶輕の如し。朱子曰く、蔑は滅なり、資は咨なり。今朱子に従ふ、國家將に滅びんとして咨くなり。天不我將、「箋」曰く、將は養なり。靡所止疑、止は止住、疑は疑を以て正字とす、定在、我をして止住定在する所無からしむ。云徂何往、徂は往なり、人に定所なきときは自ら安んずる無く、人に往く所無きときは自ら以て患を避る所なし。秉心無競、君子は己が心を秉持して、人と競ふこと無し。誰生厲階、厲は惡なり怨なり、階は堂に登るの道、即ち梯なり、誰か好んで怨の梯を作り生ずや。至今爲梗、「傳」に梗は病なり。然るに今に至るまで病を爲し民の患を増さしむるは誰ぞ、厲王を指して之を言ふ。徐士彰曰く、禍を言ふ、而して必ず君子無争を言ふは、蓋し朝廷の上、朋を分ち黨を植るときは争心必ず起りて、相激して以て禍亂を爲す、程子の所謂吾が黨激して之を成すが如き是れなり、今や然らず、誰か此の禍を爲すや。

憂心愷愷 念我土宇 我生不辰 逢天俾怒 自西徂東 靡所定處 多我觀瘁

孔棘我圍
憂心愷愷たり、我が土宇を念ふ、我が生辰ならず、天の俾怒に逢へり、西より東に徂き、定處する處靡し、多いかな我が瘡しきを觀ること、孔棘棘なり我が圍たること、

【句釋】愷愷は憂心の盛んなるなり。土は郷土。宇は宅宇。征役に從事する人、久しく還らざるを以て

懷郷の念深きなり。不辰は我生は悪しき時なりと運命を嗟くなり。俾は「傳」に厚なり、「字書」に疾とあり、天の厚疾に怒るに逢ふと諦める。西東、定處、東西南北往來して一定の處なし。瘡は病と同じ。孔棘我圍、棘は急迫にして、つまれる義、圍は「箋」に禦なりと、我の困病に遇ふこと甚だ急なり、我が寇を禦ぐに忙はしきなり、從軍者に代つて其の不平怨詞を敘ぶ。

爲謀爲愆 亂況斯削 告爾憂恤 誨爾序爵 誰能執熱 逝不以濯 其何能淑

載胥及溺

謀を爲し、愆を爲す、亂況して斯に削らる、爾に恤を憂ふることを告ぐ、爾に爵を序づるを誨ふ、誰か能く熱きを執り、逝に以て濯はざる、其れ何ぞ能く淑からん、載ち胥ひ及に溺れん、

【句釋】爲謀、王が國の爲め謀るなり。愆は「傳」に愆なりと、軍旅の謀を爲すは兵事を重く慎が爲めなり、然るに事宜しきを得ざる故に亂は況し、國勢は日日に斯削らる、況は滋すなり、其の任ずる所、賢者にあらざればなり。告爾憂恤、爾は王を指す、我王に恤ふべきを憂ふることを戒告す。誨爾序爵、爵位を賜ふに次第順序ありて亂れざることを教誨せんとなり、公爵たる可き者には公、伯爵たる可き者には伯と、其の正當なるを言ふ。誰能執熱、逝不以濯、熱き物を執る人は誰か水にて手濯ふことを以てせざらんや、國を治むるの道、必ず賢者を用ふべきを言ふ。其何能淑、淑は善。載胥及溺、上に示す如

くせざるときは何の善きことかあらん、胥共に沈溺に入るべきのみ。

如彼遼風 亦孔之僂 民有肅心 芘云不逮 好是稼穡 力民代食 稼穡維寶

代食維好

彼の風に遼ふが如く、亦孔だ之僂けり、民肅心あれども、逮ばすと云はしむ、是の稼穡を好し、民を力めて食に代ふ、稼穡は維寶、代食は維好し、

【句釋】如彼遼風、亦孔之僂、「傳」に遼は郷なり、僂は偃なり、偃は偃なり、偃は「爾雅」に僂偃とあり、風に郷うて走るときは氣短りて息する能はず、詩人亂世を憂へて此の語を爲す。民有肅心、民は善人にして力行ある者、肅は進なり。芘は使なり。云不逮、民間に進んで亂を救はんと欲する善人あるも亦強て渦中に入るを欲せず、故に自から逮ばすと稱して出でざるなり。好是稼穡、進んで仕ふるの念を絶ち退て農事を勵む。力民代食、「傳」に功無き者に代て天祿を食むなり。或は曰く、民事を勤めて以て祿食に代ふと。二説共に通ず。稼穡維寶、代食維好、朱子曰く、是の時に當り、仕進の憂は、稼穡の勞よりも甚し、故に曰く、稼穡は維寶なり、代食は維好と。勞すと雖も患無きを言ふ、憤世者の言知るべきのみ。徐士彰曰く、世亂已に極まる、孤忠救ふこと莫し、故に不逮と曰ふ、孰か之を使むる者ぞ、厲王之使むるなり。

天降喪亂 滅我立王 降此蝥賊 稼穡卒痒 哀恫中國 具贅卒荒 靡有旅力 以念穹蒼

天喪亂を降して、我が立てる王を滅せり、此の蝥賊を降して、稼穡卒く痒みぬ、哀恫するは中國、具に贅りて卒く荒し、旅力以て穹蒼を念ふもの有る靡し、

【句釋】天降喪亂、滅我立王、傳』は此の王の誰たるを言はず、朱子は共和後の事ならんと。朱公遷曰く、厲王、彘に流し、國に主無し、賢諸侯あり、共伯和と曰ふ、諸侯之を宗とす、因て其の年を名けて共和と曰ふ、乃ち知る我立王とは厲王なるを、厲王無道百姓の爲めに弑されんとして彘に逃れ去る、是に於て太子靜を立つ、是を宣王と爲す。降此蝥賊、蝥は蟲の苗根を食むを蝥と曰ふ、節を食ふを賊と曰ふ、畔種に稼と曰ひ、收斂に穡と曰ふ、卒は盡なり。痒は病なり。天喪亂を降し、國家の災以て我が王の特んで立つ所の者を窮盡す、蝥孽害を爲し五穀盡病むを言ふ。哀恫、恫は思と同じ、痛なり。中國、具贅卒荒、贅は係屬なり、荒は空虚なり、中國の人皆兵役に係屬せられ、食ふべき穀全く空虚なり。靡有旅力、以念穹蒼、曾て力を同じうして諫諍し天の此の災害を下す所以を念ふ者有ること無きなり、穹蒼は天の異名なり。

維此惠君 民人所瞻 秉心宣猶 考慎其相 維彼不順 自獨俾臧 自有肺腸

俾民卒狂

維此の惠君は、民人の瞻ぐ所、心を秉りて宣く猶り、其の相を考へ慎めり、維彼の順はざるは、自から獨臧からしめ、自から肺腸あり、民をして卒く狂はしむ、

【句釋】惠君、惠は順、義理に従順する君。民人所瞻、明君なるを以て百姓一齊に瞻仰する。秉心宣猶、己が心は固く秉り、而して徧く事を百姓と猶りて私にせず。考慎其相、輔相の臣を用ふるには考且慎、愷忽にせざるなり。維彼不順、此の順なる君に對し、彼の不順なる君を示す。自獨俾臧、自獨に臧とするは衆と謀らざるなり、獨斷にて惡臣をも採用するなり。自有肺腸、俾民卒狂、肺腸の中己一人の考ふる所ありて、而かも百姓と猶らず、乃ち民をして迷惑狂亂せしむるに至る。

瞻彼中林 甡甡其鹿 朋友已譖 不胥以穀 人亦有言 進退維谷

彼の中林を瞻れば、甡甡たる其の鹿あり、朋友已に譖り、胥ひ以て穀せず、人亦言ふあり、進退維谷まれりと、

【句釋】中林は例の倒用、即ち林中なり。甡甡は羣鹿衆多の形容なり。朋友已譖、鹿を以て人に反興しと言ふ、同僚は鹿の如く羣を作し、而して互に相ひ譖背す。不胥以穀、穀は善、互に相善らざるなり、小人輩、善道を以て交はらず、鹿にだも如かざるなり。人亦有言、進退維谷、上に明君なく下に惡俗あ

り、是を以て進退谷まるに至る、谷は山谷墜谷、窮困の意を敍ぶ。

維此聖人 瞻言百里 維彼愚人 覆狂以喜 匪言不能 胡斯畏忌

維此の聖人、瞻言百里、維彼の愚人、覆狂以て喜ぶ、言の能はざるにあらず、斯の畏忌を胡んせん、

【句釋】瞻言百里、傳に百里は遠く慮はかるなり。「箋」曰く、聖人視て言ふ所のもの百里、遠として察せざるは無し。覆狂以喜、愚人は禍の將に至らんとするを知らず、反狂して以て喜ぶ、愚暗の人、王の爲め策言するも事淺うして且近し、王反て迷惑し之を信用して喜ぶ。匪言不能、胡斯畏忌、「箋」曰く、賢人此の事の是非を見る、黑白を分別して之を王に言ふこと能はざるにあらず、然るに之を言はざるは此れ顔を犯し罪罰を得んことを畏懼するのみ。

維此良人 弗求弗迪 維彼忍心 是顧是復 民之貪亂 寧爲茶毒

維此の良人、求めず迪めず、維彼の忍心、是れ顧み是れ復ぬ、民の貪亂、寧んじて茶毒を爲す、

【句釋】良人は善人、又賢者。弗求弗迪、迪は進なり。國に良人あれども王求索せず又進用せず。忍心は良人の反對、殘忍にして惡を爲す心を懷く輩。是顧是復、此の殘忍なる輩を顧念し之を重復す、賢者を忽にして小人を愛するを言ふ。民之貪亂、寧爲茶毒、此の二句は甚だ奇句なり、民は亂を貪らざるが本意なり。然るに之を貪ると言ふは何ぞ、「箋」曰く、天下の民、王の政に苦しみ、其の亂亡を欲す、故

に安んじて苦毒の行を作す、相侵暴し慍恚して之を然らしむ、所謂自暴自棄の境界に至るなり。茶は苦葉、毒は螫蟲、共に惡物なり。

大風有隧 有空大谷 維此良人 作爲式穀 維彼不順 征以中垢

大風隧あり、空大の谷あり、維此の良人、作爲穀きを式ふ、維彼の順はざるは、征ふに中垢を以てす、【句釋】大風有隧、有空大谷、「箋」に大風は西風なり、西風の行く從て來る所あり、必ず空大谷の中よります、賢愚の行ふ所、各の其の性に由るに喩ふ、隧は道と同じ。作爲式穀、良人は良人の天分として善道を行ふ。征以中垢、征は行なり。中垢は「傳」に闇冥とあり、小人の作爲する所、善道に反す。是を以て闇冥ならざるは無し、亦以て小人の性とす。

大風有隧 貪人敗類 聽言則對 誦言如醉 匪用其良 覆俾我悖

大風隧あり、貪人類を敗る、言を聽いては則ち對ふれども、言を誦して醉へるが如し、其の良きを用ふるならず、覆て我を悖ら俾む、【句釋】貪人敗類、貪人の通行する道は大風の通行する道と同じく其の天分あり、貪人の天性は其の類を敗るにあり、利害の爲め其の衆類と調和せず。聽言則對、對は答、善言を聽くときは洵とに然りと答ふるも。誦言如醉、詩書の言を誦するに於ては、冥臥して醉へるが如し。匪用其良、覆俾我悖、「箋」曰

く、上位に居て善人を用ひず、反て我をして悖逆の行を爲さしむ、是れ弊を敗るの驗を形はす。朱子曰く、厲王、榮の夷公を誦ぶ、芮良夫曰く、王室其れ將に卑からんとす、夫の榮公は專利を好んで、大難を備へず、夫れ利は百物の生ずる所、天地の載る所なり、而して之を専らにす、其の害多し。所謂貪人は榮公か、芮伯の憂一日にあらず。

嗟爾朋友 予豈不知而作 如彼飛蟲 時亦弋獲 既之陰女 反予來赫
嗟爾朋友、予豈而の作を知らざらんや、彼の飛蟲の如し、時に亦弋に獲らる、既に之いて女を陰へば、反つて予に來り赫る、

【句釋】嗟爾朋友、甲より乙の者を喚び出して言ふ、嗟貴様我が友よと言ふ意、即ち貪人を指す。予豈不知而作、此の句は二の解釋あり。一は曰く予豈而の所作を知らざらんやと。一は曰く予豈知らずして作らんやと。今前説を是とす、而が作す貪事を知らざらんやとなり。予豈治亂興亡の理を知らずして妄に此の詩を作らんやとの説は取らず。如彼飛蟲、蟲は鳥なり、彼の飛鳥すらも、時亦弋獲、空中を自由に飛翔する鳥も時ありては弋に罹る。既之陰女、我は同僚の誼を以て女を陰護して其の惡を他に知らざらしめんと欲するも、反予來赫、女は善意に取らず、反て惡意に取り、予に來りて反對に赫怒すとなり。小人の常態古今此の如し。

民之罔極 職涼善背 爲民不利 如云不克 民之回遘 職競用力
民の極罔き、職ら涼とすれど善く背く、民の不利を爲すこと、云に克たざるが如し、民の回遘なるは、職ら競うて力を用ふればなり、

【句釋】民之罔極、民の多くは愚、是を以て貪亂止まる所を知らず。職涼善背、『箋』に涼は信とあり、『傳』に涼は薄なりと。薄徳を涼徳と稱することあれば或は是の説正しきが如くなれども、涼は諒なりと解せば此の義却て勝る、諒と心に信すれども、己に利なきを以て善く背く、道理に背くなり。爲民不利、如云不克、爲政者は民を害すること其の克つことを得ざるを恐るるが如し、其の至酷を言ふなり。民之回遘、回遘は邪僻の義なり。職競用力、『箋』曰く、民の行ひ維邪僻なるは主として爲政者が逐うて疆力を用ひ相尙ぶに由る故なり、民愁困して用て多端を生ず。徐士彰曰く、變詐は民の惡を導く、殘虐は民の害を重ぬ、貪亂にして止まるを知らざる所以、如云不克、職競用力は小人の惡極を形容す。

民之未戾 職盜爲寇 涼曰不可 覆背善詈 雖曰匪予 既作爾歌
民の未だ戾まらざる、職ら盜して寇を爲す、涼に不可なりと曰ふとも、覆つて背けば善く詈する、予に匪すと曰ふと雖も、既に爾の歌を作れり、
【句釋】未戾、『傳』に戾は定なり。職盜爲寇、『箋』曰く、爲政者、主として盜賊を爲し、寇害を爲す、

民心をして動搖安定ならざらしむ。涼曰不可、覆背善言、我之を諫止するに信を以てし女が行ふ所は不可なりと曰へば、反て我に背て大に罵る、己が諫を拒ぐの甚だしきを言ふ。雖曰匪予、既作爾歌、予は彼の貪人を指す、貪人は予にあらす他人なりと女は文飾するも、我は既に女が歌を作りて其の事已に著明なり、女は宜しく改悔すべしとなり。

【評論】桑柔は十六章。八章は八句、八章は六句を以て成る。芮伯厲王を諷刺すと爲す説信に近し。疏義曰く、小雅の正月、大雅の桑柔、皆詩人深怨甚痛の詞、故に言の長きこと此の如し、然して彼は憂懼多く、此は哀怨多し。露骨なる詞も往往ありと雖も、詩人忠厚の旨は宛然たり。

倬彼雲漢 昭回于天 王曰於乎何辜今之人 天降喪亂 饑饉薦臻 靡神不舉

靡愛斯牲 圭璧既卒 寧莫我聽

倬たる彼の雲漢、昭天に回れり、王の曰く於乎何の辜かある今の人、天喪亂を降し、饑饉薦り臻る、神として擧げざるは靡く、斯の牲を愛むこと靡し、圭璧既に卒きぬ、寧ぞ我を聴くこと莫き、

【句釋】倬は倬然、大を謂ふ。雲漢は銀河。昭回于天、銀河の光天に従ひ回るなり。箋曰く、精光天に轉運す、時に早し雨に渴す、故に宣王(厲王)天河を仰視し其の候を望む。王曰於乎何辜今之人、此の九

字を四字と五字とに句して二語と爲す説あり、余は九字を一句讀とす。宣王が天に訴ふる詞なり。天降喪亂、饑饉薦臻、人に何の罪辜ありてか或は大旱、或は饑饉を降すや。宣王は厲王暴虐の後に位に即き亂を治むるの志あり、而かも大旱、饑饉の災に遇うて嗟嘆す。大夫仍伯、此の詩を作りて王を賞む。靡神不舉、靡愛斯牲、王、早の爲め羣神を擧げて祭らざるは靡く、又天下の美犠牲を愛惜する靡く之に捧ぐ、圭璧は神を禮するの玉なり。既卒、玉を捧げ盡して卒きたるなり。寧莫我聽、然るに天は此の至誠を受け玉はざる如く曾て其の驗なきなり。

早既大甚 蘊隆蟲蟲 不殄禋祀 自郊徂宮 上下奠瘞 靡神不宗 后稷不克

上帝不臨 耗斁下土 寧丁我躬

早既に大甚し、蘊み隆なること蟲蟲たり、禋祀を殄たすして、郊より宮に徂き、上下に奠へ瘞め、神として宗しとせずといふこと靡し、后稷も克たず、上帝も臨けず、下土を耗し斁る、寧ろ我が躬に丁れ、

【句釋】蘊は「傳」に蘊蘊として暑く、隆隆として雷し、蟲蟲として熱す。箋曰く、隆隆として雷するは雨雷に非ず、雷聲尙殷殷然たり。旱天の形容を言ふ。不殄禋祀、自郊徂宮、郊は天地を祭る所、宮は宗廟なり、郊に祭り又宮に祭る。上下奠瘞、上は天下は地、傳に其の禮を奠へ、其の物を瘞むと。靡神不宗、傳に宗は尊なり、國に凶荒あれば則ち鬼神を索めて之を祭る。后稷不克、后稷の力も此の

早災に克すと。上帝不臨、上帝も來臨し玉はざるが如し。后稷は周の始祖、上帝は天の別號、此の二神が我が至誠を受け玉はざるに於ては最早や祈る所無し。耗は消耗、斃は敗斃。下土、此の國土を消耗し敗斃し盡さんよりは、寧丁我躬、丁は當と同じ、我躬は宣王の躬、宣王の躬を以て災害を代り受けんとなり。

早既大甚 則不可推 兢兢業業 如霆如雷 周餘黎民 靡有孑遺 昊天上帝

則不我遺 胡不相畏 先祖于摧

早既に大甚し、則ち推らしむ可からず、兢兢業業として、霆の如く雷の如し、周餘の黎民、孑遺あること靡し、昊天上帝、則ち我を遺さず、胡ぞ相畏れざる、先祖于に摧びん、

【句釋】推は『傳』に去なりと。早が去ざるなり。兢兢は恐なり。業業は危なり。霆は電なり。雷と霆とは一物、雷は音に就て言ふ、霆は光に就て言ふ、天下早を恐畏すること雷霆を恐るるが如し。周餘黎民、靡有孑遺、周の衆民、死亡する者多し、今其餘孑遺あること無きもの又餓病すとなり、孑は右の臂無き貌なり。胡は何。不相畏、先祖于摧、『箋』曰く、天將に遂に早して我を餓殺せんとす、先祖何ぞ我が恐懼を助けて雨を下さしめざるや。推は唯に作れ嗟なりと、『箋』に説けども、摧字「クダク」又「ホロブ」にて意義自から通ずるなり。

早既大甚 則不可沮 赫赫炎炎 云我無所 大命近止 靡瞻靡顧 羣公先正

則不我助 父母先祖 胡寧忍予

早既に大甚し、則ち沮む可からず、赫赫炎炎として、云に我所無し、大命近止、瞻ること靡く顧みること靡し、羣公先正、則ち我を助けず、父母先祖、胡寧予を忍べる、

【句釋】不可沮、人力の沮止すべしにあらず。赫赫は早氣、炎炎は熱氣。云我無所、身を置くに所無し。大命近止、靡瞻靡顧、『傳』に民の死亡に近きを大命近と言ふ。『箋』曰く、衆民の命將に死亡せんとす、天曾て視る所無く、顧る所無し、此の國中に於て之を哀閔す。羣公先正、公は公侯、正は官長、所謂古の上公、勾龍后稷の類の如し。則不我助、五穀の神として祭ると雖も、絶て我等を助けて雨を降さず。父母先祖、胡寧忍予、父母先祖の神も、子孫が此の如く早に苦しむを忍んで之を視るもの如し、予の苦を何ぞ忍んで之を視るやと自ら責むる中に祖先をも亦恨む意味あり、恨ますと言ふ説は取らず。

早既大甚 滌滌山川 早魃爲虐 如惓如焚 我心憚暑 憂心如熏 羣公先正

則不我聞 昊天上帝 寧俾我遯

早既に大甚し、山川を滌滌す、早魃虐を爲し、惓くが如く焚くが如し、我が心暑を憚る、憂心熏くが如し、羣公先正、則ち我を聞かず、昊天上帝、寧ぞ我を遯れしめんや、

【句釋】滌滌、「傳」に早氣なり。山に木無く川に水無く滌うて之を除く如くなるを言ふ、(山ニ木云)早魃は旱神の名。爲虐、人を助けず反て虐を爲す。「神異經」に南方に人あり、長二三尺、袒身にして目頂上に在り、走行風の如し。慊も焚も熏も皆同義、暑に苦しむ悲痛を言ふ。寧俾我逐、我位を去らんと欲するも、上帝は我の位を去るを許さずとなり。

早既大甚 黽勉畏去 胡寧瘳我以旱 愴不知其故 祈年孔夙 方社不莫 昊天上帝 則不我虞 敬恭明神 宜無悔怒

早既に大甚し、黽勉して去らんことを畏る、胡寧我を瘳ましむるに旱を以てする、愴ち其の故を知らず、年を祈ること孔だ夙く、方社すること莫からず、昊天上帝、則ち我を虞らず、明神を敬恭す、宜しく悔怒無かるべし、

【句釋】黽勉畏、「箋」曰く黽勉は禱請急なるなり、尤も畏るる所の者を去らんと欲す、尤も畏るる者は早なり。朱子曰く、黽勉畏去は出て之く所無きなり。王が出て之く所無きを謂ふなり。二説相違此の如し、今謂く朱子の説勝れるが如し、王が黽勉して其の位を去らざるなり。畏字に拘泥する者は義に於て得ず。胡寧は二字にて「ナンゾ」なり。瘳は病。愴は曾なり、何故に旱を強くして我を病しむる、其の故を知らず。祈年孔夙、「月令」に、孟冬天子年を天宗に祈る、注に天宗は日月星辰なり、孟春に天子元

日を以て穀を上帝に祈る。方社、方は四方を祭り、社は土神を祭る。不莫、莫は晩と同じ、期を違へずして祭るなり。不我虞、我が至誠の心を虞ざるなり。敬恭明神、神明を倒用して明神と言ふ、明神は神の名詞にあらず。宜無悔怒、早魃の神、我が敬恭する心を知らば、必ず悔い怒ること無くして宜しかるべしとなり。

早既大甚 散無友紀 鞠哉庶正 疚哉豕宰 趣馬師氏 膳夫左右 靡人不周 無不能止 瞻卬昊天 云如何里

早既に大甚し、散じて友紀無し、鞠まれる哉庶正、疚しき哉豕宰、趣馬師氏、膳夫左右、人として周はずといふこと靡く、能はずとして止むること無し、昊天を瞻卬いで、云に如何かりへん、

【句釋】散無友紀、「箋」曰く、人君は羣臣を以て友と爲す、散じて其の友紀無きは凶年祿餼不足、又賞賜無きなり。朱子曰く、友紀は有紀ならん、猶ほ綱紀と言ふが如し、今朱説に従がふ。紀綱法度、散亂して收取すべからざるなり。鞠哉は窮哉と同じ、精力の盡たるなり。庶正は衆官の長。疚哉は病哉と同じ。豕宰は衆長の長、此の二職禱祈賑救の事に心を究め、夙夜勞瘁を致す。趣馬は馬を掌るの官。師氏は兵を以て王門を守るを掌るの官。膳夫は食を掌るの官。左右は左右の羣臣。朱子曰く、歲凶にして年穀登ざるときは趣馬秣かはず、師氏は其の兵を弛め、膳夫は膳を徹し、左右布て脩めず。靡人不周、

周は救なり。無不能止、力にあらずと稱して逃れしことは無し、羣臣皆言ふ一人として百姓を周救せざる者あること無く、一人として不能と言うて遂に止めて爲さざること無しとなり。瞻仰は瞻仰と同じ。云如何里、里は憂なり、天に向つて此の勞倦を訴ふるなり。

瞻仰昊天 有嘒其星 大夫君子 昭假無贏 大命近止 無棄爾成 何求爲我

以戾庶正 瞻仰昊天 曷惠其寧

昊天を瞻仰げば、嘒たる其の星あり、大夫君子、昭かに假りて贏なし、大命近止、爾の成れるを棄つると無かれ、何ぞ求めて我が爲のみならん、以て庶正を戾めん、昊天を瞻仰いで、曷か惠あつて其れ寧んせん、

【句釋】嘒は嘒々然として衆星の明なる貌。嘒たる星の天に見えたるは天の未だ雨ならざるが故なり。

大夫君子は總て羣臣を指す。昭假無贏、朱子曰く、羣臣其の精誠を盡くして王を助け以て昭かに天に假る者已に餘り無し、至誠の天に假るを言ふ、身天に假るにはあらず。大命近止、無棄爾成、大命即ち死亡近からんとするも、決して自暴自棄して今日まで盡くせる精誠の功を空しくする勿れとなり。何求爲我、以戾庶正、『箋』曰く、女をして成功を棄る無からしむる者は、何ぞ但我が身の爲めにすることを求めん。在職以て衆官の長をして其の職事を憂ふるを安定せんと欲す。曷惠其寧、天果して曷れの時か我に恵むに安寧を以てするや。張子曰く、敢て雨を斥言せざるは畏懼の甚だしくして敢て必ずしも云はざるのみ。

るのみ。

【評論】雲漢は八章十句を以て成る。序曰く、雲漢は仍叔宣王を美むるなり、宣王厲王の烈を承け、撥亂の志あり、裁に遇うて懼れ、側身修行し、之を銷去せんと欲す、天下、王化復行はれ百姓憂へ見るるを喜ぶ、故に是の詩を作る。呂東萊曰く、宣王小雅始めて六月に於て其の功を言ふ、大雅始めて雲漢に於て其の心を言ふ、是の心無くんば、安んぞ是の功あらんや。『語類』問ふ雲漢の詩、乃ち他人宣王の意を述べ、然らば己を責むる處、ただ少なし、曰く然り。

崧高維嶽 駿極于天 維嶽降神 生甫及申 維申及甫 維周之翰 四國于蕃

四方于宣

崧として高きは維嶽、駿にして天に極れり、維嶽神を降し、甫及び申を生めり、維申及び甫は、維周の翰なり、四國于蕃ひ、四方于に宣ぶ、

【句釋】崧高維嶽『傳』曰く嶽は高き貌。山大にして高きを崧と曰ふ。嶽は四嶽なり、東嶽は岱、南嶽は衡、西嶽は華、北嶽は恆、堯の時姜氏四伯と爲り、四嶽の祀を掌り、諸侯の職を述べ。駿は高駿、極は至なり。降神生甫及申、『傳』曰く周に於ては甫あり申あり齊あり許あり。『箋』曰く、降は下なり、四

嶽は卿士の官、四時を掌る者なり、因て方嶽巡守の事を主る、堯時姜姓之を爲す。甫申齊許は其の苗胃なり。申は申伯、甫は甫侯。周之翰、翰は根幹、王を扶けて周の楨幹と爲る義なり。四國于蕃、四國難あるときは往て之を扞禦し之が蕃屏と爲る。四方于宣、四方恩澤至らざれば則ち往て之を宣暢す、宣王の舅申伯出で謝に封せらる、而して尹吉甫詩を作り以て之を送る、其の意、嶽山高大、其の神靈和氣を降して以て甫侯申伯を生む、實に能く周の楨幹屏蔽と爲て、其の德澤を天下に宣るなり、蓋し申伯の先、神農の後、唐虞の四嶽と爲り、總て方嶽の諸侯を領じて、嶽神の祭を奉ず、能く其の職を修め嶽神之を享く、故に此の詩申伯の生ずる所以を推本して以て嶽、神を降して之を爲すと爲すなり。

臺臺申伯 王纘之事 于邑于謝 南國是式 王命召伯 定申伯之宅 登是南

邦 世執其功

臺臺たる申伯、王之に事を纘がしむ、于に謝に邑して、南國是れ式らしむ、王召伯に命じて、申伯の宅を定め、是の南邦を登して、世其の功を執らしむ、

【句釋】臺臺は勉彊なり。申伯が事を執て勉彊するなり。王纘之事、王申伯の勉彊するを愛し之に諸侯の事を繼しめんと欲す。于邑于謝、謝は今日の河南省鄧州南陽縣に當る、此の謝を與へて其の國都と爲さしむ。南國是式、南方の國を統理し、其の法度を施さしむ、式は法則なり。王命召伯、召伯は召の穆

公虎なり、穆公は宣王の司空と爲る、司空は國邑を營むことを掌る役、王乃ち穆公に命を下して以て申伯の宅を定めしむるなり。登是南邦、世執其功、南邦即ち謝に居らしめ、且子孫をして其の職を執らしむ、申伯は先に申に封せられ、宣王紹ぎて謝に封せしむ。

王命申伯 式是南邦 因是謝人 以作爾庸 王命召伯 徹申伯土田 王命傅

御 遷其私人

王申伯に命じて、是の南邦を式せしむ、是の謝人に因つて、以て爾の庸を作らしむ、王召伯に命じて、申伯の土田を徹せしむ、王傅御に命じて、其の私人を遷さしむ、

【句釋】王命申伯、式是南邦。「箋」曰く、召公既に申伯の居を定む、王乃ち親ら之に命じ、法度を南邦に爲さしむ。因是謝人、以作爾庸、庸は城なり、謝國の人を用ひて以て他國の人を用ひず、此に城を作らしむとなり。王命召伯、徹申伯土田、「傳」に徹は治なりと。「箋」曰く、治とは其の井牧を正し其の賦税を定むるなり。各の田の等級を正しくし、其の租の多少を制せるなり。傅御は「傳」に事を治むるの官、申伯が家臣の長なり。遷其私人、私人は申伯の家人、其の家人をも主人と共に隨從して往くを許すは非常の恩命なるならん。

申伯之功 召伯是營 有俶其城 寢廟既成 既成藐藐 王錫申伯 四牡騶騶

鈎膺濯濯

申伯の功、召伯はれ營めり、其の城を倣むることあり、寢廟既に成りぬ、既に成りて藐藐たり、王申伯に錫ふ、四牡踳踳たり、鈎膺濯濯たり、

【句釋】申伯之功、召伯は營、申伯の國を樹るの事功は盡召伯の經營する所。有倣、倣は始作なり、城を始めて作る。寢廟は宗廟。藐藐は美なる貌。踳踳は四牡の壯なる貌。鈎膺は樊纓なり、前に辨せり。濯濯は光明の貌。

王遣申伯 路車乘馬 我圖爾居 莫如南土 錫爾介圭 以作爾寶 往近王舅 南土是保

王申伯を遣る、路車乘馬あり、我爾の居を圖るに、南土に如くは莫し、爾に介圭を錫ひ、以て爾の寶と作す、往近王舅、南土は保んせよ、

【句釋】王遣申伯、路車乘馬、是れ王申伯に命戒して謝に遣る時、路車即ち象輅四馬にて其甚だ盛んなり。我圖爾居、莫如南土、我は王の自稱、我圖るに爾が永住の地として、南土即ち謝の善きに如くは莫し、其の善きは富財を以て言ふならん。錫爾介圭、以作爾寶、介圭は諸侯の封せられたる證とす、長さ一尺二寸、天子の服する所、諸侯の圭にあらず、然るに之を錫ふ、是に於てか其の國寶とせよとなり、

諸侯の瑞圭は九寸以下なり。往近王舅、「傳」に近は已なり。此處にては音「キ」にして「キン」にあらず。「箋」曰く辭なり。申伯は宣王の舅なり。是保、俗語で之を言へば、別れに臨んで強かり頼むぞとの意なり。近は正字を近と書す、近は俗字と知るべし。

申伯信邁 王餞于郿 申伯還南 謝于誠歸 王命召伯 徹申伯土疆 以峙其糧 式邁其行

申伯信に邁く、王郿に餞せり、申伯南に還る、謝に于に誠に歸れり、王召伯に命じて、申伯の土疆を徹せしむ、以て其の糧を峙ましめ、式て其の行を邁にせり、

【句釋】信邁は實際に行くなり。郿は今日の陝西省鳳翔府郿縣なり、鎬京の西、岐周の東に當る、而して申は鎬京の東南、時に王岐周に在り、故に郿に餞するなり、留別の宴を郿水の上に開きしなり。還南、

「箋」曰く、北のかた王命に岐周に就いて還反するなり。謝于誠歸、誠に謝に歸るなり、始めて行くを歸と言ふは其の一生の歸宿する所なればなり、猶ほ女子の嫁するを歸と言ふが如し。「古義」に岐周は西北、稍東は郿、又東は鎬、而して謝は鎬の東南なり。徹申伯土疆、召伯をして土田の疆界を治めしむ、是れ申伯の爲めなり。式邁其行、邁は速なり、申伯をして途次を便にし、其の行を速からしむ。「孔疏」曰く、國野の道、十里に廬あり、廬に飲食あり、三十里に宿あり、宿に路室あり、路室に委あり、五十

里に市あり、市に候館あり、候館に積あり、宿は止宿すべし、候は觀望すべし、樓あればなり、一市の間に三廬一宿ある是れなり。

申伯番番 既入于謝 徒御嘽嘽 周邦咸喜 戎有良翰 不顯申伯 王之元舅

文武是憲

申伯番番たり、既に謝に入る、徒御嘽嘽たり、周邦咸喜ぶ、戎良翰あり、顯ならずや申伯、王の元舅、文武是れ憲とす、

【句釋】番番は勇武の貌。徒御嘽嘽、傳曰く諸侯大功あれば、則ち虎賁を賜ふ。徒御嘽嘽は徒行の者、御車の者、嘽嘽として喜樂するなり。朱子曰く、嘽嘽は衆盛を形容す。周邦咸喜、其の壯行を見て周國の臣民咸喜ぶなり。『箋』に周は徧なりと。謝の一國が徧く喜ぶとなり、二說共に通ず。然れども周國の臣民と見る方可なるが如し。良翰は良き楨幹、周人の良き楨幹たるを知るなり。不顯は顯なり、顯では無いかとの意。文武是憲、文王武王を以て憲と爲すとの説と、文武二道を以て憲と爲すとの説あり。後説是ならん。

申伯之德 柔惠且直 揉此萬邦 聞于四國 吉甫作誦 其詩孔碩 其風肆好 以贈申伯

申伯の德、柔惠にして且直し、此の萬邦を揉めて、四國に聞えたり、吉甫誦を作りて、其の詩孔だ碩なり、其の風肆に好し、以て申伯に贈れり、

【句釋】柔惠且直、惕齋曰く、柔德の善は仁に本づき、直は剛德の善、義に出づ。今日ふ仁義の説は後世の發達にて周の世必ずしも仁義を説かず、柔德と剛德とを兼備せりと見れば可なり。揉は矯て之を正すを言ふ、曲を揉めて之を直ならしむるなり。萬邦を柔順ならしむるなり。聞于四國、徳名が天下に聞ゆるなり。吉甫は姓は尹、周の卿士、文武を兼備せる名臣にして獵狃を征して功ありし人。作誦、工師誦する作の詞章を作るなり。其詩孔碩、碩は大、文詞壯大の調なり。其風肆好、肆は長なり、風は聲、樂師が誦する詞、甚だ好美に聞ゆるなり、詞調が壯大なればなり。以贈申伯、贈者受者共に其の人を得たり、

【評論】崧高は八章八句を以て成る。序曰く、崧高は尹吉甫、宣王を美むるなり。天下復平かに能く國を建て、諸侯を親み、申伯を褒賞す。

天生烝民 有物有則 民之秉彝 好是懿德 天監有周 昭假于下 保茲天子 生仲山甫

天烝民を生ず、物あれば則あり、民の秉れる彝、是の懿徳を好す、天有周の、昭かにして下に假れるを
監る、茲の天子を保け、仲山甫を生せり、

【句釋】天生烝民、烝は衆なり。有物有則、物は萬物なれど今人に就て言ふ、故に君臣夫婦長幼朋友等
と解す、而して君は君の法則あり、臣は臣、夫婦長幼、悉く法則あり、秉は執。彝は常。民が習熟に依
らず天性として秉る所の常道は、好是懿徳、懿は美なり、人の常性として美徳を好まざるは無し。天監
有周、昭假于下は二句一讀法と爲す。監は視、假は至、天周王の政教を視るに其の光明乃ち下に至り
て衆民に及ぶを言ふ。保茲天子、生仲山甫、天は天子を保翼する爲めに仲山甫を生ず、仲山甫は樊國の
侯、樊は東都の畿内にあり、(以上章)「左傳杜預注」に經傳に畿内の國侯男と稱する者を見ず、天子此の爵
を以て畿内に賜はらざるなり。是に由て之を觀れば樊侯と稱したる「傳」の説は其の據る所詳ならず。

仲山甫之徳 柔嘉維則 令儀令色 小心翼翼 古訓是式 威儀是力 天子是若

明命使賦

仲山甫の徳、柔嘉にして維則あり、儀を令くし色を令くす、小心翼翼たり、古訓是れ式とり、威儀是れ
力む、天子是れ若ひ、明命賦かむ、

【句釋】柔嘉維則、柔嘉なるが故に則あり、則あるが故に柔嘉なり。令儀令色、善儀相、善色容なり、

儀容は一身の總體、色容は顔色の柔くなり、令色は「論語」に於て小人に用ふ。此の詩に於て大人のこと
なり。小心翼翼、心を小て謹敬するなり。古訓は古聖賢の訓典なり。式は學習なり。威儀是力、有徳は
固より威儀の自て形はるる所、其の威儀を謹しむ者、亦簡攝して其の徳を養ふ所以なり。天子是若、若
は順なり、天子も賢臣の徳に於ては順はざる可らず。明命使賦、明王の政教を顯はし、羣臣をして之を
施布せしむ。王氏曰く、天子明命あり、則ち仲山甫をして之を賦せしむ。王氏説可なるが如し。

王命仲山甫 式是百辟 續戎祖考 王躬是保 出納王命 王之喉舌 賦政于外

四方爰發

王仲山甫に命じて、是の百辟に式たらしめ、戎の祖考を續いで、王躬是れ保んず、王命を出納して、王
の喉舌たり、政を外に賦いて、四方爰に發さしむ、

【句釋】式是百辟、辟は君、王が仲山甫に命ずるに其の職重く、所謂宰相として百國の君に法式を仲山
甫に求めしむ。續戎祖考、戎は女、王朝の上卿は冢宰なり、冢宰を以て大保を兼ねしむ、大保は世官な
るが故に祖考に續と言ふ、仲山甫を稱す。王躬是保、百官悉く王躬を保んずる爲めなれど中卿以下は
間接なり、直接に王躬を保佑する者は冢宰、即ち仲山甫なり。出納王命、王命を羣臣に傳へ、羣臣の事
を王に白す、出納の義此に在り。王之喉舌、喉と舌は言を出すの本、王命は政事を出すの本、以て喉舌

に譬ふる所以。賦は布なり。政于外、外は宮廷外を總して言ふ、天下一般なり。四方爰發、天下の諸侯是に於てか發應せざるは無し。仲山甫が内外の政事悉く處理する職分を言ふ。

解 以事一人
肅肅王命 仲山甫將之 邦國若否 仲山甫明之 既明且哲 以保其身 夙夜匪

肅肅たる王命、仲山甫之を將ふ、邦國の若否、仲山甫之を明にす、既に明且哲、以て其の身を保つ、夙夜解らず、以て一人に事ふ、

【句釋】肅肅は『箋』に敬なり、王の政教甚だ嚴敬なるを言ふ、而して仲山甫則ち能く之を奉行する。

若否、若は順、否は臧否の否の如し。善惡と同じ、邦國の善も惡も、仲山甫が之を明白にするなり。明は道理に明なり。哲は事情に哲なり。以保其身、利害を視るに明哲なるを以て其の身を保つと言ふにあらず。朱子曰く、天下の事理を曉り、理に順つて行へば、自然に災害其の身に及ばず、以て其の祿位を保つ可し。夙は朝、朝夕解怠せず。以事一人、一人とは天子を指す。

人亦有言 柔則茹之 剛則吐之 維仲山甫 柔亦不茹 剛亦不吐 不侮矜寡 不畏彊禦

人亦言へるあり、柔なれば則ち之を茹ひ、剛なれば則ち之を吐くと、維仲山甫、柔なるも亦茹はず、剛

なるも亦吐かず、矜寡を侮らず、彊禦を畏れず、

【句釋】人亦有言は他人に托して我が意を言ふ。柔則茹之、常人は柔即ち弱者を侮蔑して之を輕んず。

剛則吐之、剛者に會へば之を吐き出す。『箋』曰く、剛柔の口に在る、或は之を茹ひ、或は之を吐く、人の敵の彊弱に於けるに喩ふ。柔亦不茹、剛亦不吐、仲山甫は常人と反對、弱者を侮らず、強者を畏れず、食の柔剛を借て以て人の柔剛に喩ふるなり。徐士彰曰く、五六の二章は山甫の賢を言ふ、各の人言を以て之を起すは、常情此の如くにして山甫は然らざることを見はす、蓋し其の美德の全く凡民に異なる處、以て首章の意を終ふ。

人亦有言 德輶如毛 民鮮克舉之 我儀圖之 維仲山甫舉之 愛莫助之 衰職

有闕 維仲山甫補之
人亦言へるあり、徳の輶きこと毛の如くなれども、民克く之を舉ぐることに鮮し、我之を儀り圖るに、維

仲山甫之を舉ぐ、愛しむも之を助くること莫し、衰職闕ること有れば、維仲山甫之を補ふ、

【句釋】輶音「イウ」、訓「カロシ」、輕なり、後世輕を用ひ輶を用ひず。鮮克舉之、民皆徳の輶きを知る而かも之を實際に舉げたる者は甚だ鮮少なり、人人の固有するものなれば一毛の如く輶きなり、而れども眞に之を舉げたる者は仲山甫一人なり。愛莫助之、衆民は徳の愛すべきを知る、而かも之を舉げし仲

山甫を助くる者は無し。衰職有闕、王は衰冕を著く、故に衰職とは王職、即ち君王の職責なり、君王が職責に若し闕るものあれば、之を補ふ者は仲山甫なり。朱子曰く、蓋し惟ふに大人にして然して後、能く君の心の非を格す、未だ自から其の徳を擧ること能はずして而して能く君の闕を補ふ者はあらず。知言と謂ふ可し。

仲山甫出祖 四牡業業 征夫捷捷 每懷靡及 四牡彭彭 八鸞鏘鏘 王命仲

山甫 城彼東方

仲山甫出祖す、四牡業業たり、征夫捷捷たり、懷ふ毎に及ぶこと靡し、四牡彭彭たり、八鸞鏘鏘たり、王仲山甫に命じて、彼の東方に城かしむ、

【句釋】出祖は出征祖道なり、仲山甫が道祖神を祭り、出て旅途に就く。四牡業業、「傳」に業業は高大なり。朱子曰く、業業は健なる貌。朱説を可とす。捷捷は「傳」に樂事を言ふと。朱子曰く、疾き貌。朱説を可とす。馬は健なり、人は疾なり。每懷靡及、各の王命を重んじて、各の其の路を急げども、猶ほ其の及ばずして王命に背かんことを恐るるなり、懷は王命を懷ふなり。彭彭は「箋」に行く貌。鏘鏘は鸞聲を形容す。城彼東方、王仲山甫に命じて城を東方の齊國に築かしむる時、其の行の壯なるを言ふ詩なり。羅氏曰く、齊の世家に太公營丘に封せらる、五世に至りて胡公都を薄姑に徙す、子の獻公徙り

て臨菑に治む。薄姑は今日の山東省青州府博興縣、臨菑は同じく山東の臨菑縣なり。

四牡駉駉 八鸞喈喈 仲山甫徂齊 式過其歸 吉甫作誦 穆如清風 仲山甫永

懷 以慰其心

四牡駉駉たり、八鸞喈喈たり、仲山甫齊に徂く、式過かに其れ歸れ、吉甫誦を作る、穆たること清風の如し、仲山甫永く懷ひ、以て其心を慰む、

【句釋】駉駉は四馬の形容、彭彭と同じ。喈喈は八箇の鸞聲の形容、鏘鏘と同じ。式過其歸、齊に徂き其の用終れば一日も早く歸來して王躬を安んせよとなり、過は疾と同じ。穆は「箋」に和なり。清風の傳に清微の風とあり。吉甫が山甫を嘆じて作る詩を讀むときは、其の人の性を調和すること清風の萬物を長養するが如きなりと。永懷、仲山甫は其の職の重きを懷うて、其の心思を勞すること多し、是を以て此の詩を作り、慰其心、仲山甫の心を慰安せんとなり。

【評論】烝民は八章八句を以て成る。序曰く、尹吉甫宣王を美むるなり。賢に任じ能を使ひ周室中興す、詩の玄穆は論勿しと雖も、吉甫作誦、穆如清風の八字は、自贊に似たるが、本山甫の徳業を嘆ずるにあれば亦妨げなし。唐の寒山が我が詩を讀む者は、心宜しく護淨すべしと作りたるは、出典を此に求めしものなるべし。

奕奕梁山 維禹甸之 有倬其道 韓侯受命 王親命之 續戎祖考 無廢朕命

夙夜匪解 虔共爾位 朕命不易 榦不庭方 以佐戎辟

奕奕たる梁山、維禹之を甸めたり、倬たる其の道あり、韓侯命を受く、王親から之に命ず、戎の祖考を續ぎて、朕命を廢つること無かれ、夙夜に解らず、虔んで爾の位を共めよ、朕が命易めず、庭せざる方を榦して、以て戎の辟を佐けよ、

【句釋】奕奕は「傳」に大なり。梁山が大なるなり。梁山は韓國の鎮、今の陝西省西安府に在り。維禹は夏の禹王。甸之は之を治むなり。禹が水害を除ける處。有倬其道、倬は倬然、即ち明かなる貌、其道は倫道にあらず、歩道を言ふ、禹が土木を起して道大に通じたるなり。韓侯受命、韓は武王の後なり、韓侯が今土服を著けて來朝し、諸侯の錫命を受けて歸るなり。王親命之、王は誰と判明せず、然れども王の親授は事實なるべし。續戎祖考、傳に戎は大なりと。今「箋」の女を用ふ。女の祖考の遺業を續よとなり。無廢朕命、王命をも廢ること無く。夙夜匪解、虔共爾位、共は古の恭字なり。朕命不易、王が命する所のものは永く改易せず。榦不庭方、榦は正なり。王に朝せざる國を不庭方と言ふ、來庭せざるの方國なり、王命を用ひざる國を正すべしとなり。以佐戎辟、女が仰いで天子と奉ずる朕を佐けよと

なり。韓侯始めて立ち來朝し王命を受けて歸る、詩人此の章を作り以て之を送る。序に尹吉甫の作と言ふ、據る所を知らずと雖も、吉甫の才にあらざれば能はざるなり。朱子は信せず、余は吉甫の作と思ふなり。

四牡奕奕 孔脩且張 韓侯入覲 以其介圭 入覲于王 王錫韓侯 淑旂綬章

輦箒錯衡 玄袞赤舄 鉤膺鏤錫 鞞鞞淺蔑 鞞革金厄

四牡奕奕たり、孔だ脩く且張なり、韓侯入て覲ゆるに、其の介圭を以てす、入て王に覲ゆ、王韓侯に錫ふに、淑旂綬章、輦箒錯衡、玄袞赤舄、鉤膺鏤錫、鞞鞞淺蔑、鞞革金厄、

【句釋】孔脩且張、傳に脩は長、張は大、韓侯來朝の時、其の盛様此の如く四馬長大にして天子に覲ゆるを言ふ。韓侯入覲、以其介圭、韓侯が王庭に入て天子に覲え以て國より携へ來る介圭を獻じ、臣節を表するなり。王錫韓侯、王が韓侯に賜はる品物を以下に列ぬ。淑旂、交龍の章ある善旂なり。綬章、引て以て車に登る所の物采章あり、鳥羽或は旄牛の尾を染めて旂竿の上に著け以て爵位の章と爲す。輦箒は漆塗の箒以て車の藩と爲す。錯衡は文采を錯置せる車の衡なり。玄袞は身に著ける所、玄色の服に畫くに衰龍あるもの。赤舄は足の履く所、赤色の舄なり。鉤膺は馬に著ける具、鉤は「ムナガネ」、膺は「ムナガイ」、金鏤の飾ありて馬亦盛裝す。鏤錫、金の彫刻ある馬の額に當る具。鞞鞞は車の軾を皮にて包むを言ふ。淺蔑は淺襪なり虎の皮を以て其の軾を襪覆なり。鞞革金厄、鞞革は轡なり、金を以て小環と爲

し之を手に纏くものなり。厄は先輩「クビリ」と訓す。前章と參照せば要に分明す。

韓侯出祖 出宿于屠 顯父餞之 清酒百壺 其殺維何 包鼈鮮魚 其菽維何

維筍及蒲 其贈維何 乘馬路車 籩豆有且 侯氏燕胥

韓侯出祖す、出でて屠に宿る、顯父之に餞す、清酒百壺あり、其の殺維何ぞ、包鼈鮮魚、其の菽維何ぞ、維筍及び蒲、其の贈もの維何ぞ、乘馬路車、籩豆且あり、侯氏燕して胥ともにす、

【句釋】出祖の意前に辨あり。宿于屠、往にも還るにも祖神を祭る、今韓侯が朝覲を終て國に還るとき、の事を言ふ、屠は地名今日の陝西省西安府鄠縣なり。顯父は周の公卿、王命を受けて韓侯の歸を屠に餞けす。清酒百壺、美酒百壺を以て餞別とす、顯父の贈る物なり。殺は何ぞと言ふと。包鼈は煮たる河の鼈。鮮魚は新鮮の魚肉。菽は「傳」に菜殺とあり、野菜の「サカナ」なり。魚の「サカナ」は殺、菜の「サカナ」は菽と言ふ。筍は竹兒。蒲は蒲葦なり。其贈、餞するものは食ふもの、贈るものは乘馬路車なり。「籩」曰く、贈は送なり、王既に顯父をして之を餞せしむ、又送るに車馬を以てせしむるは厚意を贈る所以なり。人君の車に路車と曰ひ、駕する所の馬に乘馬と曰ふ。籩豆は殺菽を盛るの具。有且、「籩」曰く且は多き貌。侯氏燕胥、「籩」曰く諸侯京師に在て未だ去らざる者、顯父之を餞する時に於て、皆來り相與に燕す、其の籩豆且然として其の多きを榮とす。呂東萊は侯氏は韓侯を指すと云ふ。然らば韓侯一人

なり。謝疊山曰く、申伯の行、王親から之を餞し、韓侯の行、王顯伯をして之を餞せしむ、禮亦等差あるなり。徐士彰曰く、贈餞皆王之命す、路車乘馬は蓋し常制の外、特に行を贈るの儀あり、亦殊典とす、申伯は元舅、韓侯は同姓の親。

韓侯取妻 汾王之甥 蹶父之子 韓侯迎止 于蹶之里 百兩彭彭 八鸞鏘鏘

不顯其光 諸娣從之 祁祁如雲 韓侯顧之 爛其盈門

韓侯妻を取る、汾王之甥、蹶父の子、韓侯迎止、蹶の里に、百兩彭彭たり、八鸞鏘鏘たり、其の光を顯さざらんや、諸娣之に從ふ、祁祁たること雲の如し、韓侯之を顧みる、爛として其れ門に盈つ、【句釋】汾王は厲王なり。「籩」曰く、厲王堯に流さる、堯は汾水の上に在り、故に時人因て以て之に號す。汾水は今日の山西省平陽府霍州なり。甥は和訓「ヲヒ」姉妹の子を稱す。蹶父は周の上卿にして姞姓なり、厲王之婿なること知る可し、韓侯始めて錫命を受け諸侯となり、其れに就て娶れる故其の榮光甚だ盛んなり、乃ち知る韓侯の夫人は汾王之甥にして蹶父の子なるを。里は邑と同じ、百兩は車が百輛。不顯其光、車百輛に各の八鸞あり、此の如く盛んなるは韓侯其れ以て光榮と爲さざらん、光は自然に顯はれる道理なり。諸娣、娣は妹と同じ。從之、祁祁如雲、蹶父が夫人の禮を以て其の娘を韓侯に送る、凡そ諸侯妻を取る時、妻の同姓の諸侯二國より各の一女を以て之に從はしむ、之を媵と言ふ。本妻と二

媵と娣姪各の二人合して九人と爲る。「傳」に諸侯一取三九女とあり。祁祁は徐歩する様を形容す、如雲は其の多きを言ふ。韓侯顧之、爛其盈門、爛は爛爛然として美人の鮮明なるが韓侯の門に盈つとなり。詩の順序を云云する者は遂に詩を知らざるなり。其の事前に在て、而して章は後に在るを以て疑ふものは徐士彰の爲め笑はる。

厥父孔武 靡國不到 爲韓姑相收 莫如韓樂 孔樂韓土 川澤訃訃 魴鱖甫甫

麀鹿嘯嘯 有熊有羆 有貓有虎 慶既令居 韓姑燕譽

厥父孔武、武勇にして到らざるは靡し、韓姑が爲めに依を相るに、韓の樂しきに如くは莫し、孔武は韓の士、川澤訃訃たり、魴鱖甫甫たり、麀鹿嘯嘯たり、熊あり羆あり、貓あり虎あり、慶して既に居ら令む、韓姑燕譽なり。

【句釋】厥父孔武、靡國不到、武勇の士にあらずんば各國を踏破し難し、如何なる害に遭ふも料られざればなり、然るに厥父は武勇にして、各國を縦横に闊歩せしなり。爲韓姑相收、莫如韓樂、厥父が各國を視察して、子の爲め嫁せしむる國を何處にせんと思ひしに、韓を以て第一の樂處と定めたるなり、依の字は所と同じ。孔樂韓土、上を承けて樂の孔だしく善きを言ふ。川澤、川は解し易し、澤は地形卑下にして衆水の鍾る處を言ふ。訃訃は大の形容。魴は赤尾魚。鱖は「ハソ」。甫甫も亦大の形容。麀は牝鹿。

鹿は牡鹿。嘯嘯は多き形容。熊は「クマ」。羆は熊に似て黄白の獸。貓は虎に似て淺毛、而して虎あり。川には大魚あり、山には猛獸あり、韓國の物産頗る饒富なるを言ふ。慶既令居、厥父は子の爲め此の如き國を擇びたるを慶んで之に居らしむるに決心したるなり。韓姑燕譽、韓姑も亦之に安んじ其の婦道を盡くして、顯譽あるなり。

溥彼韓城 燕師所完 以先祖受命 因時百蠻 王錫韓侯 其追其貍 奄受北國

因其伯 實墉實壑 實畝實籍 獻其貔皮 赤豹黃羆

溥なる彼の韓城、燕師の完うせし所、先祖命を受け、時の百蠻に因りしを以て、王韓侯に、其の追其の貍を錫ふ、奄に北國を受けて、因て以て其の伯とせり、實に墉し實に壑し、實に畝し實に籍し、其の貔皮、赤豹黃羆を獻せり、

【句釋】溥は「箋」に大となり。韓城は頗る大。燕師所完、「箋」曰く、燕は安なり、大なり、韓國の城は古平安の時、衆民の築き完うせし所。朱子曰く、燕は召公の國なり。燕安にあらず國名と爲すを正しとす。韓始めて封せられし時、召公は司空の職たり、王命じて燕の衆人を以て其の城を築きしなり。以先祖受命、因時百蠻、韓の先祖は武王の子なり、先王の命を受けて韓侯と爲り、韓城に居り侯伯と爲る。其の州界外蠻服に接す、因て時に百蠻貢獻の往來を節せしめらる。王錫韓侯、其追其貍、奄受北國、因

以其伯、追も須も戎狄國の名。韓侯が先祖との關係深き地なるを以て今王之を錫うて以て其の伯と爲し、奄に其の北國の蠻勇を引き受けて之を治めしむとなり。實塘實壑は其の城を高くし、其の壑を深うするを言ふ。實畝實籍、其の田畝を治め、其の税法を正さしむるなり。籍は税なり。貔は「説文」に豹の屬とあり。「爾雅」に白狐とあり。陸機曰く、虎に似たり、或は云ふ熊に似たり。遼東の人之を白熊と謂ふ、異説此の如し今判定し難し。赤豹黃熊、赤色の豹皮や黄色の熊皮や白色の貔皮を貢獻せりとなり。【評論】韓奕は六章十二句を以て成る。序に曰く、尹吉甫宣王を美むるなり、能く命を諸侯に錫ふと。朱子曰く、未だ必ずしも序説の如くならず。蓋し未詳なり。

江漢浮浮 武夫滔滔 匪安匪游 淮夷來求 既出我車 既設我旗 匪安匪舒

淮夷來鋪

江漢浮浮たり、武夫滔滔たり、安んずるにあらす游ぶにあらす、淮夷に來り求めんとなり、既に我が車を出し、既に我が旗を設つ、安んずるにあらす舒ぶにあらす、淮夷に來り鋪ねんとなり、【句釋】江漢は江水と漢水となり。浮浮は「傳」に衆彊の貌とあり。朱子曰く、水盛の貌と。共に通ず。武夫は武人即ち軍士なり。滔滔は「傳」に廣大の貌とあり。朱子曰く、順流の貌と。朱説を以て可とす。

江漢湯湯 武夫洗洗 經營四方 告成于王 四方既平 王國庶定 時靡有爭

王心載寧

江漢湯湯たり、武夫洗洗たり、四方を經營して、成を王に告げたり、四方既に平らぎ、王國庶はくは定まらん、時に爭有ること靡し、王の心載ち寧し。【句釋】洗洗は「傳」に武き貌。經營四方、告成于王、「箋」曰く、召公既に命を受けて淮夷を伐ち之を服し、復四方の叛國を經營し、從て之を伐ち克く勝てば、則ち傳遽をして功を王に告げ使む。四方既平、王國庶定、四方平らかなれば王國即ち畿内の定まること明白なり。時靡有爭、王心載寧、天下爭ふ者靡あつとは王の心安寧なり。是れ亦自明の語なり。

江漢之詩 王命召虎 式辟四方 徹我疆土 匪狄匪棘 王國來極 于疆于理 至于南海

江漢の詩、王召虎に命じ、式て四方を辟き、我が疆土を徹せしむ、疚ましむるにあらず棘にするにあらず、王國に來り極さしめんとたり、于に疆り于に理ちて、南海に至れり、
【句釋】詩は水涯なり。召虎は召穆公なり、穆公未だ歸國せず猶江漢の詩にあり。王再命を下すなり。
式辟四方、徹我疆土、『箋』曰く、公、王命を以て四方を開辟し、我が疆界を天下に治めしむ。匪狄匪棘、『箋』曰く、兵を以て之を病害すべきにあらず、兵を以て急躁し之を切すべきにあらず。即ち民の病むにも頓著せず、事を急に改めんと欲するにはあらず。王國來極、『箋』曰く、王國に來りて政教の中正を受けしむるのみ。齊の桓公、陳鄭の間を經、及び北戎を伐つは、則ち此の言に違ふ者なり。極は中の表中に居て四方其の正を取るなり。于疆于理、至于南海、『箋』曰く、召公、叛辰あるの國に於て、往きて其の境界を正し、其の分理を修め、四方を周行して、南海に至り、功大成し事終るなり。

王命召虎 來句來宣 文武受命 召公維翰 無曰予小子 召公是似 肇敏戎公 用錫爾祉 王召虎に命じ、來り句くし來り宣べしむ、文武命を受けしとき、召公維翰なり、予小子と曰ふこと無か

れ、召公を是れ似ぐ、戎の公を肇き敏くせば、用て爾に祉を錫はん、
【句釋】來句來宣、句は『傳』に徧なり。『箋』曰く、營に作るべし、宣は徧なり。朱子曰く、句は徧なり、宣は布なり。朱説を可と爲す、一般に徧布せしむるなり。文武受命、召公維翰、此の召公は召虎の始祖、召康公名は奭なり、王召虎に命じて曰く、女四方を經營するに勤勞し、徧く衆國を疆理するに勤勞す、昔文王武王、命を受けしとき、召康公之が楨幹の臣たり、以て天下を正す。虎が勤勞するが爲めの故に其の祖の功を述べて以て之を勸むるなり。無曰予小子、召公是似、『箋』曰く、女自から減損し我小子と曰ふこと無きのみ、女の爲す所、乃ち女の先祖召康公の功を嗣(似)なり。特に王事に勤勞すと曰ふこと無かれ、唯乃祖の功を似ぐのみなり。肇敏戎公、戎は女、公は事。用錫爾祉、『箋』曰く、今女の事を謀るに敏徳あり、我是を用ての故に女に福慶を錫はらんとす。王虎が志大謙の爲めの故に之を進めて爾云ふ、穆公は康公の十六世の孫。

釐爾圭瓚 秬鬯一卣 告于文人 錫山土田 于周受命 自召祖命 虎拜稽首 天子萬年

爾に圭瓚、秬鬯一卣を釐ふ、文人に告して、山土田を錫ふ、周に于て命を受け、召祖の命に自ふ、虎拜稽首す、天子萬年なれと、

【句釋】釐は賜と同じ、王召虎に賜はる策命の詞を述ぶるなり、爾は召虎なり。圭瓚は玉。秬鬯は黒黍にて製せる鬯酒、前に詳辨せり。卣は訓「タル」樽と同じ、此等の下賜は盡な祖先を祭らしむる爲めなり。告于文人、祖先の文徳ある人の靈に告すなり。錫山士田、召虎に錫ふに山川士田の封を豊かにし其の功勞を稱するなり。于周受命、召虎岐周に于て山川士田の使命を受るなり。自は從なり。召祖命、今其の行ふ所の禮、其の祖召康公封を受るの禮を用ふるなり。虎拜は首地に至る。稽首は頭を屈して地に至る、而して首地に至りて稽留すること少時するなり、恭敬の極なり。天子萬年、君恩の謝すべき無し、是を以て萬年も聖壽を保ち玉へと祝願する、天子に對する最敬禮の文字なり。徐士彰曰く、釐爾の四句は錫予と爲す、是れ策命の詞、于周の二句寵異と爲す、是れ敘事の詞、案ずるに此の六句大都策命の意を以て櫛括して文を成す、正に必らずしも拘泥せざるべし。

虎拜稽首 對揚王休 作召公考 天子萬壽 明明天子 令聞不已 矢其文徳

洽此四國

虎拜稽首して、王休を對揚す、召公に考れることを作す、天子萬壽なれ、明明たる天子、令聞已ます、其の文徳を矢べて、此の四國に洽からしむ、

【句釋】對揚王休は虎既に祖廟に拜稽首して王の策命に答ふるの辭なり、王の美德を稱揚するなり、休

は美と訓む。作召公考、考は成なり、王命を以て祭器に銘刻するは永く變らざるの意なり、是れ自らの事に屬して、而して天子萬壽は則ち之を策命の下に刻むなり、上章の天子萬年は口に誦すること知る可し。明明天子、令聞不已、矢其文徳、洽此四國、此の四句は盡な天子を稱揚する辭、明明は暗暗の反對、令聞は善聞なり、惡聞の反對、武功に依て已に令聞あり、此の上は其の文徳を陳矢べて教化を四方の國に洽及せんとなり。洽の字は文徳の故に響く、武徳なれば平の字と爲す、是に至り文徳武徳悉く頌し終る。

【評論】江漢は六章八句を以て成る。序説に依れば尹吉甫が宣王を美むる詩と爲す、宣王能く衰を興し亂を撥ひ、召公に命じて淮夷を平らげしむとなり。朱子は單に詩人の詩とし吉甫の詩とせず。蓋し此等の作者は斷定すべからず。

赫赫明明 王命卿士 南仲大祖 大師皇父 整我六師 以修我戎 既敬既戒 惠此南國

赫赫明明、王卿士の、南仲を大祖とする、大師皇父に命ず、我が六師を整へ、以て我が戎を修めよ、既に敬し既に戒しめ、此の南國を恵しめよと、

【句釋】王命以下の十二字に就て古來の訓點異同あり。「傳」曰く、王、南仲を大祖に命じ、皇甫を大師と爲す。「箋」曰く、南仲は文王の時の武臣なり、顯著なり昭察なり、宣王の卿士を命じて大將と爲すや、乃ち其の南仲を以て大祖と爲す者を用ふ、今大師皇父是れなり。朱子曰く、卿士は即ち皇父の官なり、南仲は文王の時、獵猶を伐ちし人なり、大祖は始祖なり、大師は皇父の兼官なり、之を要するに今將と爲る皇父は其の祖先是南仲にして、其の官は卿士なりと見れば意味通するなり。整我六師、以修我戎、宣王が皇父に命する詞なり、女我が六軍を整齊して以て其の兵甲の事を治めよとなり。師は軍人、戎は軍器なり。既敬既戒、惠此南國、「箋」曰く、敬は警なり、六軍の衆を警戒し以て淮浦の旁國を惠しむ、勅して以て暴掠の事無からしむるを謂ふ。萬時華曰く、夷王厲王以來、威靈振はず、泯泯滅滅するに幾し。宣王奮然として親ら六師を總べ、眞に雷霆下り驚き、日月重て朗なるが如し。故に赫赫明明と曰ふ。王命は宣王の親命なり、皇父を以て大將と爲す、故に須らく親しく之を命すべし。孔云ふ、宣王中興の君、皇父賢才の將を以て、叢爾の徐土を征する、其の重く慎むこと此の如くなるは、兵は凶器、戦は危事なり、忽にすべけんや、王の明顯以て之に命するは道なり、臣の重慎以て之に臨むは法なり、宣王中興斯の如くにして正し。

王謂尹氏 命程伯休父 左右陳行 戒我師旅 率彼淮浦 省此徐土 不留不處

三事就緒

王尹氏に謂して、程伯休父に命せしむ、左右行を陳ね、我が師旅を戒しめ、彼の淮浦に率ふ、此の徐土を省せしむ、留まらず處らず、三事緒に就かしめよ、

【句釋】王は宣王。尹氏は尹吉甫なり、尹氏は世大夫の位たり。程は邑名。伯は爵。日本の語とすれば武藏守と言ふが如し。休父は字、今皇父の副將軍として、其の策命を受るなり。左右陳行、以下の文字は盡な策命の詞、左右に行列して陣を前むるなり。戒我師旅、師團と旅團とを警戒して軍法を嚴にす、五百人が旅にして、二千五百人が師なり。率彼淮浦、率は循なり、淮浦に沿うて行く。省は省察なり。徐は東海に接し、北は泰山、南は淮水、即ち淮北は夷人の處る所、徐戎淮夷は伯禽封に就くの初より同惡相擠し、其の來ること素あり、今又相挺て起ち、禍を爲す淺からず、是を以て王親征するなり、今日の江蘇省徐州府銅山縣治は即ち此の徐なり。不留不處、征伐功成らば軍隊を駐屯せざれとなり。三事は朱子曰く、未詳、或は曰ふ三農の事なりと、三農九穀を生ずとの古語に依る。原と濕と平地とを以て三農とす。就緒、各の其の緒業に就て研作せしめよとなり、眞に王者の軍と謂ふ可きなり。

赫赫業業 有嚴天子 王舒保作 匪紹匪游 徐方釋騷 震驚徐方 如雷如霆 徐方震驚

赫赫業業として、嚴なる天子あり、王舒に保じ作り、紹にあらず游にあらず、徐方釋騷す、徐方を震驚

【句釋】赫赫然として盛、業業然として動くなり。王師征に赴く途上を言ふ。有嚴天子、嚴然たる天子自から將たり。王舒保作、舒は徐、保は安、作は行なり、軍行の整正紊れざるなり。匪紹匪游、紹は懈、游は敖游、懈けず敖らず、終始一の如し。徐方釋騷、釋は連絡、騷は騷動なり。徐方の夷人王師を見て驚き頻りに騒ぐなり。震驚徐方、如雷如霆、王師が徐方を震驚せしむること、宛かも雷霆の人を恐怖せしむるが如し。徐方震驚、徐人の王師に對して震驚すること亦雷霆の如くなり、上句は我より驚かすなり、下句は彼より驚くなり、如雷如霆は更に一句あるものと知る可し。

王奮厥武 如震如怒 進厥虎臣 闕如虺虎 鋪敦淮漬 仍執醜虜 截彼淮浦

王師之所

王厥武を奮ふこと、震の如く怒るが如し、厥虎臣を進むれば、闕として虺虎の如し、淮漬に鋪き敦うして、仍いて醜虜を執ふ、截たる彼の淮浦、王師の所、

【句釋】王震以下の諸句、王師既に徐に至り、其の兵威を示す態を言ふ。震は雷なり。虎臣は兵の彊きを言ふ。闕は闕然、奮ひ怒る貌。虺は虎の自から怒る貌、大將も士卒も共に其の勇氣の壯なるなり。鋪

敦は厚く其の陣を集むる也。潰は水濱なり。仍は就なり。醜は美醜の醜に非ず、衆の義なり、多勢の虜を執ふる也。截は截然、截然として犯し難き也。淮浦は王師の陣する所、夷人決して犯すを得ざる也。

王旅嘽嘽 如飛如翰 如江如漢 如山之苞 如川之流 緜緜翼翼 不測不克

濯征徐國

王旅嘽嘽たり、飛ぶが如く翰つが如し、江の如く漢の如し、山の苞の如く、川の流の如く、緜緜翼翼たり、測られず克たれず、濯に徐國を征す、

【句釋】旅は多くの兵と見るべし。嘽嘽然として盛なり。「箋」に嘽嘽は餘力あるの貌と。飛、翰、江、漢の四如は兵士が敏速の動作を形容す、天も地も自由なるを言ふ。苞は「傳」に本なりとあり、山の本は如何なる力者も動す能はず。流は如何なる勇者も留むる能はず。緜緜は絶つべからざるなり。翼翼は亂るべからざるなり。不測不克、兵機妙算は測る可らず、測る能はざる兵に何ぞ克つことを得ん、此の如くにして濯に徐國を征せしなり。濯は大なり。此の章は極めて王師の敵無きを言ふ。

王猶允塞 徐方既來 徐方既同 天子之功 四方既平 徐方來庭 徐方不回

王曰還歸

王の猶允に塞てり、徐方既に來れり、徐方既に同じうす、天子の功なり、四方既に平ぎ、徐方庭に來れ

り、徐方回はず、王曰く還り歸らん、
【句釋】猶は「釋詁」に謀なり又道なりと。「傳」は謀を取り、朱子は道を取る。今道に従ふ。王が征せし道は允に既に塞り。「箋」曰く王兵を重んず、兵之に臨むと雖も、尙ほ信を守りて自から實満す、兵未だ陳せずして徐方より既に歸服し來るなり。既同は徐人が一齊に王に服して反對する者無きを言ふ。既平、全く平定するなり。來庭、王庭に來朝するに至る、而して功は皆天子の徳に歸す。不同は違はざるなり。還歸は王師が凱旋するなり。

【評論】常武は六章八句を以て成る。「序」曰く、常武は召穆公宣王を美むるなり、常德ありて以て武事を立つ、因て以て戒と爲す。朱子曰く、詩中に常武の字無し、特に其の篇に名く二義あり、常德ありて以て武を立るときは可なり、武を以て常と爲すときは不可なり、此れ美あり戒ある所以なり。

瞻印昊天 則不我惠 孔填不寧 降此大厲 邦靡有定 士民其瘵 孟賊孟疾
靡有夷屆 罪罟不收 靡有夷瘳
昊天を瞻印するに、則ち我を惠しませず、孔た填しく寧からず、此の大厲を降せり、邦定まること有ること靡し、士民其れ瘵みぬ、孟賊孟疾、夷屆有ること靡し、罪罟收まらず、夷瘳有ること靡し、

【句釋】印は仰なり。昊天は王を指す。則不我惠、我は一人が多勢を代表しての我なり、民を惠愛せざるなり。填は久なり。安寧ならず。降此大厲、厲は惡なり、幽王は民を愛せざるのみならず翻て大惡を民に降す。邦靡有定、國家民生が安定を得るなし。瘵は病なり。孟賊は苗を害する蟲、以て小人に比す。孟疾は孟の苗を害する如く小人は害を爲す、疾は害なり。夷は平。屆は極、平らぎ極まるときなし。罪罟不收、靡有夷瘳、罪の罟を常に張り、罪無きもの多く之に繋る、是れ大なる病にして、此の病も平癒するとき靡し、幽王褒姒に迷ひ常に小人の言を容れ惡を爲すを悲しむなり。

人有土田 女反有之 人有民人 女覆奪之 此宜無罪 女反收之 彼宜有罪

女覆説之
人土田あれば、女反て之を有り、人民人あれば、女覆て之を奪ふ、此の宜しく罪なかるべきに、女反て之を收へ、彼の宜しく罪あるべきに、女覆て之を説せり、
【句釋】女は幽王を指す、故無くして諸侯及び卿大夫の所有を削黜するを言ふ、一は罪無きに拘收せられ、一は罪有るに反て赦さる、順逆顛倒して民に害あるを言ふ。

哲夫成城 哲婦傾城 懿厥哲婦 爲梟爲鴟 婦有長舌 維厲之階 亂匪降自天 生自婦人 匪教匪誨 時維婦寺

哲夫は城を成し、哲婦は城を傾く、懿厥哲婦、梟と爲り鴟と爲る、婦の長舌あるは、維厲の階なり、亂るるは天より降るにあらず、婦人より生る、教に匪誨に匪誨するは、時維婦と寺、

【句釋】哲夫は知達之士を言ふ。成城は城は即ち國、國を國と成す者は哲夫なり。哲婦傾城、「箋」曰く、丈夫は陽なり、陽は動く、故に多く謀慮すれば則ち國を成す。婦人は陰なり、陰は靜なり、故に多く謀慮すれば則ち國を亂るなり、是れ褒姒を指す。懿は「箋」に痛傷する所あるの聲、アアと稱するなり。厥哲婦爲梟爲鴟、梟も鴟も共に「フクロ」惡聲の鳥なり。褒姒と稱する女は此の梟鴟の如き者なり。婦有長舌維厲之階、長舌は即ち多言の事、婦人の多言なるは是れ禍亂の階梯たるなり、乃ち天下の亂は婦人の多言なるより來る、天の降せるものにあらず。匪教匪誨、「箋」は人の王に教誨して惡を爲すものにあらずと解す。朱子曰く、婦と寺とは教誨の益あるものにあらずと。「箋」の説否、朱説是なり。寺は侍なり奄寺と稱する下等の人間なり、去勢せられて宮中に在り、君側の用に供す、奄は精氣が外に發せず、内に籠るが故なりとの説あり、漢以後の宦官なる者乃ち是れ一種悲慘なる人間なり、強て不具者となれる者なれば良心の有る筈無し、婦と共に惡事を爲すは亦當然なり。

鞫人伎忒 譖始竟背 豈曰不極 伊胡爲慝 如賈三倍 君子是識 婦無公事 休其蠶織

人を鞫めて伎り忒れり、始に譖り背に竟る、豈極ますと曰はんや、伊胡ぞ慝しと爲ん、賈の三倍する如き、君子是を識る、婦は公事なきに、其の蠶織を休たり、

【句釋】鞫は窮なり、人をして言を發せしめざるなり。伎は害。忒は變、人を窮迫して害變を加ふるなり。譖始竟背は不信に始まり背違に竟る。豈曰不極、自から其の言の放恣にして極む所無しと謂はざるなり。伊胡爲慝、慝は惡なり、此の位な些細な事は惡と爲すに足らずと言ふなり。如賈三倍、君子是識、賈は商人、商人が物を賣る原價の三倍も高くして平然、君子は是を默識するにあらずや。婦無公事、休其蠶織「傳」曰く休は息なり、婦人は外政に與ること無し、王后と雖も猶蠶織を以て事と爲す、其れ賈の利を謀る小人の知るべき事、君子の知るべき事にあらず、而して君子之を知るは宜しき事にあらず、今婦人其の蠶桑織維の職を休息して而して朝廷の事に與かる、其の宜しきにあらずと爲すは亦猶是の如きなりと、婦が惡口を言ふなり。孔子曰ふ、女子と小人とは養ひ難しと。宜なるかな。

天何以刺 何神不富 舍爾介狄 維予胥忌 不弔不祥 威儀不類 人之云亡 邦國殄瘁 天何を以てか刺むる、何ぞ神富ましめざる、爾の介狄を捨て、維予を胥忌めり、不祥を弔せず、威儀類せず、人の云に亡き、邦國殄瘁せん、